
とある転生者は決闘者で・・・

ラドゥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある転生者は決闘者で・・・

【Nコード】

N3263W

【作者名】

ラドゥ

【あらすじ】

俺の名前は不動遊里。

アニメとラノベ。ゲーム王が好きなこと以外は、ちょっと靈感があるだけの普通の大学生さ。

そんな俺は今困惑している。だってしょうがないだろう。

まったく見覚えのない場所で起きたと思ったら、どこかで見たこ

とのある、うさみみをつけた女が目の前に現れたんだから……

主人公はちよつとオタクで、以外に面倒見のいい「別によくねえし……」真の決闘魂（笑）「（笑）ってなんだ、（笑）って……」を持つ霊感決闘者。「まあ……まちがっちゃいないが……」

そんな彼がは、死んでしまったと思つたら、神『タバネ』の手により、GXの世界に転生する。

志望フラグ満載のこの世界で彼が傍観者に徹しようとする。「死にたくねえし」

ところがどつこい、彼の持ち前のフラグ（笑）体質で、彼はいろんな事件に巻き込まれてしまう。「おiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!」

しかも彼の身内も明らかに以上で、「なんでこいつらが……」

さあ、不動遊里から更識遊里ほんしき ゆうりになった我らが転生オリ主（笑）は、作者の魔手をかいくぐり、平穩を手に入れることはできるのか!!「お前の仕業か作者ああああ!!!!!!」

作者はなにぶん初めて小説を書くので、いろいろいたらぬところがあると思いますが、どうか、やさしい目でみてやってください。お願いします。

9 / 6 あらすじ修正しました

プロローグ？ 主人公はうさみみにあって・・・9/6修正しました(前書き)

どうも、はじめまして、ラドウです。

みなさんの小説を読んでいて、自分も書きたくなって、投稿してみました。遊戯王gxの世界に、isをクロスさせてみました。(といっても兵器としてのisはできませんが・・・)

なにぶん処女作なのでいたらぬところがあると思いますが、生温かい目で見守ってやってください。おねがいします。

プロローグ？ 主人公はうさみみにあって・・・9/6修正しました

サイド：？？？

起きたら目の前に兎がいた。

いや、自分でもなにをいつているのかと思うが実際にいるのだからしょうがない。まあ、正しくはうさぎではないのだが・・・

「やあ、やっと起きたね」

自分の顔を覗き込んでいた女性がフレンドリーに話しかけてくる。

そう、ただしくはうさぎではなく、うさみみをつけた女性である。

彼女の格好は、一言でいえば『異色』そのものである。

空のように真っ青なワンピース。それはさながら童話『不思議な国のアリス』のアリスである。エプロンと背中の大きなリボンが目を引く。

顔立ちは、おそらく10人中10人が『美女』と評すであろう美貌だが、まるで何年も寝ていないかのような、そのクマがついた不健康に淀んだツリ目がそれを台無しにしている。

体はすらっと伸び、均整が取れたしなやかな曲線を描いている。

そしてなによりも目立つのは、その豊満な胸の膨らみであった。

サイズがあつていないのか、バストを留めるボタンはギリギリまで引つ張られ、その白いブラウスの隙間からは妖艶な大人の肌色が覗いている。

それに加えて頭のカチューシャも問題といえば問題だろう。なにせ、それには白ウサギの耳がついているのである。つまり一人『不思議のアリス』状態なのだ。

年齢21になるが、これほど異常な格好をしている人間は見たことがない。というか普通の人間はこんな人物は見る機会などないだろう。しかし、自分でその自分の思考に違和感を覚える……

(いや……俺はどこかでこいつを見たことがある……)

しかし、自分はごく普通の大学生。しいていえば、アニメやラノベ。特に遊戯王OCGはヘビューザーといえるほどにハマっているが、それ以外は特に特徴がないはずだ。こんな変人の知り合いなんて……

(うん……?……ラノベ……?……)

そういえば、最近ハマったラノベがあつた。

それは『ある兵器』のおかげで『女尊男卑』になつた世界で、女性しかうごけないはずのその兵器を動かしてしまった主人公が活躍する学園ラブコメ。

ただのラブコメと思うことなかれ……、バトルあり、謀略ありで、とてもひきこもる作品だ。まあ……個人的に主人公の鈍感ぶりが、「いくらラノベのなかの話でもありえないだろう」というくら

いだったのも印象的だったが・・・。

たしか最近アニメにもなったなあ・・・。「ある兵器」のデザ
インも格好よかった。

その兵器の名前は『インフィニット・ストラトス』、この作品の
タイトルと同じ名前の兵器である。この兵器の製作者は、キャラの
濃い登場人物が多い中でも、特にキャラが濃い人物で、名前は・・・

「篠ノ之^{しののへ}東^{あづま}・・・???.」

そう、目の前の人物は『インフィニット・ストラトス』の製作者、
『篠ノ之 東』にそっくりなのである。

その人物は『俺』の言葉に一瞬目をみはると、にっこりと満面の笑
みをつかべる。

「なんで君はタバネさんの名前をしってるのかなあ・・・？タバネさ
ん自己紹介はしてなかったはずなんだけど・・・？」

『俺』はそのセリフに内心焦った。それもそうだが、自分は彼女と
は面識がないはずである。その自分が彼女の名前をしっている。

自分が彼女の立場だったら、ただの不審者だと思っただろう。しか
し、まさかライトノベルで彼女のこと知ったともいえず、（彼女が
本物の彼女かどうかはともかく）言葉につまる。

「えっと・・・、その・・・あの・・・」

『俺』がテンパっているよ、

「・・・くつく・・・くくく・・・あははははははは!!!!」

彼女『篠ノ之 東』（？）が突然笑い出す。突然の大爆笑に、頭の処理が追い付かず固まっていると・・・

「ごめん、ごめん。タバネさんちょっといじわるしちゃった・・・」

「へ？」

我ながらマヌケな声をだしてしまった。

「本当は君がタバネさんの名前をしってる理由もしってるよ。ねえ・・・不動遊里君？」

「!!!!・・・なんで俺の名前知って・・・??」

『俺』、『不動遊里』の疑問に彼女は、

「うーん、ちょっと長いなやっぱり。いい呼び方考えないと・・・」

わりとどうでもいいことを考えていた。

「あの・・・」

「やっぱり仲良くなるにはよびかたって大切だよね・・・」

「ちょっと・・・」

「ゆうちゃん、ゆうくん、それともゆうくんかなあ、思いきって呼び捨てもありかも・・・」

「おい・・・」

「どれも捨てがたいなあ」

「・・・・・・」

「よし！！君はこれからゆうくんにしよう！！いつくんとおそろいだね。やった！！・・・あれ？なんでタバネさんの頭をつかむのかなあ。あたまはつかむものじゃ、あああああたたたたたた！！いたたたた、いたい、いたいよゆうっくううううん。愛がはげしい！！！！！！」

「俺はゆうっくんなんて名前じゃねえし、あんたを愛してるわけじゃねえし、俺の質問にこたえろおおおおお！！！！」

俺は必殺のアイアンクローを目の前のうさみみに使う。俺は女に暴力を使わない主義だが、これは仕方ないと思う。俺の話の聞こえないこいつが悪い。

「うっうっうっ・・・うさみみぱわー！！！！！！」

目の前のうさみみが突然叫びだすと、目の前に光が生まれた。

「うお！！なんだこれ！！！」

あまりのまぶしさに目をつむり、気がつくまで俺のアイアンクローからうさみみは抜け出していた。

「あんだ・・・いまなにを・・・」

「ひどい、ひどいよゆっくん、いくらタバネさんが神様でも、痛いものは痛いんだからねええ!？」

俺の疑問の声を、目の前のうさみみがさえぎる。話を途中で遮られたことに少しイラっときたが、確かにいまのはやりすぎたかもしれない。

「いちおう、いちおう目の前のうさみみも女性なのだ。・・・たぶん・・・」

「いちおうってなに、いちおうって!!それにタバネさんはみたまんま女性なのに、なんでたぶんとかつけちゃうのかなあ!？」

「わかった、わかった、俺がやりすぎ・・・ちよつとまで、お前さつきなんていった・・・??？」

なにか聞き逃せないセリフがあった気がしたのだが・・・

「ふえ？えっと『いちおうってなにいちお』それじゃなくて、その前のセリフだ」えっと、『ひどい、ひどいよゆっくん、いくらタバネさんが神様でも「それだ！！！！」「ふえ！！！！」」

「神様ってなんだ、神様って！？・・・あんだ人間じゃあ・・・」

うさみみは俺の言葉に、不思議そうに首を傾げる。どうでもいいかわいいな、ちくせう・・・

「いってなかったけ??」

「いってない！！！！というか俺のことを知ってる理由も聞いてないぞおい！！！」

「・・・おお！！！！そういえばそうだったね、忘れてたよ！それでなにか聞きたいのかな？スリーサイズ？体重はさすがにタバネさんも恥ずかし」

「いいから答えろ・・・」

「は、はい！！！」

俺に頭つかまれたうさみみが冷や汗を流しながら答える。

「まずあんたはなんだ・・・?」

俺の質問にうさみみは、さっきの冷や汗はどこにいったのか。一瞬驚いた顔を見ると、笑みをうかべる。その笑みはまるで、獲物を見つけた狩人のようにみえるのは俺の気のせいだと思いたい。

「うんうん、やっぱりいいよゆっくん。タバネさんが見込んだだけあるね。」

「だから俺は、ゆっくんじゃ、・・・まあいい。であんたはなんなんだ。人じゃないんだろう?」

「どうしてわかったのかな?見た目が創作物の人間だからじゃないよね?」

「まあな、昔から靈感みたいなもんがあんだよ、俺。オーラが人のものとちがったし。まあ、さすがに神様とは思わなかったが。さっき俺のアイアンクローからぬけだしたのもあんたの力だろう?」

そう、俺の数少ない特技?として、俺は靈感があり、人が纏つてるオーラを黙視することができるし、俗にゆう、幽霊というものもみることができる。

そういや、昔みた仮面つけた幽霊ってなんの幽霊だったんだろ。なんか刀もった人の幽霊と戦ってたんで、怖くて逃げ出してしまっただんだが・・・

「ふむふむ、さすがゆつくん！！タバネさんが見込んだことだけは
あるよ」

「・・・で結局なんなんだ、あんた。俺の知っている『篠ノ之束』
とはなにか違うみたいだが・・・」

「その問いの答えはイエスともいえるし、ノーともいえるね！そう
だね。ここはあらためて自己紹介しようか。」

そこでうさみみはくるりと一回転するとにこやかにほほ笑む。

「タバネさんの名称は『タバネ』！今は神様をやっているよ！！趣
味は発明と興味対象の観察！！！好きなものはちーちゃん、いつく
ん、ほーきちゃんにそれから・・・」

「いや、もういいから・・・」

頭痛くなってきた・・・しかし『ちーちゃん』は織斑千冬。『いつ
くん』は織斑一夏。『ほーきちゃん』とやらは『篠ノ之箒』のこと
だろう。

どうやらこの『タバネ』は俺の知ってるあの『束』と一緒に人物
であってるぞし・・・、

「あ、そうそう。君のしってる『東』はタバネさんであって、タバネさんじゃないから・・・」

・・・・・・・・うん・・・・・・・・???

「どういうことだ？さっきいったちーちゃんやら、いっくんやらは、おれの知ってる人物と同じではないのか??」

「ふふ、知りたい、知りたいよね？どーしよっかなあ？まって、教えるからまずはタバネさんの頭をつかんでこの手をどけよっか？」

おっと、あまりのうざさについて、手がでてしまったようである。

「しびいってひどくない!!?」

「俺の思考をよむな!!いいからさっさと答えろ!!」

「うう・・・ゆつくんが冷たい・・・えつとね、それはタバネさんが、人間から神様になった存在だからなのだよ!!!!」

・・・・・・・・

「ふーーん」

「あれ、反応うすくない！？そこはなんで神様になってるのか聞くところじゃないの！？」

「いや、なんかどうせ「タバネさんは天才だからね！」みたいな言葉で返ってきそうな気がしたから」

「ぎくつ！！、そそそそそそんなことないよ、やだなゆっくんたらあ！！！」

「（この反応は図星みたいだな。つうか自分でぎくつていったし。まあ話進まないから、スルーしよう）とりあえずつづきは？」

「あ、うんそう。それで神様って、ひとつの世界だけじゃなくて、いろんな世界を管理するんだけど、それで私たちのことが物語になつてることを知ったんだよね。それが君のいた世界ってわけなのさ！！！」

「ふむ、だいたいわかった。ようはあんたは俺の知ってる「束」が神になった存在で、俺のいた世界であんたが登場人物としてでてる物語があったことからあんたが俺のことを知ってるのもわかったと。」

「うん、まあ、そうだけど・・・ちょっと冷静すぎないかなゆっくん。タバネさんもちょっとびっくりだよ?」

「まあ、騒いだところで変わらないみたいだからな。で、なんで俺はこんなところにいるんだ?」

そう、あの『束』が神になってるのは驚いたが、それは俺がここにいる理由にはならない。彼女の話どおりなら、彼女と俺は文字通り別世界の人間。接点なんて通りすがりの人間よりもないはずである。

「それはね・・・君が私の『興味対象』に認定されたからなのだぁ
—————ドンドン、ぱぱぱ—————!」

.....

「いや、意味わからんぞ、それ」

そう、おれは『ごく一部』をのぞけば普通の大学生。彼女の興味対象に認定される理由がない。

「ふむ??えっと、君の世界をのぞいてたときに、なんか君を見つけたときにどぎつい死相がでてね。」

「……は？」

こいつ、いまなんて……

「それで暇だったから、そのまま観察してたんだ。それで君のことをずっと何日も観察してたんだけど……」

「いや、ちょ……」

「そしたらある日、君のアパートが火事になっちゃって……」

「だから、ちょっとま……」

「そのまま君が家につっこんでって、案の定死んじゃって、ってなんでタバネさんの頭つかむ、あたたたたたたたた！！」

「だからちょっとまてー……！！」

二度目のアイアンクローを炸裂させる。こいつ今なんつた？俺が死んだって……

「あれ、どしたのそんな顔して？」

気がつけばタバネが俺の顔を覗き込む。いつのまに俺のアイアンクローを抜け出したのが気になるが、そこはスルーしよう。おそろくまともな答えは返ってこないだろうし。

タバネの肩をつかんで揺さぶる。

「俺が死んだってどーゆーことだ！！答えやがれええええええええええ！！！！」

「うにゃああああああ、ゆれる、ゆれてるよゆっくんんんん、タバネさんの脳みそがシェイクになっちゃうううううううううううう」

我に返った俺はタバネを離す。

「もう、ひどいよゆっくん。タバネさんの天才的な脳みそが、ファーストフード店でだされるドリンクになっちゃうところだったじゃないかあ！！」

「す、すまん、つい我を忘れ……って違う！！俺が死んだってどういっ……」

「ううう……まだ頭ふらふらするうづ。どういっ……って、ゆっくん覚えてないの？君になにが起こったのか……」

「は？いや、なにが起こったのかって・・・」

そこで俺は思い出した。そう、思い出してしまったのだ。俺に何があったのかを・・・

プロローグ？ 主人公はうさみみにあって・・・9/6修正しました（後書き）

どうも、前書きぶりです、ラドウです。書きたいことを書いていたら長くなりそうなので、ここで一回くぎりたいと思います。

こんな駄文ですが、これからもどうかお願いします。

プロローグ？ 主人公はうさみみにあって ツー！ 10/12修正しました

2話目です。小説を書いてはじめてわかるこの苦勞・・・
完結できるかな・・・俺・・・

・・・9/6修正しました

効果モンスター

星8 / 光属性 / 戦士族 / 攻3000 / 守2500

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを1体ずつゲームから除外して特殊召喚する。

自分のターンに1度だけ、次の効果から1つを選択して発動する事ができる。

フィールド上に存在するモンスター1体をゲームから除外する。

この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃する事ができない。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる

このカードは、かの極悪禁止カード。『混沌帝龍 終焉の使者』と対をなすカードである。

《混沌帝龍Ⅰ - 終焉の使者》

効果モンスター

星8 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2500

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを1体ずつゲームから除

外して特殊召喚する。

1000ライフポイントを払う事で、
お互いの手札とフィールド上に存在する全てのカードを墓地に送
る。

この効果で墓地に送ったカード1枚につき相手ライフに300ポ
イントダメージを与える。

終焉ほどではないにしても、このカードも長い間禁止になってい
たほどの強力なカードである。

なにせ今の墓地肥しの手段が豊富な環境では容易に召喚できるし、
オネストと合わせればそれで
すでに1k111圏内になる。

なぜこのカードが当たって喜んでるかというと、今回の禁止・制
限リストで、なんとこのカードが制限に帰還したからである。

これには俺も驚いた。恐らく他の決闘者たちも、帰ってくるとは思
っていなかったのではないだろうか？それほど予想外な出来事だ
ったのである。

なぜそのカードが俺の手元にあるのかというと、今日のゲームシ
ョップでのことである………

俺の名前は不動遊里。変哲もないただの大学生さ。しいていうならアニメやラノベ、遊戯王が好きなオタクで、靈感があるってことくらいかな。

「誰にいつてるんだ俺は……」

なにか自己紹介をしなきゃならない電波を感じたのだが。

「まあいい……それよりも……」

俺は一つのパックを手を取った。

『EXTRA PACK4』

海外版のカードが封入された新作パック。今日の俺はこれが目当てである。このパックで俺のデッキのいくつかは大分強化ができるからである。そしてレジに並ぼうとしたときに、それが目にはいつた。

『EXPERT EDITION2』

このパックはなにを隠そう、今回の禁止・制限で帰ってきた、『開闢』が封入されているパックである。』

(どうしようかなあ・・・)

今現在、開闢の値段は絶賛高騰中で、そのいきおいは高値カードの代名詞ともいえる『墮天使 スペルビア』 『強欲で謙虚な壺』すらもしのぐ勢いである。

《墮天使スペルビア》

効果モンスター

星8 / 闇属性 / 天使族 / 攻撃力2900 / 守備力2400

このカードが墓地からの特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「墮天使スペルビア」以外天 使 族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

《強欲で謙虚な壺》

通常魔法カード

自分のデッキの上からカードを3枚めくり、その中から1枚を選択して

手札に加え、残りのカードをデッキに戻す。「強欲で謙虚な壺」は1ターン

に1枚しか発動できず、このカードを発動するターン自分は特殊召喚する事ができない。

その値段は六千円から一万円ほど。一度はシングルで買おうと思っただが、後々禁止になったら・・・と思うと、手に取るのに躊躇してしまう。それならパックで当てたほうが安上がりだと思っただのである。

(でもなあ・・・そんなうまくいくわけないし・・・)

そう、パックを買っただけで欲しいカードが手にはいるなら苦労はしないのである。俺はそのまま10分ほど迷ったが、結局3パック買って、これで出なかつたらあきらめて『ゴールドシリーズ』であるか、次の禁止・制限リストで再び禁止になるのを待とう。そう思いレジへ向かった・・・

そして、見事、開闢を引き当てたのである。

「今日はいい日だなあ・・・開闢は当たるし、エクストラパックもいいのが当たったし・・・」

ホクホク顔で俺は自分のアパートに向かった。ああ、そういえばいつてなかったな。俺は一人暮らしで、親の遺産を食いつぶしながら

らバイトをして生活してるんだ。

「って・・・、また誰にいつてんだる俺・・・」

今日は確かにいい日だったが、どうも電波を感じる日でもあるようだ。俺は早く帰ってデッキの調整をしようと思って歩みを速めると、なにやら俺のアパートの近くが明るい。

「なんの騒ぎだった・・・」

そこで俺は固まったしまった。

『燃えている』。そうとしか表現できない光景が広がっていた。それも燃えているのはどうやら俺のアパートである。それをヤジウマが取り囲んでる。

「・・・って、やべえ!!」

あの中には俺の全財産が、なにより俺のあいつら（・・・）が
!!

俺は近くにあったバケツに水を汲み、頭からかぶる。そして燃え盛るアパートに突っ込んだ。後ろで誰かが何か叫んでた気がするが知ったこっちゃねえ。俺は走った・・・

（あれが燃えちまったら、俺は・・・!!）

炎の熱さに耐えながら、俺は自分の部屋の扉をぶち破る。

「あつた・・・!!」

俺は見慣れたカードケースを見つけると、急いで確保する。

「よかった・・・」

目的のものを確保できたことにホッとし、急いでこの場を離脱しようとした。しかしそのとき声が聞こえた。

(泣き声・・・???)

どうやら女の子の泣き声のようだ。親か誰かとはぐれたのだろうか・・・?

「チツ！」

見捨てるわけにもいかず、声の主を探す。

「おい、大丈夫か譲ちゃん!!」

「ふえ？」

女の子は顔を上げる。涙目の女の子は俺を見て一瞬呆けた顔になるが、それも一瞬で、次の瞬間、顔を歪めて俺に抱きついてきた。よほど怖かったのだろう。

「譲ちゃん、どうしてこんなところにいんだ？お母さんか、お父さんは？」

「今日は・・・天気がいいか・・・ら・・・私一人でお散歩してたの・・・。そしたらここから不思議なものを感じたから・・・来てみた・・・ら・・・周りが燃えて・・・て・・・熱くって・・・こわくって・・・うああああああん！！！」

「ああ、ああ。そうだな、怖かったな？にいちちゃんがいるからもう泣くなよ。可愛い顔が台無しだぜ？」

「ふえ？・・・かわ・・・かわいって・・・／／／／」

なにやら譲ちゃんの顔が赤くなつとる。そんなに不思議なことをいったらどうか。一般的に見て、譲ちゃんの顔はかわいいと思うんだが・・・

ハッ！！ひよっとしてロリコンだと思われたのだろうか？それで怒って赤くなつてるとか・・・それはまずい！！

「そ、そういえば譲ちゃんの名前はなんてんだ？まさか譲ちゃんな

んて名前じゃないだろう？ちなみに俺は不動遊里というんだ、よろしくな？」

譲ちゃんに目線を合わせて質問する。やっぱり、会話をするにも、相手の名前を知ってたほうが話しやすいからな。・・・べ、べつにロリコンだと思われんのが嫌で話をそらしたわけじゃねえからな！・・・本当だぞ・・・？

「あ、えつと・・・わたしの名前は篠ノ・・・」

そのとき、俺らの上から大きな衝撃音が聞こえた。なんと天井が崩れて、落ちてきた！！

「あぶねえ！！！」

俺はとっさに譲ちゃんを押し倒し、自分の体の下にかばった。その後、俺の意識は上からきた衝撃とともに闇へと落ちていった・・・

そうか・・・俺は・・・それで・・・

「その様子だと思いだしたようだね・・・」

『タバネ』がほほ笑む。

「ああ・・・俺はあのときに死んだんだな・・・」

「・・・あれ？なんか思ったより冷静だね？さっきはあんなに取り乱してたのに・・・」

「んー。まあな？もうどうにもなんねんだろ？」

「それはまあ・・・」

「それよりだ。」

「ふえ？」

「あの譲ちゃんはどうした？あの状態で無事だったとは思えねえが・・・」

そう気になるのはあの女の子だ。俺のことはもう過ぎたことだからいいが、女の子道連れに死んだんなら寝ざめが悪すぎる。まああの状況だったら助からない可能性のほうが高いが・・・

すると、タバネの顔に陰りが指した。・・・ああ・・・やっぱり・・・

「火がかなり激しくてね・・・あ！でも安心して？あの子は来世で幸せになる予定だから。というか、私の力で幸せにするし！..!」

そうか……助けられなかったのは残念だが、幸せになってくれるなら……ん？

「なあ、それっていいのか？」

「え？」

タバネは不思議そうな顔をしてこっちをみている。いや、だって……

「いや、あの子が幸せになってくれんのはいいが、一応神様のお前が人間の人生に干渉して……」

「ああ、大丈夫だよ！！なんせタバネさんは神様のなかで一番偉いからね！！」

……は？

「は？……ああ、寝ぼけてんのか？」

「寝ぼけてないよ！！なに！？タバネさんが偉いのがそんなに信じられないのかなあ！？」

「いや・・・だってなあ・・・？」

このボケうさぎが・・・なあ・・・？

「いいんだ、いいんだ・・・どうせタバネさんなんて・・・ぶつぶつぶつぶ」

なにやらうさみみが体育座りでいじけだした・・・ああ・・・めんどくせ。というか、こういうところが偉く見えない理由の一つだって気がつかないんだろうか・・・

まあ、話が続かないからなんとかするか・・・

「ああ、悪かった、悪かった。いや、タバネの凄さに驚いただけなんだ」

すると、涙目のタバネはこちらに顔を上げた。

「本当にそう思ってる？」

「ああ、思ってるよ。」

「本当の本当に？」

「本当だったの。」

するとタバネはやつと機嫌をなおしたのか、ニヤニヤとした笑みでこちらに顔を上げた。

「もう、しょうがないなゆっくんは！タバネさんだけは寛大だからね！！今回だけは許してあげよう！！！」

なんかイラってきたがここは我慢だ！・・・我慢だ俺！！

「でもあれだね？」

「あん？」

「自分のことより女の子のこと心配するなんてやさしいよね？」

・・・な！！おれがやさしいだって！？

「し、心配なんかしてねえし！俺はただ、どうなったか知らないと後味が悪いと思ってだなあ！！！」

「あはは！ゆっくんはツンデレだなあ、あれゆっくんなんでタバネさんの頭つか、いたいたいいたいよゆっくんーーーーー」

「ーーーー！！！」

「違つつつってんだろぅが――――！！！！」

3度目のアイアンクローの炸裂である。こいつまじで人の話、聞かねえなおい！

「うっうっうっ、うさみみばうわ――――！！！！」

「うおっ！またかよ！！」

タバネが光ったと思つたら、俺のアイアンクローから脱出していた。いまさらだが、なんだ『うさみみパワー』って……

「もう、ひどいよゆっくん！！タバネさんの天才的な脳みそが二つに割れちゃうところだったじゃないかあ！！」

「それはよかつたな？二つの脳でそれぞれ二つのことを考えられるぞ？」

そういうと、タバネは満面の笑みで、

「おお！！ゆっくん天才だね！！」

とほざきやがった。小説どおりのことをいったら、本当に小説どおりのセリフが帰ってきたとは思わなかった。

「まあ、いいや・・・で・・・?」

「でって?」

「とぼけるな?まだ俺がここに来た理由、あんたの『興味対象』になつた理由をきいてねえぞ?」

「おお!!そうだったね。えっと、その前に聞きたいんだけど?」

「うん?・・・」

なんだ聞きたいことって・・・

「なんであの火のなかに突っ込んだのかな?いつちやなんだけど、ゆっくんが持ち出そうとしたのはしょせんおもちゃでしょ?命をかけるほどのっつ!」

自然に俺の中から殺気が溢れ出る。こいつ・・・いまなんつった?

「訂正しろ、タバネ。あれは、あいつらは(・・・)俺にとつちやただのおもちやじゃねえ。魂に近いもんだ。」

タバネは俺の殺気に冷や汗を流しながらも、きらきらとした、お

気に入りのおもちゃを見つけたような目で俺を見る。なにがそんなにおもしろいんだ、こいつ……

「あはは、ごめんごめん、ちよつと言葉が悪かったみたいだね。(まさか神である私に冷や汗を流させるほどの殺気とわね……ますますおもしろいや。)」

「いや、俺もすまん。少しやりすぎた……」

冷静になった俺は殺気を納めて答える。どうやら、本当に他意はなかったようだ。

「だが、あれは俺にとっては命をかけてもいいほどに大切なものなんだ。気をつけてくれ。」

「うん、わかったたよゆつくん!!うふふ……やっぱりゆつくんはおもしろいや……君の魂の輝きを感じるよ。」

「魂の輝き?」

「うん、タバネさんはここ最近、君のことを見ていたんだけどね。きみがあのカードたち、『遊戯王』っていったけ?それをやってるとき、君の魂の輝きが信じられないくらいに上がったんだよ。これは本当にすごいことなんだよ!!」

目の前のうさみみがなにやらはしゃいでるが、俺にはまいちピンとこない。

「なあ……それってどれだけ凄いんだ？」

「うんとね、とりあえずその分野では伝説になれるくらいかな？」

俺はその言葉に驚愕する。まさかそこまで凄いとは思わなかったからだ。

「でも、君が元いた世界じゃ君は正当に評価されない。そんなことを思ってたら君が死んじゃったからここに連れてきたわけなのだよ？」

タバネは胸を張って答える。どうでもいいが、そのポーズはやめてほしい。自分のスタイルの良さを自覚してるんだろつか、こいつは。おれはタバネの胸に目をやらないようにそらした。

「お前が俺に興味を持った理由はわかった。で、もはや死人の俺をこんなところに連れてきて、何をさせたいんだお前は？」

するとタバネは笑いながら答える。

「ふふふ……ねえ、ゆっくん」

「なんだ？」

「君、違う世界に転生してみない？」

「……は？」

そのときの俺の声は我ながら間抜けな声だった……

プロローグ？ 主人公はうさみみにあって ツー！ 10/12修正しました

2話目終了です。主人公が死んだ理由ですが・・なんかぐだぐだです。結局主人公が命をかけてデッキを取りにいった理由はかかずじまい。まあ、それはそのうちかこうかなあと思っています。

そして、唐突に現れたあの女の子。たぶん最後の途中で終わった自己紹介で、わかる人はわかると思います。

次でやってプロローグは終わります。ただ原作入りはまだ遠そうなのであしからず・・・それではラドゥでした！

プロローグ？ 主人公はうさみみにあって スリー！！ 9 / 6 修正しました

今回でプロローグは終了です。でも原作はまだ遠いです

・・・9 / 6 修正しました

プロローグ？ 主人公はうさみみにあって スリー！！ 9 / 6 修正しました

前回のあらすじ

死んだ理由が判明した主人公。そんな彼にタバネはある話しを持ちかける。『転生』という話を……

サイド：遊里

「転生……？」

「そ、転生だよ。ゆっくんは二次創作とかって見たことない？」

「いや、そりゃ、結構見たことあるが……」

これでも生前は、自他ともに認めるオタクだったんだ。結構な頻度で読み漁っていた。しかし、転生ねえ……

「パスで」

「そーだよね、転生してハーレム目指すのが男って、って！パス！
えっ！それって転生しないってこと！！！」

「おう！！！」

「キツパリ言われた！！！」

なにやらうさみみが驚いてるが知ったこっちゃない。

だって転生つてあれだろ？俺ツエー！ーもらう代わりに命が
けで、戦わなきゃなんないんだろ？しかも志望フラグ満載の世界で

やだよ！こちとらただの一般人なんだよ？死んじゃうじゃん！！

「なんで！？どーして！！？ここは俺ツエー！でハーレム目指すの
が男ってもんじゃないの！！！」

「いや、そんな変なもんで男かどうかきめてんじゃねえよ！？てい
うかそれで転生するやつただの下種じゃねえか！！！」

「へっ？いたよ？」

「はっ。」

なにこいつなんつた？

「俺の前にも、俺と似たようなやついたのか？」

「うん、なんかねえ？あまりにも暇だったから、力を与えて適当な世界に放り込んでみようかと思っただけどね？」

「なんか力あげたとたんに『俺のものになれ！！』って襲いかかってきたからさ、適当にぼこぼこにして、力取り上げてちよつと過激な世界に放り込んでしまった！！」

「バカだよねえ、神で天才なタバネさんに、努力もしたことがない駄馬がかなうはずなのにさ！！」

「あ、ゆっくんはべつだよ！ちゃんとタバネさんが気にいった人間なんだから。暇つぶしよりの人形とはちがうからね。ま、あれは人形にもなれなかったんだけどね、あはは！」

「・・・なにそれ、怖い」

「つまり・・・あれか？俺はこいつの『興味対象』になってなきや、こいつの人形として、働かされてたってことか。」

「ちなみに・・・そのちよつと過激な世界って・・・？」

「うん？えつとたしか『学園黙示録』っていったかなあ？」

「・・・その世界の過激度はちよつとどころではないのではないのだろうか？・・・死亡フラグしかない世界だぞおい・・・」

俺はおもわず、生きてるか分からない男の無事を祈った……

「ま、そんなことはいんだよ。転生しないってなんでなのさ。」

なにやら目の前のうさみみはご立腹のようだ。頬をふくらませてこっちを見てる。かわいい……って、危ない、危ない、危なく落とされるどころだった……

「かわいいなんて、ゆっくんたら照れるなあ」

「お前、今までスルーしてたけどさ、ちよくちよく人の心よんでんじゃねよ。」

おちおち、心の中で悪口もいえねえじゃねえか……

「まあ、タバネさんは神様だからね！これくらいは朝飯前さ！！」

腰に手をつけ、胸をはってうさみみがなんかいつてるが、俺はスルーしないでよ！！」スルーしてタバネの質問に答える。

「転生しない理由だったか……？だってどうせ、なんか死亡フラグがあんだろ？めんどくせえ」

「め、めんどくさいって……こう、ヒロイン救ってハーレムつくるぜー！……とかないの！……！」

いや・・・だって・・・

「ハーレムって・・・んなご都合主義あるわけないじゃん」

いくら創作物の世界でも、それはありえねえよ。つかめんどい。

「・・・ゆつくんって・・・よく、枯れてるっていわれない？」

失礼な！俺も男だ。女性に興味がないわけじゃなく、そこまで情熱がわかないだけだ！！」

「いや、それを枯れてるってゆんじゃないの？」

「・・・また心読んだのか？」

「いや、いま自分で言葉にだしてたよ？」

「・・・そですか・・・」

「と、いつことで、転生はお断り・・・」でもそれはできないよ・・・は？」

「だからそれはできないのだよ。タバネさんがもつきめちゃったからねええええええええええ、いたったたたたーーーーー」

4度目のアイアンクローを炸裂させた俺は誰も責められないはずだ。

「で、それは取り消せないのか？」

アイアンクローをはずした俺はタバネに尋ねるが、

「いたた、ゆつくんたら乱暴だよもう！！タバネさんが変な趣味に目覚めたら、どうせ「もう一発いくか？」あはは・・・冗談だよ冗談、転生だけど、途中で取り消したら、転生させるはずの魂まで消えちゃうからね、無理なのだよ」

「・・・はあ、まあいいや、じゃあ転生するよ・・・」

消えたくないしなあ・・・タバネが無邪気にはしゃいでるのにイラってくるが・・・

「で、どこに転生するんだ俺は？」

「えっとね？ちょっとまってね？」

そういうと、タバネは本棚から資料を探す、そういえばいつてなかったが、俺とタバネのいる場所はいわゆる大学の研究室を想像すれば想像しやすいだろう。見たことない機械は、タバネの手造りだ

ろっか？うおっと、機械が鉄齧ってる！！

「どしたのー？」

「なんでもねえよ」

とりあえず平然を装って答える。なんか、こんなことで驚いたら体がもたない気がする。

「で？俺の転生先は？」

「あ、そだったね。転生先は『遊戯王GX』だよ！！」

・・・ふむ、GXねえ・・・まあ、遊戯王でメシを食えるってのはいいな。(まあ、俺の実力が通用すればの話だが。)死亡フラグもそれなりにあるが、そこは離れて目立たずに、傍観してればいいわけだし。ただ原作知識がうる覚えなのが不安だが・・・

「じゃあ、それでいいや、俺のデッキとカードは持ってける？」

「もちろんだよ！！大切なものなんでしょ？」

「まあな」

あれは俺の魂なんだ。これがある限り、あの人が、唯一俺に残してくれたものだから・・・

「じゃあ、他になにが願い事ないかな？テンプレで『無限の剣製』？最近流行りの『大嘘吐き』？ちよつと変わりどころで『見稽古』かな？3つまでなら、なんでも叶えられるよ？」

「いや、カードゲームの世界なんだからそんなのあっても・・・いや、あつたな」

「なにかな、なにかな？タバネさんがんばつちやうよ？」

俺はテンションが上がったタバネを若干鬱陶しく思いながらも、答える。

「1つ目、俺の親友を幸せにしてくれ。最近彼女をつくりやがったんだ、あいつ2つ目、俺が餌やつてた近所の野良猫が、飼い主を見つけられるように。3つ目は俺の保護責任者になつてくれたおじさん夫婦が子供ができないっていつてたからな、子宝に恵まれるように「ちよつとまっつて！」・・・なんだよ」

俺はタバネに視線を送るが、こいつはそれを気にしないで

「なんで全部他人のことばっかなの？せつかくなんでも叶うんだよ？少しくらい自分のために願いをつかつて「タバネ！」えっ！」

「なにか失礼なこと考えた？」

「いや、別に」

「・・・鋭い、タバネのくせに。これが女のカンというやつなのだろうか？」

「・・・まあいいや。じゃあゆっくんのいうとおりにしとくけど、本当にこれでいんだね？」

「ああ、危険なことは原作キャラに近づかなきゃいいだけだしな・・・」

「ふーん（まあ、それは無理なんだけどね）」

「なんか不吉なこといわれた気がしたんだが・・・気のせいということにしよう・・・」

「それで俺はいつ向こうにいくんだ？」

「それはね・・・」

「なにやらタバネが腕を上げる。なにかいやな予感が・・・まさか

そうして私は笑みをうかべ、さきほどまで一緒にいた人物のことを思い浮かべる。

『不動遊里』

いわゆるサブカルチャーが好きなので、靈感があるが、そのほかは普通の大学生。でも・・

「私にはわかる。あの子は私と同じ」

そう、あの子は生きてた頃の私と同じ、どこか周りの世界が他人事のように感じてた、世界に隔離さらた存在。

「そしてあの魂の輝きは・・・」

そこで扉をたたく音で我に帰る。

「あ、あの、ここに来いたいわれたんですけど・・・」

こ、この声は！！！

「はいつでもいいよー！！」

私の声におずおずと一人の女の子が入ってくる。それはゆっくんが助けようとした女の子

「まってたよ、ホウキちゃん!」

そう『篠ノ之箒』ちゃんである。

あつ、この子なんだけど、ゆっくんの世界の『箒』ちゃん。つまりゆっくんが知ってる、私が出た『世界』の『箒』ちゃんとは同一人物でありながら、全くの別人なんだ! 平行世界の『箒』ちゃんってことだね!

タバネさんも初めはビックリしちゃった!! まさかゆっくんが助けようとしたのが平行世界の私の妹なんてね!!

なんでこの子がここにいるかっていうと、この子も転生させちゃうことにしました!! なにせ平行世界とはいえども『箒』ちゃんだからね!! ゆっくんにも幸せにするって約束したし・・・

自分の考えにふけていると、ホウキちゃんがなにを探してるように見えた。どうしたんだろう?」

「どうしたのホウキちゃん?」

「お姉ちゃん、あのときのおにいちゃん?」

あのとのおにいちゃんって、ゆっくんのことかな？どうやらホウキちゃんはゆっくんを探してるようだ。少ししかあってないのに、随分懐かれちゃったねゆっくん。・・・

タバネさんは、激しくじえらしい・・・（なににだ）

「ゆっくんはね、もう新しい世界にいつちゃったよ？」

その私の言葉にホウキちゃんは目に見えてしよげる。

ああつ、そんな顔しないでホウキちゃん！お姉ちゃん、体が熱くなっちゃう！！（このタバネ、変態である）

「お礼いたかったのに・・・」

じつは彼を転生させたのは、彼に興味をもったというのももちろんあるが、平行世界とはいえ、妹を助けてくれようとしたお礼という面もある。

「また・・・会いたいな・・・」

・・・ふむ？・・・もしかして・・・

「ホウキちゃん、もしかした、ゆっくんに惚れちゃったのかい？」

するとホウキちゃんは首を傾げる。・・・おう・・・鼻血がでそ
うだぜい・・・(自重しろ)

「惚れちゃったって・・・？」

・・・ああ、そうか。ホウキちゃんはまだ子供だったね・・・

「惚れるっていうのは、その人を大好きになっちゃたてことだよ？」

「ふえっ、ふええええええ／／／／！！！」

ホウキちゃんが真っ赤になってテンパル。

ああ、もうかわいいなっ、ほんとに。・・・でもそうか、ならタ
バネさんは、この子の恋を応援しなきゃならないね。なにせホウキ
ちゃ(ry

「ねえ、タバネちゃん」

「な、なにお姉ちゃん・・・」

「お兄ちゃん、ゆっくんにもまた会いたいかい？」

「え・・・」

ホウキちゃんは一瞬私がなにをいつているのかわからなかったみたいが、意味を理解したんだろう目を輝かせて、

「会えるの!!」

と聞いてきた。おう、キラキラしたつぶらな瞳がまぶすういぜい!!

「元々ホウキちゃんは次の世界に転生、あ！生まれ変わってもらった予定だったからね？ゆっくんと同じ世界に転生すれば「同じ世界にする!!」おおっ・・・即答だね！じゃあそうしようか。」

まあ、他の駄神どもが文句をいうかもしれないが、そこは問題ないだろう。所詮群れになっても、タバネさんには勝てないだろうしね。

「ありがとうおねえちゃん!!私がんばるね!!」

ホウキちゃんが私に抱きつく。これだけでタバネさんは24時間働けるぜ!!

さて、問題なのはゆっくんだね。

ゆっくんはなにもいらないうっていったけど、それじゃタバネさんがつまらなっゲフンッゲフン!!もうしわけないからね!

いろいろ勝手につけて魔改造したんだけど、（おい！）そのときに見つけたゆっくんの特異体質、『フラグ体質』。

ゆっくんはどうやらこのせいで生前いろいろ大変だったみたいだけど、どうやらこれ、女の子のフラグも立てちゃうものみたいなんだよね？これ？ゆっくんに惚れてた女の子はけっこういたみたい。

（まあ、ゆっくんは気づいてなかったみたいだけど・・・）

まあいいや、ライバルが多くなりそうだけど、ホウキちゃんのために頑張ろう！！首洗ってまっけてねゆっくん！！

サイド：遊里

ぶるぶるぶるっ！！なんか寒気がしたんだが、気のせいかな？

（しかし・・・どこだよこー-----
-----）

「あうあうあ-----
-----」

なぜか俺は赤ん坊の姿のまま、公園にいた。

まさかの公園スタートの主人公。いきなりやばい状態におかれた主人公！主人公に平穩は訪れるの！！次回をまで！！

プロローグ？ 主人公はうさみみにあって スリー！！ 9 / 6 修正しました

以上第3話でした。・・・タバネさんのキャラやしやべり方が若干ちがうのは、『東』さんではなく、『タバネ』さんだからである。と言いついてみるラドウです。はいすいませんただの言いつでした。

やっとプロローグが終わりましたが、まだ原作まではいかないのであしからず。

今回でた『ホウキ』は『IS』の『篝』ではないので、ツンデレ分を少なめに、もしくはツンデレではなくすかもしれません。ちなみにヒロイン1になります。ここで主人公と接触させようかなあ。

さて、まさかの公園スタートで始まった主人公の転生人生。主人公はある家に拾われます。しかしそこは普通の家ではなく・・・お楽しみ！！

この小説の注意事項と主人公設定・・・読まなくても問題ないですが一応・・・

ガラムさん、感想ありがとうございます。これからもがんばります
！！

今回はこの小説の世界観と、設定についての注意事項についてです。
読まなくても構いません。

・・・9/3修正しました

この小説の注意事項と主人公設定・・・読まなくても問題ないですが一応・・・

・この小説はアニメ版『遊戯王GX』に、ライトノベル版『IS』をクロスさせたものです。そういうものが嫌な人は戻ってもらって結構です。それとベースはアニメ版のGXですが、漫画版の設定、たとえば『プラネットシリーズ』の存在などや、漫画版の展開なども組み込む場合もあるので、そこもよろしくおねがします。

・カード効果は基本OCGだが、アニメに登場したカードはアニメ効果になります。(プリズマーやバブルマンなど)また、『プラネットシリーズ』はだす予定ですが、漫画版のオリカもだしますが、『アブソ』などの一部のカードはOCG効果でだします。

・この小説は『更識遊里』、『織斑一夏』、『遊城十代』の三人がメインで、それぞれヒロインが複数います。そういうのが嫌いな人は、戻ったほうがいいかもしれません。

・シンクロ、エクシーズなどのデッキは基本だしませんが、話の展開しだいでは、だすかもしれません。

・作者はTFはやってないので、TFオリジナルのカードはでないと思いますが、オリジナルキャラは、作者が勝手に魔改造してだすかもしれません。そういうのがいやならもどったほうがいいです。

ここからは転生前の主人公設定です・・・

名前：不動 遊里(転生前)

身長：176センチ 体重62キロ

容姿イメージ：『ネギま!?』の犬上小太郎を大きくした感じ

*容姿イメージは原作でもこのままです。

この小説の主人公。本人いわく『ごく普通の大学生』だが、「靈感をもつてる大学生」は普通じゃないことには誰も突っ込んでくれないので気づいていない。

アニメとラノベが好きなオタク。(声優のイベントにいったり、アニメなどのグッズを買うほどではなく、オタクといっても『弱オタク』といったところ)

『遊戯王OCG』のヘビークーザーであり、何回か選考会にもでている。昔ある出来事があり、自分のデッキを命をはるほど大切にするようになる。(主人公いわく『魂』)

大学の成績は上の中で、なぜこんな成績になれたかというところ、『やることはやる主義』だかららしい。基本無口だが、口下手なだけ。またどこか他の人とずれたところがある。

性格は基本めんどくさがりだが、頼られるとつい手助けしてしまう。いわゆるツンデレみたいなのがある。また借りを作ったら、きちんと返さなきゃ気がすまないタイプ。

恋愛は、『自分なんか好きになる物好きなんかいない』と思って最初から諦めているタイプで、じつはそのめんどどうみの良さと容姿から、好意をもつてる女性は結構いたのだが気付かなかった。タバネいわく、主人公がもつてる体質、『フラグ体質』のせいらしい。(また、この体質のせいで、めんどどうことに巻き込まれるときも結構あった)

交友関係は、基本大学では必要最低限の知り合いしかいなく、友人

と呼べるのは片手で数えられるくらいしかない。むしろ大会などで知りあつた遊戯王仲間のほうが多いくらい。しかし、大学の仲間は『親友』經由で知り合つた人物ばかりで、自力で友人になつたのはその『親友』くらい。

本当は傍観者志望だったが、原作知識はうる覚えで、持ち前の『フラグ体質』もあり、望まないうちに事件に巻き込まれていく・・・転生後は『遊里』ではなく『YUURI』と呼べる存在になつてもらいます。

以上です。転生後の主人公設定はまた新しく買うのでよろしくおねがいします。

この小説の注意事項と主人公設定・・・読まなくても問題ないですが一応・・・

以上が注意事項と主人公設定（転生前）です。主人公は自分に自信がなくて鈍感なタイプです。・・・もげればいいですよね・・・

そういえばこの小説では、一応ヒロイン複数になってるんですが、皆さんはだしてほしいキャラってありますか？自分が分かるキャラなら出すかもしれないし、主人公のヒロインからはずれても、他のキャラとくつつくかもしれないので、お試し感覚で言ってみてください。まあ原作開始前までは待ちます。

次からが本編です。主人公に平穩は訪れるんですかねえ。（まあ訪れさせませんが）
それでは次回！！

原作前1話目　そして主人公は家族ができて・・・　9 / 6 修正しました（前書

前回のあらすじ・・・

神『タバネ』によって転生させられた主人公。しかし転生した場所は公園のド真ん中。そして自分は赤ん坊になっており・・・

今回からあらすじは前書きに書くことにします。

原作前1話目　そして主人公は家族ができて・・・　9 / 6 修正しました

サイド：遊里

俺の名前は不動遊里！ちょっと靈感のあるごく普通の大学生さ！

ある日神『タバネ』の『興味対象』になって落とし穴で転生したのはいいんだけど、気がついたら体が縮んでしまっていた！（シャレにならないくらい）

見た目は赤ん坊、頭脳は大人！その名は名探偵遊里！・・・なあんて・・・

（言ってる場合じゃねえよなあ・・・）

「あうあうあうあうあー・・・」

いや、百歩譲って赤ん坊になんのはいいよ？でも公園はねえだろ。生活どうすんだよ、こちとら今は赤ん坊なんだぜ・・・

（もしもしー！ゆっくん聞こえるー！）

「！」

急に聞こえた声に思わず身を固くする。なんだ！どこからか、あの糞つさぎの声が！

（糞つさぎはひどくないかな！？あと、これは『念話』っていつて

ね？神様技術では初步中の初步の通信技術なのだよ。頭のなかで念じてくれれば通じるからね？)

・・・神様技術ってなんだよ・・・ていうか『念話』て・・・テンプレだな。・・・まあいいや、ためしてみつか・・・

(ああ・・・んん!!・・・タバネ死ね!)

(え!?!なんで!?!なんでいきなり、タバネさん、死刑宣告されてるのかな!?!タバネさんなんかした!?!)

(当たり前だ!糞うさぎ!いきなり落とし穴なんかに落としやがって!こつちにも心の準備つてもんがあんだぞ!それになんて赤ん坊になつてんだ!?!しかも公園!?!いきなり二度目の人生　ライフ0にする気がこら!!!)

(あはは、ごめんごめん。ああしたほうがおもしろかったから?)

(・・・殺すぞ?)

今の俺なら神すら殺せる!!

(ま、まあまあ。お礼に特典あげるからさあ)

(特典?・・・)

なんか嫌な予感が・・・

(特性『幸運A』これがあれば生活には一生困らないのさ！)
生活にはね？)

へえ？タバネにしてはまともだな？

てつきり『フラグ体質』みたいななんかをつけて、無理矢理俺の
平穩をみだそうとするのかと思ったのに・・・(『フラグ体質』は
元々遊里が持ってたのでつけなかっただけである。もしなかったら
率先してつけてただろう・・・)

(まあ、もらえんならもらっとく・・・あと・・・そのだな・・・)

(ん？)

(いろいろありがとう・・・)

(・・・ふえ？)

タバネが不思議そうな声をだす。

それもそうだろう。こいつには、自分でいうのもなんだが雑な態度しかとっていない。それがいきなりこんなことをいうんだから・・・

(いや・・・本当はお前は俺を転生させる必要なんてなかったわけだろ？・・・いくらお前の『興味対象』になったからって・・・それになんだかんだで頼みも聞いてもらってるし・・・ああ！！だ

からありがとっつてんだよ!!!(

うっっっ…顔が熱い。普段めつたにこんなこといわないからな、俺…

(……………)

ん？なんか静かだな？

(おいタバネどうした、そんな黙り込んで?)

(……………きた……………)

きた？

(デレ期きた————————!!)

うおっ!!なんだ突然!!

(おいタバネ?)

(もうかわいいな、ゆっくんはそんなこといつちやうなんて、きゅんときちやったよ、きゅん。これはあれだね？タバネさんと結婚するしかないね！まってねゆっくんいまそっち……………)

そこまでいったとき、タバネとの念話が切れた。なんだなんだ！
？急にタバネが暴走しはじめたと思ったたら声が聞こえなくなったぞ、
おい！

（おい、タバネ？きいてんのかよ、おい！）

（もしもし）

すると知らない女の声が聞こえてきた・・・だれだこいつ？

（あー、悪いけどあんた誰？）

（申し遅れました、私はタバネの助手をしています『くー』と
申します。気軽に『くーちゃん』とよんでください？）

あいつに助手なんていたんだな。つーか、なんで疑問なんだよ。
というかクールキャラっぽいのに『くーちゃん』って、それでいい
のかお前。・・・まあいいや・・・

（くーっていったけか？それであいつ（くーちゃんです）いや
だから（くーちゃんとよんでください）だからな（くーちゃんとよ
んでくれなきゃ死にます）・・・くーちゃん・・・）

（はい）

なんなの！？なんでそこまで『くーちゃん』にこだわんの！？て
いうか死にますって怖いんですけど！？・・・

はあ、まあいいや。タバネの知り合いみたいだし、しょうがない
か・・・

（あんなのといっしょにされたくないのですが？）

（あんなのいつちゃった！？仮にもあんなの上司たる！という
かあんたも心読めんのかよ！）

（まあ、私も一応神属なので。というかくーちゃんと読んでく
ださいといいましたが・・・）

・・・はあ・・・もういいや・・・

（んで、くーちゃんとやら。あのうさみみはどこいったんだ？）

（はいあのうさみみは暴走しすぎて疲れたようなので強制的に
ねっゲフン！ゲフン！！お昼寝しています。なので続きは私から説
明させていただきます）

（いま強制的につて・・・まあいいや、じゃあ続き頼むは。）

(はい、では。まず初めにあなたのカードですが、それはあなたがまともに生活できる体になってから送らせていただきます。赤ん坊のうちに送って下手に誰かの手に渡ったらいけませんからね?)

まあ当然だな。この体じゃ、もしカードが奪われそうになっても守れねえし。でも・・・

(それはいいんだが、これからどうすればいいんだ?見た感じ親らしき人も見つからないし)

このままじゃ野垂れ死にだしな・・・

(話は最後まで聞いてください)

・・・怒られた・・・理不尽だ・・・

(これからあなたはある人たちに拾われる予定です)

(ある人たち?)

誰だそれ?ていうか拾われんのは確実なんだな?

(そこらへんはご都合主義です)

さいですか・・・

(ほら！噂をすれば！)

ん？

「刀路さん、織姫ちょっと来てくれないかしら？」

「なーにおかーさん」

「どーしたんだい？」

気がついたら水色の髪の美人さんがこっちを見ていた。・・・あ
んた誰？・・・

サイド：……？？？

はああ。今日はいいい天気ね。こんな日は家族でピクニックが一番
よね。

「とこういうことで、やって来ました『ドミノ公園』！！」

「なにいつてるんだお前は。」

「いや、なんかいわなきゃならない気がしたのよ……」

本当になんでかしらねえ

「おかしさんどーしたの？」

娘の織姫が心配そうにこっちを見てくる。愛娘に心配させるなんて悪い母親で私は。

「なんでもないわ、織姫。忘れ物はない？」

「うん、大丈夫だよー！」

「そう」

全くいい笑顔をするわねこの子は。刀路さんに似たのかしら？

将来『人たらし』なんていわれそうね。

「じゃあ、私は座る場所探してくるわね？その後お弁当にしましょ
刀路さんはそれまで織姫と簪 かんざし のこと頼めるかしら？」

私が話しかけてるのは、私の愛する夫の刀路さん。今は背中に末

つ子の簪を背負ってるは。すやすや眠っちゃってかわいいわね。．．
・ハ！いま刀路さんの背中で眠ってるこの子にちよっと嫉妬してしまった。

「ああ頼む。それまでここににいるから」

「それじゃあ、いつてくるわね」

「いつてらっしやーい」

織姫の声を背に、いい場所がないか探す。んー、今日は少し暑いから木陰みたいなどころがあるといいわね。えっと、．．．ん？．．

「なにかしら？」

ベンチの上になにかが置いてある。それを覗いてみると、

「子供．．．？」

そう子供。髪は夜のように黒く、目はつりあがっているが整った顔だち。大人になったら、さぞ女性の目をひきつけることだろう。

捨て子かなにかかしら？とりあえず．．．

「刀路さん、織姫、ちょっと来てくれないかしら？」

この子をそうするか刀路さんと相談しましょ

サイド：遊里

なにか水色の美人さんと、髭のナイスミドル（死語）におまわりさんに連れ去られた。

話を聞いてみると（盗み聞き）どうやら俺の戸籍を調べるらしい、まあどうやら無駄だったようだが・・・

「戸籍がない？」

美人さんが警部らしき人と話している。まあ元々別世界の人間だからそれはしょうがないか。しかし・・・

ジーーーーー

なにやら水色の髪の毛の子がこっちを見ている。織姫っていったけこの子。

「ジーーーーー」

口にだして言っちゃた！！なんなのこの子！

その間に美人さんとナイスミドルが警部さんと話を続ける。なにやらこのままでは俺は孤児院行きらしい・・・

まあ・・・それでもいいかな？『幸運A』もあるらしいからなんとかなるだろ。

すると、ジッと俺を観察？してた水色の子が美人さんに向かって

「この子どうなるの？」

といていた。心配でもしてくれてるんだろうか？・・・やさしいねえ・・・

「えつとね、この子はご両親がいないから孤児院で住むことになっちゃうかも知れないんですって」

「一人ぼっちになっちゃうかも知れないってこと？」

するとナイスミドル（意味は知らない）が

「いや、孤児院には他にも同じような子がいるから、一人ぼちっ
てことにはあが・・・」

しかし、そんな俺に同情しているんだろっか？ ナイスミドルは苦い顔をしている。・・・おうおう。そんな顔しちゃって。随分なこの人は・・・

「・・・ねえ、刀路さん」

すると、一人で真剣な顔をしていた美人さんが急に顔を上げると、ナイスミドルに話しかける。

「この子うちで引き取らない」

・・・は？

要約すると、この子が公園にいたときに自分たちが来て俺に会ったのは運命。ならば自分たちが引き取るべきではないかというもの・・・

なんとという無茶理論。そんな理由じゃナイスミドルも賛成なんか

「ふむ、それがいいな、そうしようー」

賛成すんのかよー!!

「あなたならそういつてくれると思ってたは！」

「おまえ！」

「あなた！」

そうして彼らは抱き合った・・・なにこの寸劇・・・

「ねえねえお母さん」

気づいたら水色の子が美人さんの服を引っ張っていた。どうしたんだ？

「結局どういうことなの？」

状況がわかっていなかったらしい。まあ子供だからしょうがないのかな？

「えっとね、この子が織姫の弟になるってこと」

美人さんが簡単に説明する。まあ、まちがっちゃいないが・・・すると水色の子はしばらく呆けていたが、次の瞬間目をかがやかせた！

「本当！この子私たちの家族になるの！」

「そうよー！織姫は弟も欲しがってたもんね。うれしい？」

「うん！」

なるほど、弟を欲しがってたのか、ならこの喜びようも納得できるな。

しかしこの子、どうかで見たような・・・

「なら新しい家族に自己紹介でもするか？」

いままで空気だったナイスミドルがそんな提案をしてくる。いたんですね、あんた・・・

「あらいいわね？じゃあ誰からにする？」

すると水色の子が元気よく手を上げる。

「はいはい！まず私から！私の名前は更識織姫！よろしくね！お父さんの背中で眠ってるのは妹の簪ちゃんだよ！」

なるほど、織姫っていうのか。ていうか妹さんはいつから眠って

んだ？結構うるさかった気がするんだが・・・ん？更識簪？・・・

「じゃあ次は私かな？私は更識刀路。更識家の専業主夫さ」

どうでもいいが、なんかかつこいいいなこの人。すごくイケメンってわけでもないんだが・・・しかしなんか嫌な予感がしてきたんだが・・・

もしあの『名前』がでてきたら確定なんだが・・・

「じゃあ最後は私ね？私の名前は更識南よ。一家の大黒柱をやってるわ。」

「たまに刀路さんに仕事を手伝ってもらってるけどね？」と締めくくる。

なんだよかった。どうやら俺の思いすし「ああ、そうそう！・・・え？

「私には二つの名前があつてね？南が本当の名前なんだけど、もう一つ名前があるの。更識家当主としての名前。それも教えておくわね？」

まさか・・・

「『楯無 たてなし』。更識家十六代目当主、更識楯無よ、よろ

しくねっ」

「……ふむ、どうやら俺はあの『更識家』に拾われたようだ……」

(え――――)

「……?」

「……?」

原作前1話目　そして主人公は家族ができて・・・　9/6修正しました（後書

はい！主人公はあの『更識家』に拾われました。ちなみにここに来てきた『織姫』が、『IS』での『楯無』になります。

原作どころか決闘が遠い・・・

登場人物の紹介で・・・ちよくちよく更新します。ネタバレ注意！！ 9 / 9 更

- どうもラドウです。主人公が楯無家入りしたところで、軽く登場人物の紹介をします。これはちよくちよく更新するのであしからず・・・

ネタバレが嫌いな人は見ないください。

登場人物の紹介で・・・ちよくちよく更新します。ネタバレれ注意！！

9 / 9 更

主人公

不動遊里ふどうゆうり？更識遊里さらしきゆうり

・この作品のオリ主。（本人は嫌がるだろうが）神『タバネ』によって、『遊戯王GX』の世界に転生した・・・はずだが、ライトノベル『インフィニット・ストラトス』の登場人物もいることから、どうやら『混合世界』に転生したらしい。

容姿イメージは前世と同じ『ネギま！？』の『犬上小太郎』を大きくし、冷静さをもたせた感じ。（年齢詐称薬を飲んだ小太郎みたいな感じ）

オリ主なのだが危険な目にあいたくないため、傍観者に徹し、平穏な生活を目指そうとするがなにかどんどん平穏から離れてってるのが最近の悩み

なんだかんだで自分の居場所を作ってくれた家族に感謝しており、家族をバカにされたりすると猛烈に怒る。若干シスコン気味だが、そこを突かれると顔を真っ赤にして否定する。破天荒な姉に振り回されるのが悩みだが、最近は諦めている。

料理は前世が一人暮らしなので元々できたが、プロ並みの父に教わり、腕が上がっている。また周りの環境のせいで心労がたまり、甘味を欲するようになり、甘味の腕前は父親を超えた。

デッキは複数使用するが、メインは『E・HERO』を使う。ちな

みに精霊はも複数いる。実は前世から靈感のせいでカードの精霊が見えていた。

決闘の腕は、この世界で伝説の決闘者たちといわれている決闘者たちと互角の腕。(本人曰く、転生してからドロー運が上がったらしい)

なんだかんだで、更識家の必須スキル『戦闘技術』『諜報技術』を納めており、『戦闘術』は当主である楯無をもしのぎ、楯無家へ講師にきていた剣道世界王者の『織斑千冬』と互角の腕(タバネが魔改造したせい)。

自分はモテないと思っっているが、実は中学時代では密かにファンクラブができていた。幼馴染に織斑一夏、五反田弾、鳳 鈴音がいる。最初は『IS』主人公の一夏とは距離をとろうと思ったが、一夏が上級生のグループにリンチにされそうになってたところに助けに入ってしまう。その後、一夏と帰っていたら、千冬と遭遇し、折檻を受け、同じ体験を共有したということで、友達になった。

いつもはだるそうにしているが、決闘を楽しんでいるときはとてもいい笑顔をしており、(怖い意味ではなく)それにときめく女性もいる。

ライイエロー所属

プラネットシリーズ『E・HERO ジ・アース』の所持者

主人公能力

・フラグ体質

恋愛フラグから死亡フラグまで、あらゆるフラグが立つ可能性を持っている。これは主人公が元々持っていた体質

・風邪か？

主人公の固有スキル。異性が顔を赤くしても、『風邪か？』で済ませてしまう。主に主人公キキャラが、このスキルを持つ。

タバネがつけた能力

・幸運 A

生活に一生困らないどころか、大富豪になれる素質を持つ。もちろんカードもレアカードがよくあたる・・・

タバネが勝手につけた能力

・身体能力天元突破

鍛えれば鍛えるほど身体能力が向上する。

・学習能力Max

学べば学ぶほどものごとを習得できる。

・超直感

危機に瀕すると、予言のごとく、次に起きることが予想できる。

・アンサートーカー

問題の答えをだす能力。

更識織姫（おしじきおりひめ）（十七代目楯無）

・主人公の義姉。ザ・ブラコンにしてザ・シスコ。能力は原作同様『完璧超人』で、十七代目楯無の名を継いだ。楯無の仕事で、サイバー流とも交流があり、『マスター鯨島（あくまでサイバー流の師範としての鯨島であり、校長としての鯨島ではない）』、『カイザー亮』とも面識があり、決闘で二人を倒している。

十七代目楯無としてだけではなく、プロ決闘者としても活躍しており、二つ名は『女神 ゴッテス』

この小説の『楯無』とは当主としての名前を表す他に、仕事名、一種の芸名として通っている。

使用デッキは『リチュア』、『代行儀式天使』で、儀式、パーミッションを得意としている。一度ある大会で伝説の決闘者『城之内克也』と戦った経験があり、一応は勝ったが、城之内の持ち前の強運で、なんども場をひっくり返されたことから、「二度と戦いたくない相手」としている。そのときから城之内、さらにその恋人の孔雀舞と知り合いになる。

この小説では、主人公の頼みをつけいろと暗躍する予定。主人公のことは愛しているが、恋愛的な意味ではなく親愛的な意味。

アイドル染みた人気があるが、決して『アイドルデュエリスト』ではない。

プラネットシリーズ『The splendid VENUS』の
サ・スフレンディッド・ウィーナス
所持者

容姿イメージはそのまま『I S』の更識楯無

更識簪ならしき かんざし

主人公の義妹。同い年。趣味は『I S』原作と同じで、特撮物の鑑賞。しかし原作とは違い、主人公のがんばりもあり、姉への劣等感はなく、仲がいい。

性格は、『I S』原作同様に内向的で、アカデミアには、世話係の『布仏本音』のほとけ ほんね』とともに、主人公と一緒に入学する。

使用デッキは『M・HERO』。

プログラミング技術などは当主である楯無をも上回っており、彼女が作成したプログラムは『K C（海馬コーポレーション）』をはじめとした様々な会社に採用されている。またハッキング技術はK Cのメインサーバに侵入できるほど。

オベリスクブルー所属

容姿イメージはそのまま『I S』の更識簪

更識南ならしき みなみ（十六代目楯無）

主人公の義母で、十六代目の楯無。今は娘にそれを譲り引退した。

しかしその影響力は健在で、海馬瀬人かいばせんとが海馬剛三郎かいばこうざんろうからKCを奪うときに彼に協力した。それくらい瀬人は彼女に頭が上がらない。(そのおかげでKCと更識家は同盟関係のようになっていた)そのとき、当時のKCの諜報部門部長である当時の峰岸刀路みねがしとうじ。現在の更識刀路とやりあう。そこで彼に惚れ、その後引退した刀路にアタックして、ゴールインした。(彼女にとって、自分と互角の相手が初めてだったため)

楯無としての能力は更識家の歴史上?1を誇るが、料理の腕は壊滅的で、家事の一切は刀路に任せている。

容姿イメージは楯無(織姫)をタレ目にしたような感じ。所持デッキは『墮天使パーミッション』。主人公曰く「なにあれ怖い」らしい。

主人公を拾い、実の息子のように育て、なにか隠しているのは知っているが、黙って見守ることにしている。

夫と息子の『フラグ体質』が悩み。織斑千冬のスポンサーでもあり、織斑両親とは知り合いである。

更識刀路むかしとうじ

旧姓は峰岸。主人公の義父で、更識家の専業主夫。料理の腕はプロ級だが、甘味の腕を息子に超えられたことがちょっとさみしいと感じている。

実は、元海馬剛三郎の諜報部門の部長で、そのときの楯無だった、『更識家史上最もすぐれた楯無』である南と互角の諜報戦を行うが、

敗れる。その後KCが瀬人の物になった後は、剛三郎に義理立てし、KCを辞職する。（瀬人、モクバは彼をひきとめたが）その後、南からの猛アピールを受け、ゴールインする。

旧KCでは、瀬人とモクバに同情的で、モクバは彼に懐いており、剛三郎の部下の中では、瀬人は唯一彼だけを心の中から認めていた。デッキは所持していない。

容姿イメージは『とある魔術の禁書目録』の上条父

更識家設定

この作品の更識家は表向きは決闘の名門であり、多くの有能な決闘者を輩出している。しかし裏では『対暗部の暗部』という仕事をしているのは原作と同じ。原作どおり、日本政府の仕事を主に請け負っているが、特例として、KCとは専属契約を結んでいる。

万条目グループに「傘下につけ」と恐喝されたが、それを無視した。それで万条目グループは更識家を取り込もうと働いたが、報復され、グループの株式も半ば、半数ほどおさえられることになる。

裏社会をしている者たちにとっては、『更識家』に手をだすのは禁忌　タブー　とされている。

神『タバネ』

この小説で主人公を転生させる神。その正体はライトノベル『インフィニット・ストラトス』の『篠ノ之束』が、死後、神になった存在。

神としてはかなり高位の存在のようであり、自分の勝手に死人を転生させるくらいの権力はある。身内、興味のもったもの以外に冷たい性格はあいかわらずで、他の神様を『駄神共』と評している。

主人公を『興味対象』として認定し、転生させる。また主人公と一緒に死んだ平行世界の『篠ノ之篁』を、主人公と一緒にの世界に転生させる。

容姿イメージはそのまま『IS』の篠ノ之束

篠ノ之篁
しののへ

ヒロインその1。転生者といえば転生者。平行世界の『篠ノ之篁』で、前世で主人公に惚れる。タバネによって、主人公と同じ世界に転生する。タバネに、『デュエルアカデミア』に行けば、遊里に会えると聞き、デュエルアカデミアを受験した。実家、家族、能力、容姿イメージなどは『IS』原作と同じだが、束はいない。実は『IS』の原作同様、織斑一夏の『ファースト幼馴染』なのだ。親の都合で転校してしまったため、主人公とは会えなかった。（このときから主人公のことを思っているため、一夏のこととはただの友人だと思っている。）

剣道の日本王者。

『IS』原作ではツンデレだが、この小説ではツン部分を少なくするかもしれない。

アカデミア受験で再会予定

所持デツキは『六武衆』

オベリスクブルー所属

のほとけ うつほ
布仏嘘

更識家の分家である布仏家のほとけの当主。設定は『IS』と一緒に。今代の『楯無』である織姫の従者であり、幼馴染。プロデュエリストである彼女のマネージャーも担当している。

以前、主人公の家に遊びにきた『五反田弾』と偶然出会い、彼のアタックもあり、気になる存在になっている。（友達以上恋人未満といったところ）

のほとけ ほんね
布仏本音

更識家の分家である布仏家の次女。趣味嗜好など、設定は『IS』と一緒に。この小説では簪と主人公と一緒にアカデミアに入学する。

オベリスクブルー所属

布仏家

『IS』原作と同じで、更識家を補佐する家柄。更識家の分家。

おりむら いちか
織斑一夏

『IS』原作主人公にして、この小説のサブ主人公の予定。原作同様鈍感で『フラグ体質』だが、同時に主人公にも鈍感だといわれているが、こいつだけにはいわれたくないと思っっている。また、この小説では両親に捨てられたのではなく、両親が事故死しただけ。それからは千冬が女手一つで育てたために、若干シスコンが入っている。

主人公は最初冷たいイメージしかなかったが、その後、上級生にリオンチにあいそうになつてたところで（その上級生のリーダーの妹が、一夏に告白してきたが振られ、それを逆恨みした彼女にそそのかされたため）主人公に助けられ、その後、千冬の折檻を受けた主人公と、同じ体験をしたということ、仲良くなる。

原作どおり、家事が万能。しかし料理では主人公に勝てないため、ちよくちよく教えてもらっている。

プロデュエリストの姉に憧れて、主人公と一緒にデュエルアカデミアに入学する。所持デッキは『ライトロード』。

精霊は見えない。後々に見えるようにする予定。筆記はそこまでよくない。

容姿はそのまま『IS』原作どおりの織斑一夏

所属はライイエロー

織斑千冬おりむら ちかゆ

織斑一夏の姉で、『戦乙女』ブリュンヒルデの二つ名を持つ決闘者。デッキは『開闢』を切り札とし、『カオスソーサラー』をメインにした『カオスロード』。

原作とは違い、親に捨てられたわけではないが、早死にしてしまったために、プロデュエリストになって、一夏を女手一つで養う。実は孔雀舞くくまの中学時代の幼馴染。中学時代は千冬も荒れたいたため、なにかと敵対していたが、いつのまにか仲良くなり、親友と呼べる

存在になっている。

この話では、『武藤遊戯』^{むとうゆうぎ}、『海馬瀬人』などと同じく伝説の決闘者とされており、『決闘王国』^{デュエリストキングダム}では人数の関係でシードになり、『盗賊キース』、『バンデット キース』を打ち破った城之内を破り決勝進出。しかし決勝で遊戯に敗れた。（事実上2位）バトルシテイでは舞と宿敵対決をして勝利する。しかしその後の城之内との決闘で、彼のギャンブルカード『ルーレットスパイダー』に敗北する。（その後、シードのマリクと戦い、原作通り、城之内は敗北する）

最近親友の舞が、城之内と付き合いだしたため、若干焦っているふしがある。（顔にださないが）舞の夜の性生活を聞かされて、赤面する乙女な部分もある。

剣道の世界王者でもあり、スポンサーである楯無家からの依頼で主人公の教導を任された。しかし自分と互角に戦う主人公を気に入り、自分の弟と会わせたり、家に招待したりする。決闘でも、一応勝ち越しているが、自分に勝つ腕をもつ主人公が気になりだし、普段のけだるい雰囲気と、決闘中のその笑顔のギャップにやられてしまう

現在は、鮫島の頼みでアカデミアで教師をしている。授業は実践主義。ヒロインその2

容姿イメージその他は『IS』原作そのまま

五反田弾^{ごたんだ だん}

容姿イメージは『IS』原作の五反田弾そのまま

『五反田食堂』の二代目。布仏噓には現在アタック中で、友人以上恋人未満といったところ。

本当は進学する気はなかったが、祖父である『五反田巖^{ごたんだ げん}』に、「高校くらいでなきゃ店は継がせねえ」といわれ、どうせなら主人公たちと一緒にデュエルアカデミアに進学する。

デッキは『アンデットワールド』で以外に強い。そして以外に知識も豊富と、隠れた強キャラポジションにする予定。

趣味は料理の新メニュー開発。若干原作と性格がちがつかも・・・

所属はラーイエロー

アカデミアでは基本、主人公、一夏、弾で行動している。

五反田蘭 ごたんだ らん

容姿イメージその他『IS』原作の五反田蘭そのまま

一夏に惚れてるのもそのまま。原作へはレイと同時期に入学予定（そこまで続けば）

五反田母

『吾輩は猫である 名前はまだない』キャラその1。五反田食堂の初代看板娘。（ちなみに二代目は蘭）見た目は20代前後の年齢不詳

五反田父

『吾輩は猫である 名前はまだない』キャラその2。空気。三沢を超える空気男。というかでないんじゃないかな？

五反田巖

五反田食堂の頑固おやじ。まだまだ現役でやっている。彼の五反田食堂は、知る人ぞ知るドミノ町の隠れた名店となっている。

蘭を泣かせたやつには鉄拳制裁があり、その拳は『オベリスクの巨神兵』をも超えるらしい。

五反田食堂

ドミノ町の隠れた名店の一つとして、人気がある。名物は『業火野菜炒め』と『女帝定食』の二つ。（戦乙女定食は千冬が決闘大会ツアーで優勝したため、記念に作られた。千冬の許可はとってある）

二代目看板娘の蘭を泣かせたやつは、巖、弾、常連客で殲滅するという『暗黙のルール』があるらしい。

鳳 鈴音 ふおん りんいん

主人公の幼馴染で、一夏のセカンド幼馴染。『IS』原作と同じく、一夏のことを好き。

一夏の鈍感さにも呆れているが、主人公の鈍感さにも呆れている。

この小説では『IS』原作どおりに中国に転校するが、後々ある形でアカデミアにやってくる。

所持デッキは『ガジエマシンナーズ』

中華料理屋 鳳

鈴の実家。味では五反田食堂に匹敵し、人気もあつたが、鈴の転校

とともに、ドミノ町から姿を消した。
後にある形で登場予定。

セシリア・オルコット

容姿イメージは原作と同じで、この作品では男というより、格下の僚を蔑視している。

所持デッキは『ジエムナイト』

イギリスジュニアチャンピオン。

所属はオベリスクラブ

シャルロット・デュノア

容姿イメージは原作と同じ。過去に両親の仕事の関係で、十代と出会っている。(このとき十代はすでに『E・HEROデッキ』になっている。)

デッキは未定

ラウラ・ボーデヴィツヒ

容姿イメージは原作と同じ。デッキは未定。

登場人物の紹介で・・・ちよくちよく更新します。ネタバレ注意！！ 9 / 9 更

このキャラ設定はちよくちよく更新させるよていなのであしからず。

ISメインヒロインは全員だしたいなあ

原作前2話　そして主人公は魂《デツキ》と再会して・・・　10/12修正

前回のあらすじ!!

公園スタートで始まった主人公の第二の人生。そこに現れたのは、水色の髪をした女性たち。彼女たちに引き取られることになった主人公。しかし彼女たちの家は、どうやらあの『更識家』で・・・

本編です。まだ他のキャラは出てきません。今回は主人公のカードたちとの再会です。

主人公がなぜデツキを命を賭けてまで大事にしてたか、その理由が最後らへんにです。

サイド：遊里

もすもす、ヒネモス。皆の主人公、遊里さんだよ！・・・オエ。

あのバカ《タバネ》の真似してみたが、男がやっても気持ち悪いだけだな、これは。

ということであの『更識家』に引き取られた不動遊里あらため、更識遊里だ。今年で10歳になる。

はあ、まじやってらんねえよ・・・俺はデュエルをしながら平穩な生活を送りたかっただけなのに。

なんでよりもよってあの更識家に・・・

あん？更識家ってなにって？ええつとだな、とりあえず『IS』は知ってるな？知らない？知らないやつはまずこの小説読むなよ、ただでさえ駄文なんだから、つまないだけだぞ？（メタ発言）・・・

えつと、なんだっけ？ああ、更識家についてだっけ？とりあえず、ISにでてきた組織で、『対暗部用の暗部』の家柄（まあ、若干違うが、カウンターテロの専門家みたいなもんだな）で、ようするに裏社会に精通している物騒な家系だ。

ただ、この世界じゃ若干違うようで、表向きは決闘者の名門で通

つてるらしい。それで、なんでか知らないが、十六代目楯無の母親、更識南が（この世界では『楯無』は名前じゃなくて、仕事名、称号みたいなものらしい）海馬瀬人のKC乗っ取りに協力したおかげで、海馬瀬人と専属契約を結ぶことになり、内の母親には頭が上がりならしい。・・・うちの母親は化け物か！！

そして、父親である、ナイスミドル（意味はよく知らない）更識刀路は元海馬剛三郎直轄の、諜報機関の部長であり、家の母と互角の戦いを繰り広げたらしい。・・・

あれ？家の母親ってたしか、『更識家始まって以来の天才』とかいわれてたはずなんだけど・・・

え、父親も化け物なの？そんな父親に母親が惚れて、母親の猛アタックもあり、二人はゴールインしたらしいんw。

二人は今でもらぶらぶみたいで、まあ、仲がいいのはいいんだ？でもさ、人目もはばからずにいちゃつくのはやめて欲しい。まじ鬱陶しい。本当に砂糖つてでるんだね。・・・

ああ、話がそれてきた。まあつまりは平穩に生きるのはやっかいな家系ってことだね。まいつちやうよ。・・・まあ、今の両親が俺を拾ってくれたのは感謝してるけど・・・

う、うんん！！／＼今は更識家に連なるものは習得しなきゃならない技術などもあり、結構大変な日々を送っている。・・・

いや、この訓練は実は3歳くらいのおきからやってんだけど、子供がやるメニユーじゃないよね。

8歳のときなんか15歳50人組み手やらされたんだけど。さすがに46人がげんか、え？8歳でそこまでやるのはすでに人外だつて？し、失礼な！この訓練を毎日やったらば普通だし！・・・普通だよな？（普通ではありません）

そうそう、なんかそのせいで、同年代の門下生が相手してくんなくなつて、大人を相手に訓練してただけだ。それでも相手が弱いのか（あなたが強すぎ チート なだけです）最近では大人でも相手にならない。とくに剣術は母親を超えてしまったようだ。

・・・なんか自分が怖くなつたきた・・・後ろ向きな意味で。

そのためかこの間、母親が外部から講師が来たんだけど、その人がなんとあの二次創作において『天然チート』の一人に数えられる一人。

IS原作では『ブリュンヒルデ戦乙女の称号を持つ『織斑千冬』だつたんだ。・・・orz・・・

なんでこんなとこにいるんだと思つたら、彼女はプロデュエリストで、彼女の両親が家の両親と知り合いで、その縁でスポンサーになつたらしい。（あとで母親に聞いたら、彼女たちの両親は単なる事故死で、IS原作みたいに、彼女たちを捨てたのではない）

なんとあの『決闘王国』で、城之内を打ち破り、2位入賞、バトルシテイでは5位入賞するほどの腕前らしく、この世界でも『ブリュンヒルデ戦乙女』の称号を持つてるといふのだ。（本人はそういうと嫌がる）

この世界では、もう伝説の決闘者だなこの人。で、それと同時に剣道の世界王者でもあるらしい。・・・なにそのチート。

彼女はごつやら母親に頼まれて俺の教導に来たらしい。そのときの回想ドン……

「君が、更識遊里か？」

その人は黒髪をたなびかせ、俺に問う。どっかでみたことあるなあ？と思い、はいと答えると、

「今回から、君の剣術の教導をやることになった織斑千冬だ。よろしくたのむ。」

「はあ……はい!？」

お、織斑千冬ってあのISにでてくるブラコン鬼教師じゃねえか!?!なんでこの人がこんなところにいんだ!？

「返事は!」

「は、はい!?!」

なにこの人、まじ怖いんですけど!？

「君の母親に頼まれてな？手加減はしないからそのつもりで。」

母さんが？

「あの、母とはどういつ？」

「それは後だ。今はとりあえず構えろ。」

そういつと彼女は俺に向かって木刀を構える。いや、でも・・・

「えっと、防具は・・・？」

「いらん。どうせあたらんからな？」

「————カッチーン！————」

その上から目線に頭にきた俺も防具を脱ぎ捨て構える。なめやがつて！そこまでいうなら俺も手加減しないぜ！

そんな俺を、彼女は不思議そうに見ているが、知ったことではない。

「いいのが、防具をつけなくて？」

「いりませんよ？どうせ・・・あたりませんから」

そうすると織斑千冬はキョトンとした表情になる。まさか、自分より年下の男にこんなことをいわれるとは思わなかったのだろうか。

俺の言葉の意味を理解したのだろう。次の瞬間、獲物を狙う獣のような、それでいて女神のような美し笑みを、その顔につかべる。

「おもしろい、こい小僧」

「いきますー！」

そして俺と彼女の戦いが始まった



というのが、あの人と俺の出会いだ。

・・・結果？一本はとれたんだが、二本とられて俺の負け。もちろんお互い寸止めしたが。

俺も最近チートなんじゃね？と、自分で思ってたが、あの人も大概チートだな。

いや年齢考えたら、この結果が当然なのか？ただこの戦いで、本気だしすぎたせいかな、笑顔でまたやろうといわれた。

・・・本当はいやだが、あんな顔されたら断れねえよな普通。

決闘？一応したけど、負けちゃった。

ていうか、この世界で『カオスロード』って鬼畜すぎねえか！？
苦渋の選択も制限で、禁止になってねえしよ！？

苦渋の選択

通常魔法

デッキからカードを5枚選択して相手に見せる。相手はその中から1枚を選択する。そのカードを自分の手札に加え、残りは墓地に捨てる

まあ、こつちの世界じゃ、向こうでは反則クラスのカードもあり、それで組んだデッキで、なんとか、勝率4割はだせたが。・・・

なに？前世のデッキはって？それがあのバカうさぎ、まだ届けないんだよ？そろそろ届いてもいい歳だと思っんだが・・・

ーコン、コンー

「ゆづちゃん起きてる〜？」

この声は・・・

「起きてるよ、あねき・・・」

俺の声を合図に入ってきたのは水色の髪をした女性。

母親よりきつくない程度にツリ目になっている彼女は、『更識織姫』。十七代目楯無になる予定の俺の姉にあたる女性で、『IS』原作では、IS学園生徒会長になっていた人だ。

「どづしたんだ、あねき。急に。」

「なにして、今日はゆうちゃんの誕生日だから、私と簪ちゃんと一緒にでかけるっていったじゃない！」

頬をふくらませてあねきが答える。

どづでもいいが、いちいちこういつ仕草が似合うな、おい。でもな……

「聞いてないんだが？」

「え？」

そういつと、あねきは考え込みだったが、急に冷や汗をかいてこちらをみる。まさか……

「忘れてたな？」

「あはは？ごめんね？」

「……はあ」

まああねきについてはもういろいろ諦めてるので、俺はさっさと着替え始めようとする。しかし、

「……………ジ……………」

なんでまだ居るんだ、この人……

「……………でてけ」

とりあえずあねきを部屋から追い出し、着替え、いつも使ってるウエストポーチを手にとり、玄関に向かう。

そこにはさつき見たあねきと、俺の妹になる簪がいた。とりあえず、

「おはよう簪」

「おはよう遊兄さん……おそかったね……」

どうやら我が妹は若干ご立腹らしい。

彼女は更識簪。『IS』原作では更識楯無の妹で、『打鉄二式』を駆る日本代表候補生だったが、この世界では俺の同い年の妹で、電子技術なら、姉である織姫をもこえる天才プログラマーにしてハッカーである。

そのせいか、IS原作とは違い、あまり姉に劣等感をもってなく、俺とも普通に仲のいい兄弟をしている。

おっと！そろそろ遅れたいわけしないな。

「いまあねきから聞いたんだからしょうがないだろ？」

嘘はいつてない。というか紛れもない事実だ。

すると、簪はあねきのほづをジト目でみる。

「姉さん？・・・」

「いや、その、ちょっとしたっつかりよ、うっかり。あはははは・・・ごめんなさい」

どうやら弁解をじょうとしたらしいが、簪の眼力に敗れたようだ。弱いなあ・・・

すると簪はいかにもしょうがないなあとゆう溜息をつき、俺のほうを向きながら、

「まあ、姉さんだから・・・しょうがないね・・・」

と俺に同意を求めてきた。でもまあ・・・

「まああねきだからなあ・・・」

俺も同意見だったりする。

「二人ともひどくない!？」

あねきはいかにも心外だと声を荒げるが、普段のあねきの行いが悪いと思う。

まあ、このままでは拉致があかないので、

「まあこのままじゃ、時間なくなるから早くいじつぜ」

俺がそういうと、簪も同意見なのか、頷き俺と一緒に玄関をでる。
・・・俺と二人で・・・

「ちょっとー!二人ともお姉ちゃんおいてっちゃやだー!」

後ろから聞こえるあねきの叫び声をBGMに、思う。・・・ああ、この家に拾われて良かったと・・・

「まっつてよー!」(泣)



「はー、食った、食った」

今なにしてたかった？俺の誕生日パーティー。

いや前世だと天涯孤独で、誕生日なんて祝う機会なんてなかったからなあ。楽しかった！

・・・本当にこの家に引き取られてよかった。

前に俺が倒した門下生が負けたのが悔しかったんだろうな、俺が本当は更識家の人間じゃなくて、拾われたことを暴露して、（それを怒った母さんがその男をぼこぼにして破門したのは記憶に新しい）それで家族会議で、俺がこの家の子じゃないって教えられた。

まあそんなこと最初から知ってたけど。でもそれでもお前は私たちの大切な家族だっていつてくれて。思わず泣いてしまったよ。いまでは俺の大切な家族さ！・・・恥ずかしいから誰にもいわねえけど／＼／＼。

俺がベットの上で御馳走の余韻に浸っていると、

ーーーーピカアアアア！！－－－－－－－－

なんと、部屋の隅が突然光りだした！

「な、なんだ！」

すると光がやみ、中から現れたのは・・・

「・・・・・・・・・・」

うさみみだった・・・なにやらうさみみの下が違う空間につなが
ってるようになってる。異空間ってやつか？そのうさみみを俺は・
・

「・・・・・・・・・・寝るか」

ほっとくことにした

「ちょっと、ちょっとー！なんでそこで放置！？普通そこは引つ張
るでしょ！？なんで、なんでなのかな！？うさぎはさみしいと死ん
じゃうんだよ！？」

「うるせえ！騒ぐんじゃねえよ！家族に気付かれるでしょ！？」

ひさしぶりのうさみみはこの上なく喧しかった。

「ああ、それなら大丈夫。今この空間はタバネさんとゆっくんだけ
しか干渉できないから」

「・・・なにそのご都合主義」

なんでもありだなこいつ。まあ、一応神様だから当然か・・・

「で、何の用だ？まあ大体想像つくが・・・」

「おふこーす！まあ本当はもっと早くてもよかつたんだけどね？君のデッキをもってきたよ！で、こっちが君がもつてたカードたちだぜえー！」

そういつてタバネは俺にケースを渡した。ああ・・・懐かしいな、

「サンキユ。やっぱりこいつら）・・・（がいないとな・・・」

本当にひさしぶりだな、お前ら・・・

「あと、これが君のカードたち。」

「さんk・・・ん？」

なんか見たことないカードがあるな・・・

「なあ、このカード・・・」

「ああ、それはタバネさんのサービスだよ 君たちでいうアニメや漫画版のオリカもあるから。」

「……まじで!？」

「そいつは助かるが……いいのか？」

「いーの、いーの! ああただそのかわり、君の使用するカードに制限が加わるけどね!」

「制限？」

「なんだそりゃ？」

「とりあえずまずはこれを見て？」

「そういつて指さされたのは『E・HERO』デッキ。俺のメインデッキでもある。えっと……ん？」

「なあ『超融合』ってカード入れてたはずなんだが？」

超融合

速攻魔法

手札を1枚捨てる。自分または相手フィールド上から融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。このカードの発動に対して、魔法・罫・効果モンスターの効果を発動する事はできない。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

他にもプリズマーが 5 になってる。これはいつたい・・・？

《E・HERO エレメンタルヒーロー プリズマー》 十

効果モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族 / 攻1700 / 守1100

自分のエクストラデッキに存在する融合モンスター1体を相手に見せ、

そのモンスターにカード名が記されている融合素材モンスター1体を自分のデッキから墓地へ送って発動する。

このカードはエンドフェイズ時まで墓地へ送ったモンスターと同名カードとして扱う。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「この世界では、カードに超常の力が宿る場合があるのは知ってるね？」

「ああ」

たとえば遊戯王無印の世界なら『三幻神』、GXの世界なら『三幻魔』だな。

「そうそう、超融合もその一つなんだけど、ようするにそうゆう超常のカード、闇のカードなんかは使えなくなってるんだ。わかりやすくいえば、ボス級のキャラが使うカードは使えないってことだね。いわゆる『世界の修正力』が働いてるんだよ。さすがのタバネさんもこれはいじれなくて。」

「・・・ちなみに無理にいじると?」

「世界滅亡だね?」

「・・・いや』だね?』って・・・」

まあ、そういうことならしょうがないな。超融合の枠も他のカードで補えるし。

「ふーん、了解。それをこの新しいカードたちで補えばいいんだな?」

「こんぐらっちれ〜しよ〜ん!それじゃタバネさんは帰るねえ。」

「ん？もう帰るのか？もうちょい居座ると思ったんだが？」

「ゆっくんがタバネさんをどういう目でみてるのかよくわかったよ・・・まあ、作者がもうすぐご飯だから早く終わらせなきゃいけないだけなんだけどね？」

おいこら神様、メタ発言すんな！

(君もしてなかった？by作者)

ん？今なにか声が・・・

「そんじゃねゆっくん、あでゅー！」

はいはい、あでゅー、あでゅー。そうしてタバネは光に消えていった。

というかあいつ現れる度に発光しながら登場するんだろうか？まぶしくてしょうがないんだが・・・

ちて・・・

「ひさしぶりだな、お前ら」

だれに話しかけてるかって？それは

(おひさしぶりです、主)

(ひさしぶりゆづり、元気してた？)

(ギュピ！ギュピ〜！)

(おう、ひさしぶりだな大将！元気してたか？)

(さみしかったよ〜ゆづり〜)

(ユウリ、ナイてナイ？)

懐かしい声が聞こえる。ああ・・・涙がでてきそつだ。

でも泣いたりなんかしたら、『こいつら』にからかわれてるのは目に見えてる。

え、「『こいつら』ってだれかって？」じゃあ、簡単な紹介をしようか・・・

上から『E・HEROジ・アース』、相変わらず無駄に礼儀正しいな。

《E・HERO エレメンタルヒーロー ジ・アース》 十

融合・効果モンスター

星8 / 地属性 / 戦士族 / 攻2500 / 守2000

「E・HERO オーシャン」+「E・HERO フォレストマン」
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
自分フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のつ
いた
モンスター1体をリリースする事で、このカードの攻撃力は
このターンのエンドフェイズ時まで、リリースしたモンスターの
攻撃力分アップする。

二番目は「久遠の魔術師 ミラ」、あいかわらず綺麗ですね。

《久遠の魔術師 ミラ》

星4/光/魔法使い/ATK1800/DEF1000
このカードが召喚に成功した時、相手フィールド上にセットされた
カード1枚を選択して確認する。この効果の発動に対して、相手は
魔法・罫カードを発動する事はできない

三番目は「スノーマンイーター」、おうおう「飯をくれ」って？
(遊里はスノーマンイーターの言葉が理解できます)

いまいうことなのかそれは!?

《スノーマンイーター》 十

効果モンスター

星3 / 水属性 / 水族 / 攻 0 / 守 1900

このカードがリバースした時、
フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する。

四番目は『インフェルニティ・アーチャー』、あいかわらず気風
がいいねえ。

《インフェルニティ・アーチャー》

星6 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 2000 / 守 1000

自分の手札が0枚の場合、
このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる。

五番目は『E・HERO レディ・オブ・ファイア』、さみしが
りは変わってねえなあ。

《E・HERO レディ・オブ・ファイア》

星4 / 炎属性 / 炎属 / 攻 1300 / 守 1000

自分のターンのエンドフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で
存在する「E・HERO」と名のついたモンスターの数×200ポ
イントダメージを相手ライフに与える。

そして最後が『黒龍の雛』、大分言葉がしゃべれるようになったな、お前。

《黒龍の雛》「くろりゅうのひなご」

十

効果モンスター

星1/闇属性/ドラゴン族/攻 800/守 500

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地に送る事で、

自分の手札から「真紅眼の黒竜」1体を特殊召喚する。

彼らは前世で俺の精霊だったカードたち。

なんで前世に精霊のカードかって？いや、俺靈感あつたら？それがどうやらカードの精霊も見えるみたいで・・・

簡単に話すけど、前世で、俺は両親一緒に飛行機事故にあつただけど、俺はこいつらのおかげで生き延びたんだ。

それ以来、こいつらは俺の友達で・・・家族なのさ・・・

(しっかし、まさか大将が転生なんてことになるなんて思わなかったぜ。)

インフェルニティ・アーチャーが(以下、『アーチャー』)感慨深げにいう。まあ、俺もこんなことになるとは思わなかったけど・・・

たかつた言葉を送った。

「おかえり!!」

そ

れに皆は最初、キョトンとしていたが、すぐに笑顔になり、

()()(ただいま!!)(!!)です!!)

(タダいま!!)(ギュピ、ギュピ!!)ただいま!!)

微妙に揃ってないのがこいつららしいと思った。

まあ……これから楽しくなりそうだ……

原作前2話　そして主人公は魂へデッキと再会して・・・　10/12修正

原作前2話でした。主人公がカードを大切にしている理由は、あんな感じではなかったでしょうか？・・・短編で個別に書こうかな・・・

ISのヒロインたちは全部書こうと思ってるんですが・・・ラウラとシャルロットどうしよう・・・

最近管理局も導入するのも面白いと思っただんですが、それだと設定過多になってしまうのでとりあえず、落ち着いてから考えようかなと思う今日この頃・・・

次回は主人公が、あの「朴念仁・ザ・朴念仁」と出会います。どんな出会いになるのか。あまり期待しないで待っていてください。以上！ラドゥでした！！

原作前3話　そして主人公は朴念仁と出会って・・・　9 / 6 修正しました（前

前回のあらすじ

前世のデッキを手に入れた主人公。じつは彼のカードには複数のカードの精霊が入っていた！遊里は精霊たちと、どんな物語を紡ぐのか・・・

連投です。今回はあの『IS』主人公。キング・オブ・朴念仁の称号をもつ男の登場です。

原作前3話　そして主人公は林念仁と出会って・・・　9 / 6 修正しました

サイド：遊里

俺の目の前にはある男がいた。俺の平穩を守るためには関わりになりたくない人物・・・

「俺は織斑一夏！よろしくな！」

どうしてこうなった・・・

前世の精霊　仲間　と再会してから、3年がたった・・・いろいろあつたなあ。

特訓はどんどん激しくなったし、（なんか『最強の弟子　ケ○イチ』にでてきたような機械がでてきたし）

簪のプログラムがKCに正式採用されたし、（顔を赤らめて恥ずかしがってる簪をみて、あねきが鼻血をだしたのは、見なかったことにしよう）、

あねきがプロ入りして、『女神』^{コッテス}なんて呼ばれてたし、（この世界で『ガストクラーケン型リチュア』と『代行儀式天使』は鬼畜だと思っただ、特に後者）

そうそう、千冬さんがアカデミアの教師になるらしい。なんでも恩人の一人である、アカデミアの校長に頼まれたんだということだ。

そういえば、俺がアカデミアに行くかもいつてら、真剣な顔を
して、「本当か！」と聞いてきた。なんか嬉しそうだけど、なんで
だろうか。・・・きっと自分と互角に戦える相手がいてうれしいん
だなきつと。(いいえ、フラグがたったからです)

なんか千冬さんに、家に来いという感じのことを何回かいわれた
けど、今のところのらりくらりとかわしている。だって千冬さんの
家には、あの『キング・オブ・林念仁』がいるだろうからな。悪い
やつじゃないんだろうが、俺の平穩のために関わらないようにした
ほうがいいだろう。・・・いつまでかわせるかわからないが・・・

(そこんとこどう思うアーチャー?)

(あきらめればいいと思うぜ?)

(いきなり見捨てられた!?)

彼はインフェルニティ・アーチャーの『アーチャー』。

アーチャーなんて名前だが、決して某『赤い錬鉄』みたいな皮肉
屋ではなく、某『光の御子』のような、気風のいいあんちゃんタイ
プの精霊。俺の大切な仲間の一人だ。

なぜ、喋らずに会話ができるかは、昔赤ん坊のときにタバネとし
た、『念話』を使っている。

なぜできるのかって?なぜかできるんだから仕方ないだろ!だん

だん人外染みてきたとかいうな！！（タバネがつけたチートのせい）

（だってよお、大将前世のときもいろいろ巻き込まれたじゃねえか）

（うぐっ！・・・それは・・・）

そうなのだ、なぜか俺は騒動に巻き込まれやすい。

前世でも、身近なところでは、ナンパに困ってる女性を助けたら、そのナンパしてたやつ仲間が報復に来たり、（とりあえず濡れた網を被せて、スタンガンあてといた）

俺が限定メニューを食べようとしたら目の前で強盗が起こったり、（とりあえず、俺流旋風脚（笑）をくらわせといた）

なんか知らないが、目の前で仮面かぶった幽霊と、刀持った幽霊が戦いを繰り広げてたり、（幽霊もコスプレしてたりするのかな）まあ、そんな感じだった。

たしかに、アーチャーのいうとおり。前世のときは、俺はなぜか知らないが騒動に巻き込まれやすかった。（フラグ体質のせい）

しかし、いや、し菓子、駄菓子菓子。（古い）今世の俺は一味違う！

おれはめだたずアカデミアに入学し、目立たず過ごし、平穏な日々をおくるのだ・・・

え？だったらアカデミアに入らないほうがいいんじゃないかって？

ふふふ、あまいなワトソン君（超古い）！

自分の目が離れたところで世界を賭けた戦いが起きてるのを知ってるのにほっとくなんて、俺には耐えられない。心配てきな意味で。

ならばアカデミアで遠目から観察して、原作キャラが危なくなったら、裏から助ければいいしね？そう俺が考え込めると、

（おっと、着いたぜ大将）

（お、サンキュウ）

どつちやら目的地についたらしい。どこにだって？それは『ドミノ第三中学』。

今俺は中学生なのです。

（しっかし、あれだな？）

（なんだよ、アーチャー？）

教室にむかう途中のアーチャーの声に念話で返す。

毎回思うが、廊下を歩きたびに、こつちを見て顔を赤らめるやつがいるんだが、なんでだろうか？・・・

俺の顔って変なのかな・・・精霊の皆に相談したら溜息つかれたが・・・（主人公は自分の顔がいわゆるイケメンだということに気づいてない）

（いくら平穩に過ごすためっていつても、友達作らないってのはやりすぎじゃねえか？）

（いいんだよ、どうせ話もあわねんだから）

そう、入学して一か月たつが、俺はこの学校で友達はできてない。

俺も最初は友達の一人や二人は作るうかと思つたが、クラスのおいつがいたからやめた。

そう『IS』原作主人公

「よう！おはよう更識！」

織斑一夏である。

さわやかに挨拶しやがつて！なんで俺のクラスにいんだよ！あれか！？タバネの罖か！？

（濡れ衣だよ）（泣）（泣）

なんかタバネの弁解の音が聞こえた気がしたが、無視しよう。

とりあえず、

「ああ・・・」

と、返事を返す。

キャラが違うって？いや、

俺は元々無口でこんな感じの喋りなんだよ。口が上手く動かないんだ、しょうがないだろ！

で、一か月たつたいま、もともとツリ目だし、授業がつまらなく、寝てばかりいたので、不良みたいな立ち位置になっていた。

前世ではこれでも大学生だったので、中学の授業くらい楽勝なんだ。だから教師に指されても楽々と答えるため、教師も強くいえず、なんか余計たちが悪いやつみたいになっていた。

まあ、ときどき話しかけてくるやつはいるから怖がられてはなしと思うが・・・それでも積極的に話しかけてくるやつはいない。それでも

「おいおい、朝から元気ねえな！ちゃんと飯食ってるか？」

こいつはなにかと話しかけてくる。

なんでお前は俺に話しかけてくんだよ！？お前に関わり合いになりたくないからこっちはこのキャラで通してんのに！（違います、主人公は親しいやつ以外は元々こんな感じですよ）

「るせえ、俺にかまうな」

そうして俺は自分の席につく。さて、教師がくるまで『はが〇い』でも読むか！

サイド：織斑一夏（以後『一夏』）

やれやれ、あいかわらずだな更識は・・・

ん？おお！俺の名前は織斑一夏。一夏って呼んでくれ。

特技は家事、好きなものはデュエルモンスターズ、将来の夢は千冬ねえみみたいなプロデュエリストになることだ！

千冬ねえはすごい決闘者で、いまじゃ伝（長いので省略します）でだな、おっと話しが長くなりすぎたな。

俺は今あるやつと友達になろうと画策している。それは、

「相変わらずのクールっぷりだな、更識のやつは。一夏もあきらめたほうがいんじゃないか？」

と聞き覚えのある声が聞こえる。そいつは、

「いや、それでもあいつと友達になりたいんだよ弾。」

そう、五反田弾。

ドミノ町の隠れた名店『五反田食堂』の二代目であり、頭のバンダナがトレードマークの、俺の幼馴染の一人だ。

「しかしよお、俺あいつが仲良くしてるやつなんてみたことないぜ」
「？」

そう、遊里はだれか特別仲のいいクラスメイトはいない。

どうやら好んで独りでいるみたいだ。

余談だが、授業中は寝ているのに、なぜか指されるとスパッと質問に答えることから、頭はいいみたいだ・・・ちよっとは、その頭わけてくれないかな・・・

女子には『クールで頭がいい』と、隠れた人気があると弾に聞いたことがある。

「だいたい、あいつって笑ったことあんのか？」

弾がそんなこといつてきた。

一見失礼な疑問だが、でもそれもしようがない。弾に限らず、俺もあいつがクラスで笑ったところはみたことがない。そうクラスでは・・・。

「俺はみたことあるぜ？」

「マジかよ！」

弾が驚いている。それほどあいつが笑ってるところが想像できないんだろう。それに苦笑しつつ答える。

「前にカードショップで決闘してたんだよ。あいつ」

「決闘？あいつもデュエルモンスターズをやるのか？」

弾が目に興味の色を浮かべた。

「こいつも一応決闘者のはしくれだからな。更識がどんな決闘をするのか、興味があるんだろう。」

「そのときは店が混んでて遠くからしか見れなかったんだけどな？とても楽しそうに決闘するんだ、あいつ。あんな楽しそうに決闘するやつに悪いやつはいねえよ。」

あのかきは驚いた。

なにせ、クラスでは一匹狼でおってるあいつが、あんな楽しそうな顔をして決闘してたんだから。

俺も「冷たいやつだなあ」って印象だったし。

決闘が終わったあと、あいつはさっさと帰っちゃったが、あの決闘は俺の心の中に深く残った。

「だから俺はあいつと友達になりたい。あいつと決闘したいんだ。」

そういつと弾がやれやれという身振りで、諦めたような顔を俺に向けた。・・・なんかム力つく顔だな。

「まあ、お前がそういうならそれでいいよ、あいつと友達になれたら、俺にも紹介してくれよ?」

「・・・おう!!」

俺はこれくらいじゃめげないぜ! 待ってるよ更識!

「織斑くん!」

あらためて気合いを入れ直したとき、クラスメイトが俺を呼ぶ声が聞こえる。

たしか、月村さんだったかな?

「どうしたんだ?」

「炎上さんが、放課後体育館の裏にきてたってよ?」

「炎上さんが?」

炎上さんってたしかこの間、俺に「つきあって」「っていつてきた子だよな?」

どこに?っていったらなんか泣きそうな顔して、わけがわからないうちに走って行ってしまったんだが・・・

「ああ、ありがとう。放課後いくよ。」

「どづいたしまして。・・・ねね、織斑君って、炎上さんと仲いいの?」

どうやらなにか勘ぐられてるらしい。彼女も年ごろの乙女といったところか。

「いや、知り合いつてほどじゃないよ。一、二回言葉を交わしたことがあるだけだし。」

そう苦笑しながらいう。彼女はそれで興味を失ったのか、自分の席に戻って行った。さて、

「そろそろ、俺らも、・・・どした、弾？」

ジト目で弾がこちらを睨んでたので、聞くと、

「お前、いつか刺されるぞ？」

とタメ息をつきながら、弾は自分の席に戻って行った。なんなん
だよ、たく・・・

「おっと、俺も席戻らねえと・・・」

そうして、俺も席に向かった・・・

サイド：遊里

さて、図書委員の仕事も終わったし、俺もそろそろ帰るかな。

ああ、いい忘れてたが、俺は本が好きで、結構いろんなジャンル
を読んでる。それで男子に人気のない図書委員をやっているというわ
け。

自分の見たい本を取り寄せられたり、優先的に借りられるから、
結構役得もあるんだよ。

ペアの女子の図書委員の子には最初怖がられてたけど、本を運ん

でたときに、倒れそうになったところを助けたら、仲良くなった。なんか顔が赤かったが、いまでは貴重な読書仲間だ。・・・

しかし、あの子どっかでみたことあんだよな？確か名前は宮崎のど

「なんだお前ら！」

おっと、なんの騒ぎだこいつは。

どうやら体育館の裏からこの声は聞こえたらしい。

つか、この声はどっかで聞いたことがあるな。

そう思い、体育館の裏を覗いてみると、案の定、我らがフラグ王、織斑一夏がいた。・・・男に囲まれて・・・え・・・君、ひよつとして、そっち？（違います）

サイド：一夏

・・・なんか、今、とんでもない勘違いをされた気が、

「聞いてんのかアアン!？」

っと！今は目の前のこいつをなんとかしないと。

こいつの名前は炎上ムクロ。炎上さんの兄貴らしいのだが、炎上さんと、こいつの仲間っぱい人たちと一緒に、俺を待ちかまえていた。

そしてなぜか知らないが、俺が絡まれることになった。とりあえず、

「炎上さん、これはいったいどういうことだ？なんであんたの兄さんに俺は絡まれてるだよ？」

そう、まったく事情がわからないので対処がしようがない。すると炎上さんは、優越感に歪んだ顔でこちらを見る。

「織斑君が悪いのよ？私のは真剣に告白してたのに、あんなふざけたこというから！」

なぜかしらないが、どうやら彼女は怒っているらしい。

やれやれ、カルシウムが足りないな。しかし告白ねえ。そんなものされた覚えが・・・あ

「な、なあ。そんなとき、俺なんていった。」

すると、彼女は頭に青筋を浮かべた。やべっ！あれは本気で怒ってる。

「なんていったかですってえ！いいわ教えてあげる！あなたは私の告白にたいして「どこに？」っていったのよ、どこにですってえええ！乙女心をなんだと思ってるのよ！」

「い、いや、あれは買物かなんかの誘いだと・・・」

俺が弁明するが、それは火に油をそそぐ結果になっただけらしい。

彼女は髪を逆立てて、

「余計悪いわよ！？もういい！おにいちゃんやっちゃって！」

「おう！」

彼女は俺をぼこることに決めたらしい。

というか、あんたもこんな簡単に妹のこと聞いてんじゃねえよ！

「悪いな坊主。怨むなら俺の妹を泣かしたお前をうらみな！」

絶対泣いてないだろ、あんたの妹！

「チツ！」

俺は舌打ちしながら、ムクロの部下の拳を避け、足を裁く。

これでも未熟なりとも篠ノ之流古武術の門下生。これくらいで負

「けねえよ！」

「おうおう、がんばるねえ。．．．どこまで持つかな。」

ムクロの言葉通り、こいつらの攻撃が裁ききれなくなってきた。

チッ！いくらなんでも数が多すぎる！

そして俺はこいつらのサンドバックになる．．．

サイド：遊里

おうおう、酷いねこいつは。助けないのか？

やだよ、身内ならともかく、あいつはちょっと知り合いの他人だぜ！？

なんで痛い思いして、助けなきゃいけないんだよ！

「それに．．．」

どうやら、発端はあの朴念仁の勘違いらしい。

これはあいつらのやりすぎだが、あいつには少しはいい薬になるだろう。

鈍感も治るかもしれないな。．．．でも本当にやばくなったら助

いいだろ、デッキくらい持ってたって。いや、そうじゃなくて！

「やめろ！俺のデッキにさわ、ツグア！？」

どうやら腹を蹴られたらしい。野郎……！！

「へへ、なかなかいいデッキじゃねえか！」

「やめろ、それは俺の大切なものなんだ！返してくれ！」

するとムクロはなにかを思いついたように、嫌な笑みを浮かべると、俺のデッキを部下の一人に渡した。

嫌な予感がする……

「おい！そいつを目の前で燃やしてやれ！！」

……なに！？

「いいんですかい、なかなかいいカードもあると思いますが。」

「いいんだよ、これでこいつもこたえるだろ！」

「そこまでだ。」

俺のデッキを燃やそうとしたやつが吹き飛んだ。

いや吹き飛ばされた（……………）というべきか……俺はそのとき「人ってあんなに空を飛ぶんだな」と、場違いな感想をいだいた。

「そうだ！俺のデッキ！」

あいつが持ってたはず！？

「これだろ？」

吹き飛ばされたやつが持ってた俺のデッキは、いつの間にかそいつ（……………）が手に持ってた。お前は……………！？

「ほら。デッキは決闘者の魂だ。もうあんなやつらに奪われんじやねえぞ？」

「あ、ああ・・・なんで、お前が・・・」

そう、俺を助けてくれたのは、予想外なやつだった。

「いや、図書委員の仕事帰りで偶然近くを通ってな？」

頬を掻きながら説明するそいつはいつも、他人に無関心な顔して

「ただの喧嘩だったら、素通りしてたんだが。」

そついいながら、ムクロを睨むそいつはいつもクールで無口。

「さすがに決闘者のデッキ魂を燃やすやつは見逃せねえな。」

しかしそいつは、本当に楽しそうにデュエルモンスターズを楽しむ決闘者。

「何者だ、てめええ！」

ムクロは彼の正体が気になってしかたないようだ。

炎上さんはムクロの隣で驚いた顔をしている。

それもそうだろう。彼をすこし知るものなら、彼がこんな場面ででてくるとは思わないだろうから・・・

「俺か？俺は・・・」

そう、そいつは俺が今友達になりたいと思ってる人物で、底からデュエルモンスターズが好きな決闘者

「更識遊里、通りすがりの決闘者さ」

『更識遊里』だった。

更識はムクロを指さしていった。

「あんだ、デュエルギャング、『フレイム・スカル』の炎上ムクロだな？」

デュエルギャングだって!?

盗品のレアカードや、違法のコピーカードを売買する犯罪者集団!
!こいつら、そんなやばいやつだったのか!!

「へえ?俺のことを知ってんのか?」

ムクロはおもしろそうなものを見る目で更識をみている。

そうだよ!なんであいつ、こいつがデュエルギャングって知ってて、平然としてんだよ!

「それで?そこまで知ってて、俺になんのようだ?」

すると遊里は顔に笑みをつかべる。まるで獲物を狙う獣のようなそんな笑みを。

そして遊里はムクロにいう。決定的な一言。

おい、決闘しろよ

原作前3話　そして主人公は林念仁と出会って・・・　9/6修正しました(後

どうだったでしょうか？オリ主、『IS』主人公との邂逅です。ちよっと一夏のキャラが違う感じがしますが、気にしないでください。

この話にでてくる『炎上ムクロ』は5Dsの『炎城ムクロ』とほぼ同じと思ってかまいません。デッキはもちろんあのデッキです。妹空気・・・

今回はとうとう初めての決闘回。うまくできるか心配ですが、がんばります!!

ちなみに図書委員の女の子は、某薬味先生がでてくる漫画にでてくるあの女の子がそのままモデルです。(わかる人はわかります)これから、出てくる予定はありませんが、皆さんの要望をいただすかもしれません。

以上ラドゥでした!!

原作前4話　そして主人公はギャングと決闘で・・・　9 / 13 修正しました

すいません。すこし更新遅れました。

今回は初デュエル回！ですがすいません。ご都合主義で終わります。

前回のあらすじ

『キング・オブ・朴念仁』織斑一夏がふった相手の兄がデュエルギヤング『炎上ムクロ』で、一夏はそのままリンチにあう。それを傍観する主人公だが、一夏のデッキを燃やそうとした炎上ムクロに怒りを覚え、そのままデュエルを申し込む。

サイド：一夏

『デュエルしろよ』

更識は突然この場に現れたかと思うと、デュエルギャング『スカ
ルフレイム』リーダー『炎上ムクロ』にデュエルを挑んだ。

更識の声でやつらがざわめきだした。

それもそうだろう。突然現れた人間が、自分たちのボスにデュエ
ルを申し込んだんだから。

って！なに考えてんだあいつ！？この状況でデュエルなんて！う
けるわけないだろう！？そんなことを考えていると、

「クツ！クツクツクツ、クハー、ハハハハハハ！！！！」

ムクロが突然笑い出す。なんだいったい！？やつの部下も困惑し
ている。

するとムクロは突然笑いをやめ、更識を睨みつける。

その顔は、俺のデッキを燃やそうとしたときのように相手を嘲笑
うよう顔じゃなく、かといって怒りに感情が支配されている顔でも
ない。

それは昔、千冬ねえが挑戦者を前にした顔に似ていた。自分の誇りを守る者の顔に。

「デュエルギャングにデュエルを挑む。それがどういう意味か・・・」

「理解してるさ。デュエルギャングのヘッドは、チームで一番強い者のことを指す。つまり、デュエルを挑まれたら断ることができないことも。俺が勝ったらこの場はひいてもらう。」

なるほど！これならあいつは部下の手前、デュエルを断ることはできないし、その勝敗から生じる約束も反故にすることができない！しかし・・・

「なら俺が勝ったら、お前のデッキをもらっぜえ？かまわないよな？それを承知でデュエルを申し込んだんだろ？」

そう、条件をつけられるのは、相手も同じだ。しかも相手が負けたらこの場を去ればいいだけだし、こちらが負ければ、更識のデッキが奪われてしまう。しかし

「かまわない。」

更識はひかない。その目はいつものけだるげな雰囲気ではなく、静かな闘志を秘めていた。

すると、

「ちょっとまちなさい!」

炎上さんが彼らの話に割り込んできた。どうでもいいが、勇氣あるなあの子……ていうかいたのか……

「お兄ちゃん、なにやってるの!? そんなやつのことなんか「愛里!」!」

炎上さんがムクロになにか文句をいおうとしたが、ムクロの怒鳴り声に黙り込む。ていうか愛里あいりって名前なんだ炎上さん。

「これはこいつと俺の決闘だ!! 邪魔するならお前でも許さねえぞ!」

「ひっ!」?

「へえ……」

炎上さんは激怒したムクロの迫力に悲鳴をあげた。さすがデュエルギャングのヘッドだけのことはある。すごい迫力だ。

しかし以外だ。こいつは妹に甘い印象だったのに。更識も同意見だったのか、感心したような声をだす。

「すまねえな、うちの妹が・・・」

「かまわない、それよりデュエルを始めよう」

「ふん、そうだな。」

ついにデュエルの始まりか。って!?

「ちょ、ちょっとまって更識!?!本当にするのか!?!」

俺は更識に真顔で

「なんだ織斑、まだいたのか?」

といわれた。

「いたわ!?!」

なんでいないことになってんだよ!?!なに、俺存在感ないのか!?!
?つて、じゃなくて!?!

「相手はデュエルギャングだぞ!?!負けたらなにされ「織斑」なんだよ!?!」

「問題ない」

問題ないって、根拠もねえのに。

「問題はない。俺はあいつには負けない。」

俺は息を飲む。その姿に俺の自慢の姉にして、伝説の決闘者『織斑 千冬』の姿が重なった。

ふっ！なら俺も信じるしかねえじゃねえか！頼んだぜ更識！！

サイド：遊里

・・・やべー！！！！！？なにやってんだ俺！？

なんでデュエルギャングにデュエルなんて挑んでんだ！？（主人公は更識の情報網で、このあたりの要注意人物をピックアップしており、その中に炎上ムクロのことも書いてあった）

なんか一夏にも大見栄切っちゃまったし・・・いや、あいつのことは別にいいんだが（おいby作者）

いくら頭にきてたからって、なんでこんなことになったんだ・・・

・
・

(自業自得じゃねえのか?)

(そのいいかたはないんでねえの、アチャさん)

(誰がアチャさんだ、誰が!?)

今俺と念話して《話して》んのは、『インフェルニティ・アーチャー』の精霊のアーチャー。俺の精霊《仲間》の一人だ。

(まあ、あそこでデュエルを挑むのが大将だから仕方ないか)

(それは俺をバカにしてるのかい?アチャくん)

(まあ、マスターはデュエルバカだからしかたないか)

(完全にバカにしてるよな!?)

失礼な。俺はそこまでデュエルバカじゃない。せいぜい、毎日デッキ調整して、その眠気で授業中に毎回寝てるだけだ!!!...あれ、なんかおかしい?

(まあ、それより今回は俺の入ってるデッキでいくんだよな?)

(ああ。お前にも頑張ってもらおうかな?)

俺がそういうと、アーチャーがデッキに戻っていく。そう、今回俺がつかうのは【インフェルニティ】デッキ。シンクロを使わない型に俺なりに改造したやつだ。

シンクロはないのかって？いや、使ってもいいんだが、そのせいで、海馬やらペガサスやらできたら説明がめんどくさいだろう？だからシンクロは本当に重要な場面じゃなきゃ使わないようにしている。

俺はデッキを決闘盤デュエルディスクにセットし、デッキがシャッフルされ終わるの待つと、（更識家の人間の決闘盤には、基本的に主人公の手によって、『自動シャッフル機能』がついている）ムクロのほうに向き直る。

目の端にはこの騒動の発端となったムクロの妹と、心配そうにこちらをみる織斑一夏の姿が見える。・・・おい、その朴念仁《一夏》。お前はいつからヒロインになったんだ？

「デッキとの別れの挨拶はできたかよ？」

ムクロがいう。どうやらもう勝ったつもりでいるようだ。やれやれ・・・

「必要ないよ。いくら他人の物とはいえ、決闘者の魂を焼こうなどというなどという、決闘者として認められないような行為を恥とも思わず、平気で行うような輩に、俺が負けるわけないからね？」

そう、こいつは決闘者の魂たるデッキを燃やそうとしたんだ。それだけは許す訳にはいかない。こいつにだけは負けるわけには行かないんだ！

「ふん！始めるぞ！！」

「ああ」

『『デュエル
決闘！！』』

・・・よし！先行は俺！！（この小説では、先攻後攻は決闘盤の
抽選で決める）

「俺のターン！ドロー！！」

遊里

ライフ：4000

手札：6枚

場：0枚

魔法、罠0枚

引いたカードは・・・

「俺はインフェルニティ・ガーディアンを守備表示で召喚！」

《インフェルニティ・ガーディアン》

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1200 / 守1700

自分の手札が0枚の場合、フィールド上に表側表示で存在するこのカードは戦闘及びカードの効果では破壊されない。

「さらにカードを2枚伏せてターンエンド」

遊里

ライフ：4000

手札2枚

「俺のターン！！」

ムクロはカードを引くと、唇を歪める。！！キーカードを引いたか！？

「俺はミイラの呼び声を発動！」

《ミイラの呼び声》

†

永続魔法

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

手札からアンデット族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。
この効果は1ターンに1度しか使用できない

「このカードがある限り、俺は自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札からアンデット族モンスターを特殊召喚することができる。おれはスカルフレイムを特殊召喚!!」

《スカル・フレイム》

効果モンスター

星8 / 炎属性 / アンデット族 / 攻2600 / 守2000

1ターンに1度、手札から「バーニング・スカルヘッド」1体を特殊召喚する事ができる。

この効果を発動するターン、自分はバトルフェイズを行う事ができない。

また、自分のドローフェイズ時に通常のドローを行う代わりに、自分の墓地に存在する「バーニング・スカルヘッド」1体を手札に加える事ができる。

ミイラの呼び声によって特殊召喚されたのは、炎をその身に纏った幽鬼。まずい!

「俺はリバーカードオープン! フルバースト 全弾発射。このカードは手札を全て墓地に送ることにより、送ったカードの枚数×200ポイントのダメージを相手に与える!」

フルバースト
《全弾発射》

十

通常罨

このカードの発動後、手札を全て墓地へ送る。
墓地に送ったカードの枚数×200ポイントダメージを相手ライフに与える

遊里

手札：0枚

ムクロ

ライフ：3600

手札4枚

「ぬるいなあ！！このカードは1ターンに1度、手札から、バーニング・スカルヘッドを特殊召喚することができる。」

《バーニング・スカルヘッド》

効果モンスター

星3 / 炎属性 / アンデット族 / 攻1000 / 守 800

このカードが手札から特殊召喚に成功した時、

相手ライフに1000ポイントダメージを与える。

また、自分フィールド上に表側表示で存在する

このカードをゲームから除外する事で、

ゲームから除外されている「スカル・フレイム」1体を墓地に戻す。

「このカードは特殊召喚に成功したとき、相手に1000ポイント

のダメージを与えるっ!」

「くっ!?!」

遊里

ライフ：3000

ムクロ

手札：3枚

「俺はこのターン通常召喚をしていない。スカルフレイムとバーニングスカルヘッドを生贄に、スカルフレイムを召喚するっ!」

2枚目だと!?

遊里

ライフ：3000

ムクロ

手札：2枚

「まだまだいくぜい!!墓地のスカルフレイムをゲームから除外し、これが俺の切り札だ!!スピードキング スカルフレイムを特殊召喚!!」

《スピード・キング スカル・フレイム》
効果モンスター
十

星10 / 風属性 / アンデット族 / 攻2600 / 守2000

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に存在する「スカル・フレイム」1体を

ゲームから除外した場合に特殊召喚する事ができる。

1ターンの1度、自分の墓地に存在する「バーニング・スカルヘッド」の数

×400ポイントダメージを相手ライフに与える事ができる。

また、このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、

自分の墓地に存在する「スカル・フレイム」1体を特殊召喚する事ができる。

フィールド
場に4つ脚の魔人が顕現する。紅蓮につつまれたその姿は、伝説のケンタウロスを彷彿とされる。

ムクロ

手札：1枚

「スピードキングのモンスター効果を発動！1ターンの1度、墓地のバーニング・スカルヘッドの数×400ポイントのダメージを与える！墓地のスカルヘッドは1枚。よって、400ポイントのダメージ！――！」

「うおおお！？」

遊里：ライフ2600

スピードキングの手から炎の弾丸が飛び出す。しかしちよー怖い

んですけど！？やりすぎだろう瀬人え・・・

「俺はさらにカードを1枚伏せ、スカルフレイムの攻撃！紅蓮腕ぐれんかいな！
！」

CCO！？ここでまさかのCCOリスペクトですか！？

紅の炎に染まった腕がインフェルニティガーディアンに迫る。だが！

「インフェルニティガーディアンは手札が0枚のとき、戦闘、カード効果による破壊ができない！！」

「なに！？」

そう、この鉄壁の効果こそ、守護者ガーディアンの名の由縁。ステータスで自信を上回るはずの炎の腕を、神秘の力が弾き返す。

「チッ！俺はターン終了だ！（俺の伏せカードはミラーフォース。死角はねえ）」

聖なるバリア・ミラーフォース… 十

通常闘

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

ムクロ

ライフ：3600

手札：0枚

場：スピードキング スカルフレイム1枚、スカルフレイム1枚、
バーニングスカルヘッド1枚

魔法、罫：1枚

遊里

ライフ2600

手札0枚

場：インフェルニティ・ガーディアン1枚
魔法、罫：1枚

手札は0枚。なかなかピンチだな。でも、

「ふふふ」

「?なに笑ってやがる。」

おっと、どつちらしいのまにかにやけてたらしい。

「いやな、つまらない相手かと思ったら、あんた強いじゃん？」

「!?!ケツ! さっさとカードをドロしやがれ! てめえのターンだ
! ! それとも諦めてサレンダーするか？」

「まさか。いくぞ! ! 俺のターン! ! !」

サイド：愛里

なによ、なんなのよあいつ! ?

私は織斑君が許せなかった。せつかく、せいっぱいの勇気をだして告白したのに「どこに？」なんてふざけた答えを返されて（それが彼の勘違いということがまた許せない）。

だから私はお兄ちゃんに頼んだ。「あの朴念仁を懲らしめて」「つて。

私もやりすぎかな？って思ったけど、これでこの朴念仁も少しは直るかなと思ったんだ。そのとき、お兄ちゃんの部下の人が織斑君のデッキを燃やそうとライターの火を近づけたとき、その人が吹き飛んだ。そこにあいつが現れた。『更識遊里』が・・・

私は驚いた。あいつはいうならば『一匹狼』。他人と一緒にいることがなく、その目つきの悪さもあって、不良みたいに扱われている。でも頭が悪いわけではなく、授業中いつも寝ているのに、先生に指されれば、完璧に質問に答える。そのせいで先生も、面と向かって注意ができないのが現状らしい。

（『クールで頭もいい』とファンクラブがあるらしい）

まさかその更識遊里が、他人である織斑君を助けるとは思わなかったからだ。

そのままあいつはお兄ちゃんと、自分のデッキを賭け金にして、デュエルを始めて今の状況になるんだけど・・・

「なんであいつは笑ってるのよ・・・」

そう、あいつはここまで劣勢におちいつてるのに、なにが楽しいのか笑っているのだ。

「あいつは楽しんでんだよ。」

私の疑問に答えたのは、一緒に観戦していた織斑君だった。どうでもいいけど、自分をこんなにした女に気易く話しかけるなんてど

ういう神経してるの、こいつ。

「楽しんでる？負けたらどうなるかわかってるの！？」

そう、このデュエルに負けたらお兄ちゃんは確実にあいつのデッキを奪う。家族にはやさしいお兄ちゃんだが、自分の敵にはとことん容赦しない。

「それでもさ、決闘者ってのは強い相手が相手だと、わくわくするんだ。それで自然に顔がにやけちまう。ほら、炎上さんの兄さんも笑ってるぜ？」

織斑君にいわれたとおり、お兄ちゃんの顔を見ると、その顔は、劣勢の相手を見下す笑みではなく、心の底から楽しんでいる笑みだった。

「な？」

私は彼らが輝いて見えた・・・

サイド：遊里

「俺のターン！ドロー！！」

遊里

手札：1枚

「俺は強欲な壺を発動！！」

「このタイミングで強欲だと！？」

《強欲な壺》

十

通常魔法

自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「この世界じゃ、まだ禁止じゃないからな。入れといてよかったぜ。」

（そろそろ、俺の出番か、大将？）

（ああ、頼むぜ『アーチャー』！！）

「効果で2枚ドロ―！手札からサイクロンを発動！！その伏せカードを破壊する！！」

「！？ちい！？」

《サイクロン》 十

速攻魔法

フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

魔法カードによって生み出された暴風が、ムクロの伏せカードを破壊する。伏せカードは『聖なるバリアミラーフォース』。テンプレですね、わかります。

「さらに俺はインフェルニティ・アーチャーを、インフェルニティ・ガーディアンを生贄に捧げ、召喚する！！頼んだぜ！アーチャー！！」

（おつよ！！）

守護者を生贄に、フィールド場に、黒き弓兵が現れる。

インフェルニティ・アーチャー

星6 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2000 / 守1000

アーチャーの登場。しかしそれを、ムクロは鼻で笑う。

「なにかと思えばたった攻撃力2000のモンスターになにができる!!!」

「ただのモンスターならな？」

「なに・・・？」

そう、こいつには強力な効果がある！

「こいつは、手札が0枚のときに、ダイレクトアタック直接攻撃が可能になる!!!」

「!?だがそれでも俺のライフは1600残る。返しのターンで俺のモンスターの総攻撃で終わりだ!!!」

「それはどうかな？」

「なに!?!」

遊戯王ファンなら一度はいつてみたいよな、この台詞。

「俺が最初から伏せていたこのカード。なんだと思う?」

俺はそういつて、自分の伏せカードを指差す。このカードは強力だが、デュエル序盤では使えないため、ブラフになるかと思いつてたんだが、まさか、こんな場面で役に立つとは。

「リバースマジック発動! 巨大化!!」

「なんだ・・・と!?!」

《巨大化》

十

装備魔法

自分のライフポイントが相手より下の場合、

装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。

自分のライフポイントが相手より上の場合、

装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる。

「俺は巨大化をアーチャーに装備。これにより、アーチャーの攻撃力は!!」

攻2000 攻4000

アーチャーの体がどんどん大きくなっていく・・・

「攻撃力4000だと!？」

「すげえ・・・」

「すごい・・・」

一夏と炎上妹（名前忘れた）の音が聞こえたが、気にしない。

「いくぞムクロー!!これでファイナルだ!インフェルニティアーチャーの直接攻撃。『煉獄強弓』《インフェルニティ・アロー》!!」

(狙い撃つぜー!!)

ちょー!?!?どこのガン〇ムマイスター!?!?

アーチャーが限界まで絞った弓が放った矢がムクロの胸を貫く。

「ぐおおおおおおお!!!!」

ムクロ

ライフ：36000

そうして、俺は炎上ムクロに勝利した・・・

俺はアーチャーの矢に吹き飛ばされたムクロに近づいた。

「なんだよ・・・。」

なんだか不貞腐れたような顔をしていた。デュエルで負けたからだろうか？

「満足いくデュエルだったぜ。ムクロ」

やっぱり、インフェルニティデッキを使ったら、これをいわなきやな!!」

するとムクロが呆けたような表情になる。どうしたんだろうか。・
・ハッ！やはり俺には似合わなかったんだらうか？

俺が一人で苦悩していると

「くあはははははははははは!!!!」

ムクロが笑い出す。どうでもいいけど、突然笑い出すのやめてく
んないかな？びっくりすんだけど・・・

「くつくつくつ。ああ、俺も満足だ・・・」

俺が驚いていると、ムクロが俺に手を差し出す。

「悪いが・・・起こしてくれねえか？」

そのときのムクロの顔は、始めの人を見下した笑みとは違い、憑
き物が落ちたような、そんな笑顔だった。

なにをいうか。今回の件は、元々お前の鈍感さが原因じゃねえか。それをいうと一夏は言葉に詰まる。・・・まあ、今回の件は反省しているようだからもついいか・・・

俺の胸元には、炎と骸骨で模られている「スカルフレイム」リーダーの証のバッチ。そう、俺はムクロを倒したことで、彼らにリーダーになってくれと懇願されたのだ。（ムクロと愛里もその中に入っていた）

最初は俺も断ろうと思ったのだが、あまりの熱意に押されて、『名誉リーダー』の称号を送られた。（これは外部顧問と同じ意味。俺には更識の仕事もあるので、これが精一杯だった）

・・・しょうがねえだろう!? 強面のやつらが、ヒーローを見るような目で、こっちをキラキラしながらみてるし、愛里なんか頬を赤くしながら上目遣いでこっちをみてるしで、これで断ったら俺KYじゃん!?すると、こちらを見てた一夏が、

「お前・・・いいやつだな・・・」

なんていつてきた。はあっ!?!なにいつてんだこいつ

「な、なにいつてやがる!?!」

「だってよ?俺がぼこられてるときに助けに来てくれたじゃねえか?」

「そ、それはただ、デッキを燃やそうとするあいっらが気に食わなくて……／＼／＼」

「なおさらさ。カードを大切にするやつに悪いやつはいないからな！」

なんてほざいてきやがった！俺が反論しようとする……

「一夏！！」

なにか聞きなれた声がしてきた。具体的には鍛錬の時間……聞いたような……

「千冬ねえ！？」

そう千冬さん……千冬さん！？

「なんでこんなところ……」

「なんでってお前が遅かったから心配して！一夏、その怪我はどうした！？」

一夏が千冬さんに説明をしている。俺はそのうちに逃げようとするが……

「それで、その更識に、って、どこいくんだ更識？」

ちい！？朴念仁め、余計な真似を！！

「更識？」

千冬さんはこちらを見ると、驚いた顔になる。どうやら本気で気づいてなかったみたいだ。どんだけ一夏心配してんだ……

「ああ、紹介するよ。こっちはクラスメイトの更識遊里。更識、こっちは「昨日ぶりだな遊里」……へ？」

「そ、そうですね千冬さん……」

俺は諦めて千冬さんと対面する。うわ……怒ってるなこれ……

一夏は間抜けな声をだしてるが、それも当然だろう。ただのクラスメイトが自分の姉と親しげに話してるのだから……

「まさか一夏のクラスメイトとはな、知らなかったぞ。……どうして話さなかった？」

「いやあ、まさか千冬さんの弟だとは思わなくて。」

「名前は教えた（……………）はずだがなあ。」

「いやあただの偶然かと思って。」

「そうなのかあ。」

「そうなんですよお。」

「アッハッハッハッハ」

千冬さんがいつになく、にこやかだ。しかし、まわりの空気は千冬さんの覇気のせい、まるで帯電しているようにぴりぴりしている。そのせいか、関係ないはずの一夏まで、冷や汗にまみれていた。

「じゃあ、俺はこの入んで。」

俺は早くこの場から立ち去ろうとするが、

「まあ、待て」

千冬さんに襟首を掴まれた。く、苦しい!?

「せっかく来たんだ、お茶でも飲んでいけ。いろいろ聞きたいこと
(.....)もあるしなあ?」

「いや、俺も用事が飲んでいくな?」.....はい.....」

.....俺は.....無力だ.....

その日、織斑家から、男の悲鳴が聞こえたらしい.....余談だが、
この日から俺は同じ千冬さんの折檻を受けた中ということで、名前
で呼び合うようになった.....

次の月曜日.....

「あんだ、私とデュエルよ!!」

俺は酢豚娘にデュエルを挑まれた。.....どうしてこうなった.....

原作前4話　そして主人公はギャングと決闘で・・・　9 / 13 修正しました

はい、デュエル回でした。こんな感じで大丈夫ですかね？だれかリンクロ使わないインフェルニティのデツキレシピ教えてくれないかなあ。アーチャー入りの。

次回は酢豚娘とのデュエル。・・・がんばろう・・・
ヒロインのデツキ設定がなやむぜ・・・

以上！ラドウでした！！

原作前5話 黒龍で酢豚娘と決闘で・・・10/12修正しました。(前書き)

前回のあらすじ

デュエルギャングヘッドの炎上ムクロを倒した主人公。酢豚娘にデュエルを申し込まれる。

aaa・a・a・aaaさん。感想とご指摘ありがとうございます。

一応修正しました。これからも楽しんでくれると幸いです。

原作前5話 黒龍で酢豚娘と決闘で・・・10/12修正しました。

サイド：遊里

やあ皆さん。前回『スカルフレイム』というデュエルチーム（デュエルギャングから足を洗ったため）の名誉リーダー（ヘッドだったけ？）になっちゃた、更識遊里だ。

今、俺の目の前には戦意に溢れた目でこちらを見ている酢豚娘と『鳳鈴音』^{ふうねいん}がいる。どうしてこうなったかというと、

- 1 学校に行き、一夏と挨拶。（まわり騒然）
- 2 五反田弾がきて、友達になったことを一夏が話す。（弾驚愕）
- 3 弾に事情を話す。（弾称賛）
- 4 弾とも友達になる。
- 5 鳳を紹介されて、友達になる。
- 6 一夏に対ムクロ戦の話しをされ、興味をもたれる。
- 7 デュエルを申し込まれる。

と、いう感じの流れで、デュエルをすることになったんだ。

説明が簡単すぎる？作者がめんどくさいっていうんだ。しょうがないだろ？

「ちょっと！まだ準備はできないのー！！」

おっと、酢豚姫がご立腹のようだ。

「ああすまん。今できたところだ。」

「そう、じゃあはじめるはよ？」

「ああ。」

「では」

「「決闘！！」」

まあ、今はこのデュエルを楽しもう・・・

サイド：鳳 鈴音（以後『鈴』）

私の目の前にいるのは、この学校で知らない人はいない、一匹狼（本人は有名になっていることを知らなかったみたいだけど）『更識遊里』。

運動をさせたら右にでるものではなく、授業中は寝てばかりのはずなのに先生にあてられても完璧に答える。だけど、群れることを嫌うのか、いつも一人ですごしており、誰かと親しげに話しているのはみたことがない。

それが、まさか一夏の友達として紹介されるとは思わなかったわね。ま、まあ一夏を助けてくれたのは感謝してあげてもいいけどノノノノ？

ただ、こいつが決闘者だというのは驚いた。しかも一夏に聞いたらかなりの強者のようだしね。……。おもしろいじゃない。私も決闘者。強い相手がいたら、挑まなきゃ嘘よね！！

さあ、楽しいデュエルにするわよ、遊里！！

サイド：遊里

先攻は鈴（こう呼べといわれた）

「私のターン。ドロー！」

鈴^{りん}

ライフ：4000

手札：6枚

「私は、マシンナーズ・ギアフレームを召喚する！」

《マシンナーズ・ギアフレーム》

十

ユニオンモンスター

星4 / 地属性 / 機械族 / 攻1800 / 守 0

このカードが召喚に成功した時、

自分のデッキから「マシンナーズ・ギアフレーム」以外の

「マシンナーズ」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の機械族モンスターに装備、

または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

（1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。

装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。

）

鈴

手札：5枚

場：マシナーズ・ギアフレーム

攻撃力1800

・・・【マシナーズ】か！？まずいな・・・

あのカードは、マシナーズをサーチするカード。ならもってくるのは・・・

「私はデッキから、マシナーズ・フォートレスを手札に加える。」

┌

《マシナーズ・フォートレス》

十

効果モンスター

星7/地属性/機械族/攻2500/守1600

このカードは手札の機械族モンスターを

レベルの合計が8以上になるように捨てて、

手札または墓地から特殊召喚する事ができる。

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。

また、自分フィールド上に表側表示で存在する

このカードが相手の効果モンスターの効果の対象になった時、相手の手札を確認して1枚捨てる。

戦車と要塞を掛け合わせたようなモンスターが召喚される。やっぱりかなカードを・・・

「その顔じゃカードの効果は知っているようね。私は手札のマシンナーズカノンを墓地に送り、そのままマシンナーズフォートレスを特殊召喚よ！！」

鈴

手札：4枚

場：マシンナーズ・フォートレス（攻撃力2500）
マシンナーズ・ギアフレーム（攻撃力1800）

「やるなあ、鈴のやつ。1ターン目で上級モンスターを召喚したぜ。」

「簡単に特殊召喚できるのが、あのカードの利点だからな。あれくらいは当然だろ。」

………いたんですね、一夏君、弾君。

「さらにカードを2枚伏せてターンエンドよ！」

鈴

ライフ：4000

手札：2枚

場：マシナーズ・フォートレス
マシナーズ・ギアフレーム

「俺のターン！」

遊里

ライフ：4000

手札6枚

・ 手札に鈴のモンスターを倒せるモンスターはない。ここは守るか・

「俺は仮面竜マスケドドラゴンを守備表示で召喚！」

《仮面竜マスケドドラゴン》

十

効果モンスター

星3 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻1400 / 守1100

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、

自分のデッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

遊里

手札：5枚

場：仮面竜（守備力1100）

仮面で顔を覆った竜が現れる。どうでもいいが、この仮面は防具なのか？

「さらにカードを2枚伏せ、ターンエンド。」

遊里

ライフ：4000

手札：3枚

場：仮面竜

「私のターン！」

鈴

ライフ：4000

手札：3枚

（仮面竜ということはドラゴンデッキ!?一夏は悪魔族を使ってた

「つていつてたけど、デッキを複数使っつてことかしら？・・・でも！」

「私のすることはわからない！私は永続魔法、一族の結束を発動！」
「まず！？」

《一族の結束》
いちぞく けっそく

十

永続魔法

自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が1種類の場合、自分フィールド上に表側表示で存在するその種族のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする。

鈴

手札：2枚

「このカードは墓地のモンスターの種族が1種類の場合、自分フィールド上のモンスターの攻撃力は800ポイントアップする！」

マシンナーズ・フォートレス	(攻撃力2500)	攻撃力3300
マシンナーズ・ギアフレーム	(攻撃力1800)	攻撃力2600

「まずいな、鈴の必勝パターンだぜこいつは。」

「ああ、場には上級クラスの攻撃力を持つカードが2枚。あの伏せカードもおそらく攻撃反応型の罠だ。うかつに攻撃できないだろうし。」

そう、マシンナーズデッキは、大体がビートが基本の動きになっている。そのために罠や魔法で相手のカードを除去しながら動くのが基本なのだ。

「さらに私は手札から地砕きを発動！！私は仮面竜を破壊！」

「しまっ！？」

《地砕き》

十

通常魔法

相手フィールド上に表側表示で存在する守備力が一番高いモンスター1体を破壊する。

仮面竜がひび割れた大地に吸い込まれていく。

「私はマシンナーズ・フォートレスで直接攻撃！」

フォートレスの体の中から、砲台が現れ、こちらに標準を定めて

いるようだ。まずい！！

「『衝撃砲』！！」

「リバースカードオープン！リビングデットの呼び声！！」

《リビングデットの呼び声》

+

永續罫（準制限カード）

自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。

そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「俺はこのカードで、仮面竜を蘇生！」

仮面竜（攻撃力1400）

「！？でも、攻撃力はフォートレスのほうが上！攻撃は続行よ！」

蘇生された仮面竜は、しかしフォートレスの见えない砲弾で吹き飛ばされる。

「つぐう!?!」

遊里

ライフ4000 2200

ちい!?!かなりダメージを食らっちゃったが、仮面竜は戦闘で破壊されてこそ真価を発揮する!?!

「俺は仮面竜の効果により、デッキから2枚目の仮面竜を特殊召喚!?!」

「ならばギアフレームで攻撃!仮面竜を破壊!?!」

ギアフレームの拳?が、仮面竜を殴り飛ばす。だがそれも想定内だ。

「俺は仮面竜の効果で黒竜の雛を特殊召喚!」

黒竜の雛(攻撃力800)

(頼むぞヒナ!)

(マカセテ!)

「そんな弱小モンスターでなにができるのよ!?!」

あれ？このカードって、結構有名なはずなんだが・・・まあ、いか。

「さあ？やってみなきゃわからないぜ？」

「ふん！（あの顔はハツタリじゃないわね・・・）私はターンエン
ドよー！」

鈴

ライフ：4000

手札：2枚

場：マシンナーズ・フォートレス

マシンナーズ・ギアフレーム

魔法・罨：一族の結束

伏せカード2枚

「俺のターン！！」

遊里

ライフ：2200

手札：4枚

場：黒竜の雛

魔法・罨1枚

そろそろ反撃するか。

「俺は黒竜の雛の効果を発動！！黒竜の雛を生贄に捧げることにより、手札から真紅眼黒竜を特殊召喚することができる！！」

レッドアイズブラックドラゴン

「なんですって!?!」

ヒナが光に包まれた後に現れたのは、紅の眼を輝かせる漆黒の鱗をもつ竜。伝説の決闘者、城之内克也のエースモンスター。

《真紅眼の黒竜》レッドアイズ・ブラックドラゴン 十

通常モンスター

星7 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2400 / 守2000

真紅の眼を持つ黒竜。怒りの黒き炎はその眼に映る者全てを焼き尽くす。

遊里

手札3枚

さすがに迫力あんなあ。

そう、俺の今回のデッキは【レッドアイズ】デッキ。

少しファンデックっぽいが、お気に入りの一つだ。

「レッドアイズ・・・ドラゴン族最高クラスのレアカード・・・」

「すげえ・・・」

なんか一夏と弾が呆けてるが、そんなに凄いか？サポートカードは多いほうだが、ただの攻撃力2400のバナラなんだぜ？

「ちよつ、ちよつと！？なんであんな、そんなレアカード持ってるのよ！？」

なんか鈴がテンパってる。ああ、この世界じゃ、伝説のレアカードなんだっけ？・・・説明めんどいなあ。・・・適当でいいか。

「デュエルを続けるぞ。」

「スルー！？」

しゅいー！

「手札から黒炎弾を発動。このカードは場にレッドアイズが存在する場合に発動可能。レッドアイズの攻撃権を放棄する代わりに、相手にレッドアイズの攻撃力分のダメージを与える!!」

《黒炎弾》こくえんだん

十

通常魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する「真紅眼の黒竜」1体を選択して発動する。

選択した「真紅眼の黒竜」の元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

このカードを発動するターン「真紅眼の黒竜」は攻撃する事ができない。

遊里

手札：2枚

レッドアイズの炎が、鈴に襲いかかる!!

「きゃあ——————!!」

鈴

ライフ：1600

これでライフではこちらのほうが上!!

「つく!でもレッドアイズでは、私のモンスターは倒せない!!」

そう、レッドアイズの攻撃力は2400。これではギアフレームの攻撃力にもとどかない。だが、

「手札からサイクロンを発動!!一族の結束を破壊する!!」

「な!？」

遊里

手札1枚

あれはやっぱりかいたからな。サイクロン引けてよかった。

「そして俺は、手札から融合呪印生物を召喚」

《融合呪印生物 - 闇》

十

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 岩石族 / 攻1000 / 守1600

このカードを融合素材モンスター1体の代わりにする事ができる。

その際、他の融合素材モンスターは正規のものでなければならぬ。フィールド上のこのカードを含む融合素材モンスターを生け贄に捧げる事で、闇属性の融合モンスター1体を特殊召喚する。

遊里

手札：0枚

融合呪印生物1闇（攻撃力1000）

「？そんなモンスターでなにすんのよ？」

「まあ黙って見てな。融合呪印生物1闇は二つの効果がある。一つは融合素材の代わりになる効果。そしてもう一つは、場にあるこのカードと融合素材モンスターを生贄に捧げることで、生贄にささげたモンスターを融合素材とした、闇属性の融合モンスターを特殊召喚することができる。」

「なんですって!？」

「俺はレッドアイズと呪印生物を生贄に、ブラックデーモンズドラゴンを特殊召喚する!!! 『呪印融合』!!!」

すると、呪印生物が、レッドアイズを取りこみ、まるで、卵のよ
うな球体となった。

「いでよ、ブラックデーモンズドラゴン!!」

闇の卵から現れたのは、かつて迷宮の守護者を破った悪魔龍。そ
の姿は敵に恐怖を与える。

ブラック・デーモンズ・ドラゴン《 十

融合モンスター

星9 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻3200 / 守2500

「デーモンの召喚」+「真紅眼の黒竜」

「ブラックデーモンズで、ギアフレームを攻撃!!」
「デーモンズフ
レア」!!」

「くっ! 罠カード発動!! 聖」
「トラップ・スタンを発動! このター
ンは罠カードを発動できない!! なによそれ!？」

《トラップ・スタン》 十
通常罠

このターンこのカード以外のフィールド上の罠カードの効果は無効

にする。

ブラックデーモنزの炎が、ギアフレームを焼き尽くす。

「うっきゃーーーー!?」

鈴

ライフ：200

うっきゃっておい。

「俺はターンエンドだ。」

遊里

ライフ：2200

手札0枚

場：ブラックデーモنز

「くっ私のターン!」

鈴

ライフ：200

手札：3枚

場：マシンナーズフォートレス

魔法・罫：伏せカード1枚

「すげえな遊里のやつ。あそこから巻き返したぞ！」

「ああ、だが」

そういつて弾は鈴のほうを見る。それにつられてみると、鈴は劣勢のはずなのに、笑っていた。とても楽しそうに。

「やるじゃないあんだ。」

そう、彼女は嬉しいのだ。彼女はも生粋の決闘者。相手が強いこそ、燃えるのである。だからこそその称賛なのだ。

「お前もな。」

それがわかっているからこそ、遊里も素直に返した。

「でも、勝つのは私よ！私はリバースカード、ライジングエナジーを発動。フォートレスの攻撃力は1500ポイントアップ!!」

《ライジング・エナジー》 †

通常罫

手札を1枚捨てる。発動ターンのエンドフェイズ時まで、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力は1500ポイントアップする。

鈴

手札2枚

マシナーズ・フォートレス（攻撃力2500 攻撃力4000

攻撃力アップカード！？破壊系トラップじゃなかったのか・・・

「さらにフィールド魔法、ガイアパワーを発動。地属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップ！」

マシナーズ・フォートレス（攻撃力4000 攻撃力4500

《ガイアパワー/Gaia Power》 +
フィールド魔法

フィールド上に表側表示で存在する地属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、
守備力は400ポイントダウンする。

鈴

手札1枚

「攻撃力4500・・・」

「今のフォートレスは、神のカードすらも超えたわ！！バトル！！
ブラックデーモンズに攻撃！！衝撃砲！！」

「ぐっつあーーーー！！?!？」

遊里

ライフ900

空気の弾丸が、ブラックデーモンズを肉塊に変えた。・・・グロいなおい・・・

「そしてマシンナーズ・フロントラインを発動しておくわ。」

《機甲部隊の最前線》マシンナーズ・フロントライン

十

永続魔法

機械族モンスターが戦闘によって破壊され自分の墓地へ送られた時、そのモンスターより攻撃力の低い、同じ属性の機械族モンスター1体を自分のデッキから特殊召喚する事ができる。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「これで私のターンは終了。さあ、あなたのターンよ！」

鈴

ライフ：2000

手札：0枚

場：マシンナーズフォートレス（攻撃力3000

魔法、罫：ガイアパワー、機甲部隊の最前線

サイド：一夏

「おいおい、こりゃ、鈴の勝ちか？」

そういうのも仕方ないだろう。遊里の手札は0。フィールドにもカードは出ていない。勝機はほとんどない。だが。
「いや、まだわからないぞ？」

「おいおい、お前はまだ遊里が勝てるんでも？」

そういうのも仕方ないだろう。遊里の手札は0。フィールドにもカードは出ていない。勝機はほとんどない。だが。

「それはわからない。」

「なら！」

「でもさ、あいつは諦めてないみたいだぜ？」

そう遊里の目からは、まだ戦意は消えていない。まだ諦めてないんだ。なら俺らがあいつの負けだと決めつけるわけにはいかねえだろう。お前のデュエルを魅せてくれ！遊里！！

サイド：遊里

遊里

手札：0枚

場：0枚

手札は0、場には0。いわゆる大ピンチってやつだなおい。ムク
口るときより、ひどいな。でも……

「ふふ……」

楽しい。楽しいなあ、おい!!

「鈴!!」

「な、なによ!!?」

突然の俺の叫び声に、驚いてるようだが、それは別にいい。

「俺の手札は0枚、場にもカードはない。これで逆転できるカード
を引けたらおもしろいよなあ?」

「!?!?はあ!?!?そんなことできるわけないじゃない!?!」

そう、普通ならできない。でも。

「俺はこのドローにかける。ドロー!!」

・・・よし!

「手札から、天使の施しを発動!!」

《天使の施し》 十

通常魔法

自分のデッキからカードを3枚ドローし、その後手札を2枚選択して捨てる。

「こいつもこっちの世界じゃ禁止じゃねえんだよなあ。

「こ、このタイミングで!?!なにそのドロー!?!チートじゃない!」

うん、俺もそう思う。

「効果により3枚ドローし、2枚を墓地に捨てる」

！？このカードなら！！

「鈴、いくぜ？」

「！？いいわ、かかってきなさい、遊里！！」

いわれずとも！！

「俺は龍の鏡を発動する！！」

《龍の鏡》ドラゴンズ・ミラー 十

通常魔法

自分のフィールド上または墓地から、

融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、

ドラゴン族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。

(この特殊召喚は融合召喚扱いとする)

「俺は墓地のレッドアイズと融合呪印生物闇をゲームから除外！メテオブラックドラゴンを特殊召喚する！！」

「なんですって！？」

《メテオ・ブラック・ドラゴン》 十
融合モンスター

星8 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻3500 / 守2000

鈴

ライフ：0

勝ったあ……………

「大丈夫か？」

とりあえず、倒れている鈴に手を貸す。さすがに女の子を倒れたままにしておけないからな。

「ありがとう。しかしあんた強いわねえ。久しぶりに負けたわ。」

「いや、今回の勝ちも運の要素が強いな。最後に龍の鏡をひけなかったら負けていたし。」

これは本音。俺の今回のデッキは、最高攻撃力がレッドアイズの攻撃力2400だから、モンスター単体ではフォートレスは倒せなかっただろうし。しかも、レッドアイズの特召に特化してるから、除去魔法・畏が極端に少ないしな。それで除去できたとしても、返しターンで鈴がモンスターを引いたら、一撃で終わる。

「いんじゃないの？運も実力の内っていうじゃない？十分誇っていいと思うわ。」

「そついうもんか？」

「そついうもんよ。」

「そついうもんかと俺が納得していると、」

「でも」

「？」

「次は私が勝たせてもらうから！」

そのときの鈴の笑顔はとても眩しかったといっておじう……………

原作前5話 黒龍で酢豚娘と決闘で・・・10/12修正しました。(後書き)

ご都合主義とぐだぐだですいませんでした。

今回は中学卒業かな？そろそろ原作入りたいし。

以上、ラドウでした！！

原作前6話 主人公は酢豚娘の話しを聞いて・・・（前書き）

本当はこのまま卒業させるはずだったんですけど、そういえば鈴を、転校させるの忘れてたので・・・あと2話くらいしてから原作いけると思います。（原作前に特別編書くかも）

決闘はたぶん原作までなしで・・・

錬金術師？さん。感想ありがとうございます。泣くほどうれしいです！がんばりますので、応援よろしくおねがいますね！

原作前6話 主人公は酢豚娘の話しを聞いて・・・

サイド：遊里

ども。最近性格がさだまらないことでなじみの遊里です。あの鈴とのデュエルから1年。俺たちは2年生になりました。

あれからいろいろあったなあ。鈴と一緒に一夏の家のいたり。
(異常に千冬さんに怯えてたんだが、なにがあっただらうか?)

五反田食堂にもいったし。(五反田妹はすで鈴とライバル関係になつてた。弾にそのことで愚痴られたっけ)

鳳中華料理店ふうにもいったなあ。(鈴が一夏に作るための酢豚の実験台になったのは思い出さなくな、うわ、やめるもう食えな・・・)

ま、まあ、いまとなつてはいい思い出?である。

しかし、いい出来事があれば、悪い出来事も来るようだ。そう、
『鳳 鈴音の転校』である。

「離婚？お前の両親が？」

俺はただいま公園で鈴の話しを、ジューズ片手に聞いていた。

最近様子がおかしいと思って聞いてみたら、どうも両親が離婚することになって、母親について行って、中国に転校するそうだ。

・・・どうやら原作どおりの展開になってしまったらしい。前に鈴の家にいったときは、仲がよさそうに見えたんだがなあ。

俺が考え込んでいると、

「遊里、頼みがあるんだけど・・・」

「？なんだ？」

めずらしいな、こいつが頼みごとなんで。まあ話の流れで予想はつくが・・・

「一夏たちには、このこといわないで欲しいの・・・」

やっぱり

「一応、理由を聞いていいか？」

「だって余計な心配かけたくないし。それに……。」

「それに？」

「一夏に知られてみなさい。家に乗り込んでくるに決まってるわよ・
」

「あ……。確かに。」

あいつ無駄に熱血だからなあ。鈴の両親を説得しようとして、ちよつとした騒ぎになるかも……まあいつなら、あっさり説得しそ
うだけど。

「でもありがと。」

「なにがだ？」

急にお礼をいわれてしまった。なんだろいつたい。

「私の話を黙って聞いてくれたじゃない？」

「ああ。でも大したことじゃないだろう？お礼をいわれることはし

てないはずだが？」

「話しつてのを聞いてくれる人がいるだけでもありがたいものなのよ？」

「そういうもんか？」

「そういうもんよ。」

それっきり、会話がとまった。公園には俺たちの他にはだれもない。

しかし、鈴転校しちまうのか。寂しくなっちまうなあ。あ、そう
だ。

「そういえば、鈴に聞きたいことがあったんだが。」

「なによ？」

「一夏にはもう告白したのか？」

「ブーーーーー!!!!!!!!!!?!!」

「むー!？」

「とめて、とめて〜」

「ぐむむ!?!」

「ぢらにと〜」って、苦しいわー!。「ぐべらっ!?!」

俺は鈴に吹き飛ばされた。ていうか、これって中国拳法の『崩拳』
ってやつじゃねか・・・?

「まったく。あんたは変なところでふざけるだから。最初はクールな
やつかと思ったら、ただの人見知りなだけだったし。」

「そ、それは関係ないだろ／＼／＼／＼で?一夏に告白はしないのか
?」

「そ、それは／＼／＼。ま、まあ引越するまえには・・・て、い
うかなんで私がそそそ／＼／＼／＼その一夏を好きなことをしっ
んのよ／＼／＼／＼!?!」

「いや、たぶんうちのクラスは全員知ってると思っぞ?」

「なんですってええええ!?!」

「いや、そんな驚かなくても・・・」

こいつって結構わかりやすいからなあ。

一夏に近づく女を威嚇したり、(弾と一緒にあとでその女の子にフォローをいれたな)

一夏に自分で弁当作ったり、(中身が酢豚と白米だけだったのは笑えたなww)

一夏にことあるごとに抱きついたり、(見事に反応なかったなあいつ)

それをいったら、

「そ、そんな。絶対ばれてないと思ってたのに・・・」

「いや、あれでばれてないと思えるのが不思議なんだが・・・」

なんかショックを受けてるみたいだが、あそこまでわかりやすいと、わからないやつのほうがおかしいと思っぞ?」

「じゃ、じゃあ、もしかして一夏にも……？」

真つ赤な顔をして訪ねてくる鈴。うん、それは……

「たぶん、一夏にはばれてないぞ？」

「なんでよ？」

「だって、……一夏だし……。」

「ああ……。」

その一言で鈴も理解したようだ。あいつの朴念仁っぷりは『IS』を読んでわかってたつもりだったが、それでも甘かった。まさかあそこまでとは……

「まあ、あいつの鈍感な筋金入りだからな。」

「あんたがいえることじゃないけどね（ぼそ）」

「？なんかいったか？」

「なんにも。」

おかしいな。確かになんかいったのが聞こえたんだが・・・

「ま、頑張れよ？応援はしてやるから。」

「うん、ありがとう／＼／＼／＼／＼／」

真っ赤な顔をしている鈴を見て思う。鈴を泣かせたらあの幼馴染をばこぼこにしてやるかと・・・

-----ぶるるるるるるるるるるるるるるるる-----

「ど、どうした一夏！急に真っ青になって震えだしてー！」

「いや、なんか、理不尽なことを思われてるような感じがして・・・」

その日、一夏は震えが止まらなかったというww

原作前6話 主人公は酢豚娘の話しを聞いて・・・（後書き）

まだ原作いけないなあ。

原作前7話 主人公たちは進路を決めて・・・(前書き)

前回のあらすじ

鈴の話しを聞いた。以上!!

前回と同じで短いです。

原作前7話 主人公たちは進路を決めて・・・

サイド：遊里

鈴の相談？を受けた翌日、鈴は一夏と弾に転校することを話した。どうやらまだ話しをしてなかったらしい。二人は理由を聞いてきたが、家の事情だと鈴がごまかした。（まあ、間違っていないが）

一夏と弾は残念そうにしていたが、家の事情ならしょうがないと、次の日曜に、お別れ会をすることになった。

その日のとある授業・・・

「今日は君たちの進路について考えてもらおう。」

担任の教師の野太い声がクラスに響く。余談だが、この担任の趣味はトライアスロン。特技は空手と、どこぞのおバカが活躍する学園ラノベ。そこで恐れられている生活指導の教師と同じようなプロフィールである。

あだ名はもちろん『鉄人^{てっじん}』であり、遊里は過去、彼の生活指導を受けたことがあるのだが、そのときの感想が、

「あれはおかしい！！なんでただの教師が残像が残るほどの動きができるんだよ！？っていうか、あの拳はたぶんコンクリ砕けるぞ！？あいつ絶対人間じゃねえよ！まだ改造人間だっていわれたほうが納得できるぜ！！」

である。どうやら彼は生活指導とひとバトルしたらしく、指導室からでてきた彼の姿はボロボロだった。彼の生活指導を受けてから、彼の授業だけは、遊里も居眠りを断念することになる。（他の授業のときはあいかわらずだったが）

閑話休題

鉄人がいうには俺たちももう2年生になるので、この授業で、自分の進路を考えるとということだ。まあ、俺はデュエルアカデミアに行くことに決めているんだが。（千冬さんとも約束したし・・・）

そつえば、あいつらはどうするんだろうか。

昼休み

「進路？」

「ああ。今日の授業で鉄人がいつてただろ？俺はデュエルアカデミアに行くことに決めてるけど、お前らはどうすんのかなあと思ってな？」

ふむ、と鈴は購買で買ったパンを口にくわえながら、考える。どうでもいいが、麻婆パンなんて売ってたか？

「私は転校先の学校を卒業したら、デュエルアカデミアのノース校に入るつもり。」

「ノース校？たしか噂じゃ、極寒の大地に立つ、実力主義の学校って触れ込みのそこだったよな？」

一夏の言葉にひっかかるものを感じた。ノース校って、たしかGXにでてきたような・・・しかし・・・

「随分と詳しいな一夏？」

「まあな、俺はデュエルアカデミア本校を受験しようと思ってるけど、ほかのアカデミアのことも調べておこうと思って。」

「へ〜。・・・でも、その前にお前は座学をなんとかしないと、入れてもせいぜいがオシリスレッドだぞ？」

「確かにね〜。」

「それをいうなよ!?(泣)」

そう、『IS』原作ではそれなりに成績がよかったように見えるが、この世界の一夏は、デュエルモンスターの知識は乏しく、この学校での『デュエル学』（名前のとおりデュエルモンスターについて学ぶ教科で、このデュエルモンスターが普及したこの世界では、どこの学校でも取り入れられている教科である）でも、実技の成績はトップクラスなのだが、座学の成績はぎりぎり赤点をまめがれている状態なのだ。

「まあ、それは置いといて、どうしてノース校に？」

「まあ、私も決闘者だからね。自分の実力をためしたいのもあるし……デュエルを続けてたらまた一夏と会えるかもしれないからね／＼。（ぼそ）」

「?なんかいったか？」

「／＼!?!なんでもないわよバカ!それと弾!!なにニヤニヤしてんの!?!」

「あ、ほんとだ、気持ち悪いぞ弾。」

「そうだな、気持ち悪いな、弾は。」

「ひさしぶりの出番なのに酷いなお前ら!?(泣)というか、遊里のいいかただと、俺がニヤついているのが気持ち悪いんじゃないか、俺自身が気持ち悪いみたいじゃねえか!?!」

いまのはメタ発言になんのかね？俺と一夏の言葉にショックを受けていた弾だが、気を取り直して、再びニヤつきながら鈴の方をみている。……やばいな、本当にちょっと気持ち悪いぞww

「いや、ちょっと鈴の進路が以外だったんでな？」

「なんでよ？」

「俺はてつきり、一夏の「わ／／／!?」「ぐべらべっ!?！」

鈴の必殺の崩拳が炸裂した。ていうかなんだいまの速さ!?まじで見えなかったぞ!?……鈴も鉄人みたいに人外なのかも知らない……

「いきなりなにいうのよ、あんたは／／／!?」

「いや……だからって……いきなり崩拳はねえだろ……グフツ!?」

「弾!?」

……まあ、これがこのクラスのいつもの光景だったりする。

弾が鈴をからかい、鈴が弾に制裁を加え、一夏が叫び、俺が傍観している。最初はクラスのやつらも驚いていたが、いまでは慣れたもので、弾が吹き飛んだ方向の生徒はしっかりと避難してたりする。

弾が回復したのを見計らって、俺は弾に近づく。

「生きてるか？弾。」

「心配してくれるくらいなら、助けてくれてもよかったじゃねえか。」

「いやいまのはお前の自業自得だろ。」

鈴をからかうにしてもあれはやりすぎだ。引き際は見極めないと
な。

「だってよく、これであいつも素直になって一夏に告白したらいい
のよと思っただろ。」

そういつて、鈴のほうを見ると、一夏に真っ赤な顔をしながら、
さっきの弾の発言に対して弁解していた。（一夏はなんのことだか

わかっていないようだが)

「いや、それをいうなら、お前も嘘さんにくく」わく／／！?!?」
「なんだよ?」

急に人の台詞を遮るんじゃないよ。

「な、なんでここで嘘さんの話になるんだよ／／！?!?」

「いや、だつてお前、ちよくちよく嘘さんにあつてるらしいじゃないか。」

そう、前にこいつらを家に招待したんだが、そのとき、偶然にあねきと次の大会の打ちあわせをしていたマネージャーの嘘さん(そのとき、あねきにあつた鈴は、まさか友人の姉が、あの『女神』だとはおもわなかったんだろうか、硬直していた)を見た弾は一目惚れしたらしい。

帰りに、嘘さんも弾を気に入ったのか、携帯の番号を交換してたのを、皆でニヤニヤしながら見たのはいい思い出。(その後で、嘘さんはあねきに散々からかわれたらしい)

「私らを置いてなにを話してんのよ。」

気がついたら、一夏への弁解が終わったのだろつ。鈴と一夏が俺たちのそばに来ていた。

「いや、弾がいつ嘘さんに告白するのかなあど。」

「ちよっ!?!遊里!?!」

「そういえば、そうね。ニヤニヤ」

「そうだな、いつするんだ?(ニヤニヤ)」

「ニヤニヤしてんじゃねえー!?!」

閑話休題

「っん、んん!?!とりあえず進路の話しだったな?」

俺も、鈴も、一夏も、弾が無理矢理、話をそらしたのはわかったが、あえて突っ込まないでおいた。

「ああ。といつてもお前は五反田食堂の二代目じゃないのか?」

そう、こいつはドミノ町の隠れた名店で知られる、『五反田食堂』の息子なのだ。前に本人も、自分は中学を卒業したら、高校にはいかず、料理の修業に専念するっていったし……

しかし弾は自分の頭を搔きながら、

「いや、俺もデュエルアカデミアに行くよ。」

といつてきた。

「あれ、五反田食堂はいいのか？」

と一夏が聞いたところ、

「いや、俺も最初は料理の修業に専念しようと思ったんだけどな？ じいちゃんが、『いまの社会は学歴社会だ。高校くらい卒業してこい！』ていわれて。」

とのことである

このじいちゃんとは、五反田食堂の店主、『五反田巖』のことで、仲間内でも頑固おやじで有名な人物である。まあいい人であるが・

「まあ、それでせっかくだからデュエルアカデミアを受験しようと思ってるな？ 知り合いがいるところのほうが楽しいだろうし。」

「なるほどな。」

巖さんの命令なら、弾に拒否権はないだろうし、（五反田家では、弾の発言力は、弾の父親とおなじくらい低い）それに弾も決闘者のはしくれだから、デュエルアカデミアには興味があったのだろう。実は弾にとっても渡りに船ではなかったのではないだろうか。

「なんだ、じゃあ私だけ独りか・・・」

みると鈴が珍しくしよげていた。まあ、仲間内だけ、自分だけ別の学校にいくというのは、結構寂しいのかもしれない。すると、

「そんな顔すんじゃねえよ鈴。」

「一夏・・・でも・・・。」

「俺らの絆は、そんなことで切れるもんじゃねえだろ？それとも鈴にとって、俺らは転校しただけで他人になっちまうような、その程度の存在だったのか？」

「そ、そんなわけないじゃない!!」

鈴は一夏の言葉に勢いよく立ちあがる。憤るのはいんだけど、周りを見てほしいんだけどな。いくら慣れたといっても、いまの大声で、周りの視線が痛いんだが・・・

しかし、一夏たちは気づかないのか、そのまま話しを続ける。

「私はいたら友達になれてよかったと思ってる！最初、私は最初、早く中国に帰りたいかった！周りは外国からきたっただけで敬遠するし、話しかけてきたと思ったら、中国人ってことだからかわれる。いつも独りだったもの！！でも、一夏や弾。遊里とあって、一緒に勉強して、一緒にお昼を食べて、一緒に話をして、一緒に遊ぶ。なんでもないような時間だと思われるかもしれない！でも私にとっでは大切な・・・宝物のような時間だったわ！！」

・・・いや、鈴さん？そんなふうに思ってくれたのはうれしいんだが、周りの目が痛いんだが。具体的に言うと、「青春してんなこいつら」みたいな視線が。ほら、弾もなんか顔真っ赤にしてるし。

しかし、一夏たちは気づかない。

「ならいいじゃねえか。離ればなれになっても、俺らはずっと友達だぜ。」

「一夏・・・／／／／。」

「……いや、鈴さん。顔を赤らめるとこ悪いんですが、俺らのこと忘れてません？」

「……なあ遊里？」

「どした？」

「俺ら空気じゃね？」

「……いづな。」

その後、周りの視線に気づいた鈴が、勢いよくクラスから逃走したのをご愛敬である……。

原作前7話 主人公たちは進路を決めて・・・（後書き）

今回は鈴の転校です。次回も短くなるかも・・・

今回の話は、実は、弾をアカデミアに入学させるための説明をするためにかいたものです。最初は本当に五反田食堂の二代目にしようと思ったんですが、それだと、ISの男キャラが一夏以外女性ばかりになってしまったため・・・（ISキャラはただでさえ女性が多いのに・・・）

最近自分で、この小説が遊戯王の小説なのを忘れてしまいそうで怖いww

以上、ラドゥでした!!

原作前8話 酢豚娘を見送って・・・（前書き）

前回

主人公たちは進路の話をした。

今回は鈴を見送るところです。また短いです。ていうか最近短いやつばっかだな。

原作前8話 酢豚娘を見送って・・・

サイド：遊里

今日、この空港から、鈴が中国に旅立つ。今、俺たちはその見送りに来ていた。

ちなみに見送りに来ているのは、俺、一夏、弾、蘭（弾の妹）、簪（鈴が家にきたときに仲良くなった）
本音（簪と同じ）である。

ちなみに、あねきと千冬さんも来る予定だったが、どうも大事な仕事があつて来れなくなつたらしい。（二人が来れないことに鈴は残念そうだった）

いまは中国行きの便の搭乗口にいた。もう・・・・・・出発まで時間がない。

「鈴、向こうでも元気だな。」

「体は大事にな？」

「連絡はちゃんとしろよな？」

「うん、あんたらも元気だね?」

鈴はうれしそうで、それでいて寂しそうにほほ笑んだ。一夏たちは知らないが、鈴の両親は正式に離婚することになったらしい。(鈴から話を聞いた段階では、まだ離婚調停中だった)

俺も鈴の力になれたらよかったんだが、いくら更識の人間といえど、まだ中学生の俺にはなにもできなかった。(鈴は気にしないでいいとっていたが・・・)

「本当にいつちゃうの?」

簪が涙目で鈴に尋ねる。寡黙な簪と活発な鈴。一見相性が悪いように思える二人だが、簪を鈴がひっぱり、鈴のフォローを簪がする。もはや、親友とっていいほどに仲良くなっていった。鈴の転校で、一番ショックを受けたのは、もしかしたら簪かもしれない。

「ごめんね、簪。でもどうしてもいかなきゃいけないの。」

「でも、でもでも……。」

簪が珍しく駄々をこねる。でも、

「簪。あまり鈴をこまらせるな。」

「遊兄さん……。」

「鈴だって、本当は行きたくないんだ。でも覚悟を決めていまここにいる。それを俺たちのわがままでひきとめちゃいけない。」

そう。鈴も悩んで、苦しんで、それで中国に行く決意をしたんだ。だったら俺たちは笑って見送るべきだろう。

簪は俺の言葉を聞いて、シュンと落ち込んでしまった。……
・しゃあねえなあ。こういうのはがらじゃねえんだが。俺は簪の頭を軽くポンと叩きながらいう。

「そんな顔すんな。なにも今生の別れてわけじゃねえんだ。手紙で連絡もとれるし、電話もある。それにもう会えないってわけじゃねえんだ。」

そうだろうと俺は鈴に聞く。鈴は笑みをうかべている。簪がこれほど自分のことを思ってくれているのがうれしいのだろう。

「あつたりまえじゃない！！長期の休みに入ったら、遊びにくるしね。」

「そいつはいいや。そんなときは家の食堂にもこいよ。なあ、蘭。」

「そつだね。ぜひ来てください。一夏さんは渡しませんけど（ぼそ

「ええ、ぜひ寄らせてもらっわ。一夏は私がもらっけど（ぼそ

そついって、鈴と蘭は握手を交わす。おかしいな。微笑ましい光景なはずなのに、あいつらの後ろに龍と虎が見えるぞ？間にいる弾もなんか冷や汗かいてるし。

「修羅場ってやつだね。」

「いたんだな本音。」

「いたよ!?(泣

「?」

一夏は二人を不思議そうに見ている。そろそろ殺していいかな、この朴念仁……………

あ！忘れるところだった。

「そつだ鈴。」

「?どうしたの?」

「これ渡すの忘れてた。」

「!?!?これは。」

「俺と簪からの、ちよつとした選別だ。」

俺が渡したのは、俺と簪が改造した、スペシャルデュエルディスク特性決闘盤。色はグレイを主体として、アクセントとしてワインレッドがそえてある。形としては、普通の決闘盤をこつく、角ばった感じにして、龍の刻印が施されている。もちろん、自動シャッフル機能付き。

「前に俺らの決闘盤のシャッフル機能を羨ましがってたろ?それでせつかくだから、一から決闘盤を作ったんだ。もちろん自動シャッフル機能も付いてるぜ?」

「ほかにも細かい機能を付けといたから、大切にしてくれ?」

ちなみに、KCの許可証も一緒に付けといた。これがないとせつかく作ったのに、使えなくなっちゃうからな。

「ありがとう!大切にするわね!」

「おっ。」

どつやら喜んでもらえたようだ。徹夜したかいがあったぜ。

そのとき、空港のアナウンスが聞こえてきた。

『中国行きの便にご搭乗の方は、搭乗口までおいでください』

「時間みたいね。それじゃあ、またね？」

「ああ、じゃあな。」

「ちゃんと遊びに来いよ？」

「元気だな。」

「手紙ちょうだいね？・・・」

「風邪ひいちゃだめだよ？」

「早くこないととっちゃいますからね!!」(一夏の意味で)

そうして彼女は去って行った。こちらをふりかえらず、背筋を伸ばして歩いていく姿は、少しかっこいいと思ってしまった……

……余談だが、どうやら『IS』の原作どおりに、鈴は一夏に酢豚を毎日作る約束をしたみたいだ。……一夏ちゃんと覚えてられるかな……。

原作前8話 酢豚娘を見送って・・・（後書き）

なんかまたぐたぐたになっちゃいました・・・

あと少しで原作入るので、応援よろしくおねがいます!!

以上、ラドウでした!!

原作前最終話 主人公は再びうさみみにあって・・・(前書き)

いつのまにかお気に入りが90件を超えていたことに自分でびっくり。

100件超えたら、特別編でもやろっかな。

前回のあらすじ

鈴を見送った。

原作前最終話 主人公は再びうさみみにあって・・・

サイド：遊里

へーい、ぼーいずあんどぅがーるず。世界で稀にみるほど珍しいといわれてる、靈感決闘者、更識遊里だぜい。

・・・・・・・・なんかすまん。ちよつといまの状況に混乱しててな。

鈴が転校してから数カ月。特に変わったことはなく、（せいぜい、鈴がいなくなつて一夏に告白する生徒が急増した程度）一夏に勉強を教えたり、五反田食堂であまりもののかぼちゃ煮定食を食べたり（以外にうまかった）、一夏に勉強を教えたり、「スカルフレイム」のメンバーたちとデュエル大会を開いたり、一夏に勉強を教えたり、なぜか休暇中の千冬さんのショッピンングにつきあわされたり、一夏に勉強を教えたり。・・・・・・・・一夏に勉強教えてばっかだな、おい。

いやあ、まさか一夏のやつが、・・・・・・・・あそこまで物覚えが悪いとほ。

いや、普通の勉強（国語や社会、数学など）は結構できるみたいなんだが、新しいことを覚えるということが、苦手みたいなんだよあいつ。まあ、実技はいいみたいなんで、俺が座学のほうを一夏に教えている。本当はめんどくさかつたんだけど、千冬さんに頼まれたからしょうがないんだ。・・・・・・・・真剣だされたし・・・・・・・・（弾？あいつは意外に実技、座学両方とも成績がいいから問題ない）

とりあえず今の現状なんだが、大学の研究室に、メルヘン童話の世界を掛け合わせたような部屋にいる。俺は確か、明日の実技試験のために、デッキ調整をしていたはずなんだが……

デッキ？ああ、一応『帝デッキ』を作ってみた。安定した戦いができるし、なによりこのデッキなら、原作キャラから目をつけられる心配はないだろう。これで俺の平穏な生活が確約されたのだ！！

ん？まだ諦めてなかったのかって？当たり前ですう。俺が原作に絡んで、原作崩壊が起こったらどうすんだよ！！……まあ、ISキャラがいる時点で、原作もなにもあつたもんじゃないと思うが……

おっと、話がそれたな。まあ、やっと落ち着いて考えてみれば、俺はこの部屋に来たことあつたわ。そうここは、

「やつほ〜！ゆっくんおひさ〜！！」

「ひさしぶりだな、似非うさぎ。」

「いきなり辛辣！？」

そう、ここは俺が転生するときに訪れた、この似非うさぎ。『タバネ』の部屋だった。

「もう！なんでゆつくんはそんなに、タバネさんに意地悪するのかな？……ハッ！！まさかこれが流行のツンデレ！？」

「なにを勝手なことってんだ、この駄づなぎ。」

「ですよ〜。」

タバネが部屋の隅でいじけているが、そんなことは知ったことではない。それよりもだ。

「で、なんで俺はここにいるんだ？なにか用事があったんだろ？」

「あ、そうなんだよゆつくん。」

どうでもいいが、いじめてたんじゃねえのかお前。

「記憶にございません。」

「一昔前の政治家みたいなことってんじゃないやねえよ！？」

「まあ、そんなことはいんだよ。」

俺のつつこみスルーしやがった。まあ、別にかまわんが……

「それより、お知らせが二つあるんだよ。」

「お知らせ？」

なんだろう。嫌な予感しかしねえ。

「実は、どうやら君のいる世界にイレギュラーが発生したらしいんだあ。」

「イレギュラー？」

なんだそれ？

「うすうす気づいてるかもしれないけど、君を送った世界は『GX』の世界と、私が住んでいた『IS』の世界の混合世界なんだ。」

「まあ、そりゃあ、わかってたが。」

なんせ、俺自身、更識家に拾われてるからなあ。一夏もいるくらいだし。

「でも、元々違う世界を合わせた世界だから、ちよつとした『隙間』ができちゃったみたいなんだよね？それで、本来ならその隙間は埋めなきゃいけないんだけど。」

そこでタバネは言葉につまった。なんだ？

「どうした？」

「いや・・・その、怒らない？」

「・・・内容によるが・・・。」

どうしたんだ、こいつ。まるで失敗を親に話す子供みたいな・・・まさか・・・

「その隙間を埋めるのを忘れちゃって、本来は君の世界に存在しないものまで出現する可能性がでてきたんだよ。そのせいで、話の流れに影響が出る可能性がでてきちゃったんだ。」

「まじかよ……………」

それって、原作の流れに影響がでることか！？俺の原作知識が無駄なるのか……………

「怒らないの？」

「いや、それより驚きのほうが強い。…………まあやっちゃったもんはしょうがねえか。」

まあ、原作に関わらないようにすればいいだけだしなあ。たぶん。そのイレギュラーも関わってくるのはどうせ原作にしろっし。

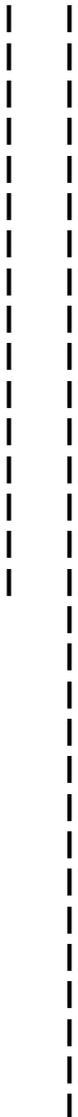
「で、話はそれだけか？だったら元の世界に戻してくれるとうれしいんだが？」

「あ、まって、もう一つあるんだけど。君が助けた女の子覚えてる？」

女の子って、ああ。

「火事現場にいた？」

またこの落ちか――――！！！！



サイド：タバネ

「いつちゃったか。」

ゆつくんたら。あいかかわらず、原作に関わらないつもりみたいだね。いつくんと友達にまてなったのに、往生際が悪いなあ。まあ、隙間のことについて、怒られなかったのはよかったけどね。

まあ、ゆつくんは原作に関わらなければ大丈夫だと思ってるみたいだけど、いったほうがよかったかな。『原作にない存在』^{イレギュラー}はつまり、行動の予測ができない存在。つまり、原作に関わるとは限らず、むしろ同じ『原作にない存在』である、ゆつくんに惹かれる（・・・可能性があるということ）。

「まあ、いいか。ゆつくんならなんとかできるでしょ。それに。」

そのほうが楽しめそう)・・・)だしね？

そのときのタバネの顔は、天使のようで、悪魔のような笑みを浮かべていた……………。

原作前最終話 主人公は再びうさみみにあつて・・・(後書き)

ひさびさの更新です。速度がかなり落ちてきました。すいません。

今回はやっと原作にはいります。遊里はめだたず合格できるのか(笑)

ではまた次回。ラドゥでした!!

原作前に設定追加（前書き）

とりあえず遊里の『靈感体質』という設定が生かされてない感じがしたので、

・遊里は精霊を実体化させることができる。（最高三時間）クリーチャー型の精霊は人間形態にすることができる。

・更識家の人間（本音・嘘含む）はそれを知っている

という設定を追加しました。

原作前に設定追加

E・HEROジ・アース

呼び名：アース

人間化容姿イメージ：ネギま!?!のタカミチ。

遊里の精霊たちのまとめ役。プラネットシリーズの一枚であり、そのせいも、他の精霊と一線を画す力を持ち、唯一、自身の力で実体化が可能。和食が好物。最近ファイにおじさんくさいといわれたことが悩み。

インフェルニティ・アーチャー

呼び名アーチャー

人間化容姿イメージ：フェイトのランサーの肌を黒くしたうような感じ

精霊たちのムードメーカーで、お兄さんの存在。釣りが趣味で、よく実体化して、遊里やアースをさそっていつている。

E・HERO レディ・オブ・ファイア

呼び名：ファイ

容姿イメージ：カードイラストそのまま

精霊たちの妹ポジション。ゲームが好きで、遊里の部屋にあるゲームは、彼女がねだったものが多い。

久遠の魔術師 ミラ

呼び名：ミラ

容姿イメージ：カードイラストそのまま

精霊たちのお姉さんのポジション。主人公が鈍感なのと、胸がちいさいのが悩み。魔術の腕は一流で、認識疎外の結界などがはれる。

黒竜の雛

呼び名：ヒナ

人間化容姿イメージ：フェイトのアーチャーを5歳くらいにした感じ。

精霊たちの子供のポジション。ちなみに、遊里が任意的に力を送ると、真紅眼の黒竜へと、成長することもできる。

スノーマンイーター

呼び名：スノー

人間化容姿イメージ：青い髪で、白い肌の5歳児。男の娘。

精霊たちの大食いポジション（笑）。いつもは喋れないが、人間化すると喋れる。

原作前に設定追加（後書き）

こんな感じでよろしくおねがいます。

第一話 とうとう原作開始！！主人公は結局テンプレ的展開になるのが二次小説

なんかいつのまにかお気に入りが100件超えてたので、そのことについてアンケートをあとがきに書きますので、よろしくおねがいします。(この勝った場合、作者が勝手に書きます。)

とうとう原作開始。 うまく書けるだろうか

第一話 とうとう原作開始!!主人公は結局テンプレ的展開になるのが二次小説

サイド：遊里

………
のか。すまんないまは、ちょっといそがしい。なぜかって？それは、

「遅刻だ――――

―――!?!?」

ただいま全力前回で受験会場まで走っているから。

更識遊里16歳。ただいま風になってます。

「って、いつてる場合じゃね――――

―――!?!?」

なんでよりもよって、受験当日に電車が止まるんだよ!?!?ありえねえだろ!あれか、神様は俺のことがきら………神様ってタバネじゃねえか。だったら当てになんねえな。

(ひどくない!?!?byタバネ)

・・・なんかタバネの音が聞こえてきた気がしたが気のせいだろう。いまは構ってられねえし。

「お！あれか？」

目の前の『海馬ドーム』。たしかあそこが受験会場のはずだ。俺はさらに走る速度を上げた。受付は・・・

「あれか！」

ドームの入り口にサングラスをかけたスーツの男が立っていた。たぶんアカデミアの教員の一人だろう。・・・前世でみた二次創作のとおり、他の教員も同じ格好なんだろうか。どうでもいいが・・・と、とりあえず受付をすませないとな。

「すみません！」

「おや、君は？もう受付は終了するんだが。」

時計を見たら、確かに、もうすぐ終了の時間になるみたいだ。でもまあ、一応連絡はしたはずだから、大丈夫だと思うが。

「受験番号1番の更識遊里です。電車が止まってしまったので、遅れてしまいました。一応、アカデミアのほうにも連絡しておいたんですけど。」

そうすると受付の人（以降サングラスと呼ぼう。）は「少しまちなさい」と、なにやらどこかに連絡しているみたいだ。まあ、いくら遅刻者といつても、あらかじめ遅れると連絡していた受験生を問答無用で失格にすることはないだろう。一応筆記一位だしな、俺。

なんで一位なんだかって？普通目立ちたくないなら、わざと点数を低く取って、受験番号をさげるだろうってか？いや、なんかあまりに、簡単すぎて、間違えられなかったんだ。だってよう……問題の7割がブルーアイズについての問題だったんだぜ？前世でみた二次創作にはそういう描写はあったが、いくらなんでも、これはないと思ってたんだ。まさか本当にそうなるとは。どれだけ嫁好きなんだよ社長え……

「更識君。」

おっと、考え込んでたら終わったようだ。

「今会場に確認がとれたから、このまま行けば大丈夫だ。でもまあ一応急いでいきなさい。」

どうやら大丈夫だったらしい。これで一安心だ。

「ありがとうございます。それじゃ、これで。」

そうして、俺は会場に向かっていった。

サイド：サングラス

ん？なんか不本意な呼ばれ方をされた気が。まあいいか。

しかし彼も災難だったな。受験当日に電車が止まるなんて。まあ彼の場合、110番の彼より用意周到なのか、きちんとアカデミアに連絡していたみたいだから大丈夫だろう。

がんばれよ！若人たちよ！！

以外に熱血だった、サングラス（仮）先生だった……

受験会場

再びサイド：遊里

「あはは、まったくですよ。」

お！なんかいい人そうだなこの人。アカデミアの先生が皆こんな先生ならいいのに。

「ハハハ、それは光栄だね。」

「……心読みました？」

「いや、顔にでてたよ？」

「まじすか。」

ポーカーフェイスには自信があつたんだが。

「それじゃあこちらで試験を始めようか。デッキの準備はできてるかい？」

デッキをディスクにセットして。よし！準備完了つとー！！

「準備できました。」

「それじゃあ試験会場に「ちょっとマツノーネ!!」」

俺とサングラス二号（仮）が声のしたほうを向くとそこには一人の男が立っていた。

白塗りのオカツパ頭が。

一瞬新手の変態だと思った俺は悪くない……

サイド：シロノ「クロノスなのーね!!」ちっ！クロノス

……なんか作者のワタシに対する扱いが不当だとオモウノデスーガ！（作者は初期クロノスがあまり好きではない。まあ好きな人はいないと思うが）

……ていうか、ジブンでいっておいてナンデスーガ、作者ってなんスーノ？

「クロノス先生？」

おっと、少し考えすぎてたようなのーネ。それより、

「上代先生、その子はどうしたのーネ？」

「ああ、この子は受験番号1番の更識遊里です。さっきの遊城君と同じで電車が止まって遅刻したよう。この子はちゃんとアカデミアに遅刻の連絡をしていたので、特別に試験を受けさせることになりました。」

「なるほどナノーネ。それなら試験を受けさせないわけにはいかないのーネ。……そうナノーネ。いいことを思いついたのーネ！むふふふ。」

サイド：三度目の遊里

なんか、目の前で白塗りが不気味に笑ってるんだが。上代先生（さっき白塗りがいつてた）もなんか若干引いてるし。

「上代センセイ。その子の試験は私がやるのーネ。」

「……なんかこの後の展開の予想がついたんだが……」

上代先生は困惑している。

「し、しかし、クロノス先生は先ほど結城君とデュエルしたばかりでは？」

「私なら大丈夫ナノーネ！それにいくら連絡をしていたとはいえ、遅刻には変わりないーの。ならばそれないにハンデがないといけないのではナクウテ？」

「それは！？」

上代先生が言葉に詰まる。クロノスの言葉に一理あると思ったようだ。しかしその本人は、

（むふふふ。ドロップアウトボーイに負けたのは屈辱でしたけど、筆記一位の彼にかつたなら、汚名返上できるノーネ！！）

なんて考えてんだらうなあ。めんどくせえ。

「それーに。」

なんだ、こっち見んなー。リアルで見ると本当に気持ち悪いなこいつ。

「仮にも筆記一位なら、この程度のハンデは問題ないはずナノネ。まあ。」

そこでクロノスがニヤリと笑った。むかつく笑みだなおい、修正するぞ？

「彼が私と戦うのが怖いというなら別ですーガ？」

「……………小学生並みの挑発だな、おい。でもまあ、ここで受けないとめんどくさいことになりそうだしなあ。しょうがねえ。」

「はあ。それでいいですよ。受けましょう。」

「それならデュエルフィールドに行くノーネ。ついてきてくださーい。」

そういうと、クロノスは先ほどクロノスがデュエルしていた会場に歩き出した。

やれやれ、めんどくさいことになった……………

サイド：一夏

俺はいま、試験が無事終わり、会場で弾と、ファースト幼馴染の女の子と一緒にいた。彼女とは、鈴、弾、そして遊里と会う前に他の町に引越してしまったんだが、まさかデュエルアカデミアの会場で会えるとは思わなかったな。それにしても、

「遊里のやつ、一体どうしたんだろう。」

「あいつに限って寝坊はないだろうし、どうやら電車が止まってるみたいだから、遅刻じゃないか？」

そういえば、あいつ時間はキチンと守るからなあ。でも大丈夫だろうか。

「一夏？遊里とは誰のことなんだ？」

おっと、そういえばこいつは、遊里のこと知らないんだっけ？

「遊里っていうのは弾と、さっきいった鈴ってやつにあってから知り合ったやつだよ。見かけによらず、人見知りでな？」

「目つきは鋭くて、少しチンピラみたいだが、ツンデレが入ってて、いいやつなんだよ。」

弾が俺の言葉に続ける。どうでもいいが、ツンデレなんていってら、遊里のやつに制裁くらうぞ？

「な、なんとというか、変わった人なんだな？」

ハッ！いかん、若干引かれてる。このままじゃ遊里のやつがただのツンデレと認識されてしまう！！親友としてなんとかしなくては！！

「す、すごいやつなんだぞ？頭もいいし、運動もできる。あと料理もうまいんだ。試験勉強もあいつに見てもらってな。」

「ああ、もの覚えわるいもんな一夏は。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

地味に傷つくぜ、ちくせう・・・・・・・・。

「そ、それより、遊里のやつだよ。あいつなら受験番号一ケタだと思っただが、呼ばれてなかったしなあ。」

そういえばそうだな。本当にどうしたんだろう？

《これから、受験番号1番の試験を行います。受験番号1番の受験

生は、試験会場に集合してください。》

会場にアナウンスの音が響く。しかし、

「おかしいな？試験は番号が若い順からのはずだが。」

弾のいうとおり、本当は受験番号1番から試験を始めるはずなんだが。そう思い、試験会場を見ると、

「お、おい。一夏。あれって遊里じゃねえか!？」

そう、そこには姿が見えなかった、俺と弾の親友である更識遊里がいた。

そのときの俺は気づかなかった。俺のファースト幼馴染である篠ノ之箒が、驚愕の表情を浮かべて、遊里を見ていたことに……

サイド・四度目の遊里

おいおい、アナウンスなんてするんじゃないやねえよ!? 目立っちゃまうじやねえか。(今更だなおいby作者)

「なにボーっとしてるノーネ?」

おっと、今は試験に集中しないと。

「すみません、少し緊張していたもので。」

とりあえず、無難なことをいって、ごまかそう。

「ふん。目つきが悪いわりには礼儀ができてるようなノーネ。」

……目つきは関係ないだろうが。

「ではいくノーネ。決闘盤の準備をしてください。」

とりあえず、デッキをせ

「あ。」

まずい。まずい、まずい、まずい、まずい。

「どつしたノーネ？」

「い、いやなんでもないです。」

なんでだ、なんで、このデッキ（……）になっただ。帝
デッキをセットしてたはずなのに。

（遊里はディスクにセットするデッキを間違えてしまった。）他の
デッキならいざ知らず、このデッキではよくも悪くも目立ってしま
う。

俺が心の中で焦っていると。

「まあ、怖気づいたなら、さっさとサレンダーすることなノーネ。
まあ、どうあがいてもあなたがこのエリートたるワタクシに勝てる
わけがないのですーガ？」

—————ぷちん—————

ほう。そこまでいうなら遠慮しないでいいよなあ。

「先生、一つ予言をしましょうか？」

「な、なんなノーネ？」

俺の様子にひるんだのか、声があらずっているみたいだが、どうでもいいな。

「このデュエル。1ターンで終わらせませます。」

「!?!?!」

「1ターンキル宣言だと!」「本気かしら?」「できるわけがない!」「あいつすげーな!」「そんなこと無理に決まってる!」「同感だ。」

会場がざわめいているが関係ねえ。こいつはつぶす。

「本気でいつてるノーネ？」

目の前でしろぬり野郎クロノスが顔を真っ赤にしている。

「安心してください。………全力でつぶしてあげます。」

「!?!いい度胸なノーネ。コテンパンにしてあげますーノ!!」

「やれるものなら?」

「決闘!!」

先攻はクロノス。

「ワターシのターン。ドロー!」

クロノス

ライフ：4000

手札：6枚

場：なし

どうでもいいが、あの決闘盤逆に使いづらくないか?

「私はトロイホースを通常召喚しますーノ!!」

《トロイホース》 †

効果モンスター

星4 / 地属性 / 獣族 / 攻1600 / 守1200

地属性モンスターを生け贄召喚する場合、

このモンスター1体で2体分の生け贄とする事ができる。

「ダブルコストモンスターか。」

「その通りナーノ。さらに二重召喚デュアルサモンを発動しますノーネ。これでワタシはこのターン。二回の通常召喚が行えますーノ!!!」

デュアルサモン
《二重召喚》

十

通常魔法

このターン自分は通常召喚を2回まで行う事ができる。

くる。クロノスのエースモンスター!!!

「そしてワタシは、トロイホースを生贄に、我が最強なる僕。古代の機械巨人を召喚しますーノ!!!」

アンティーク・ギアゴレム
《古代の機械巨人》

十

効果モンスター

星8 / 地属性 / 機械族 / 攻3000 / 守3000

このカードは特殊召喚できない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードが攻撃する場合、

相手はダメージステップ終了時まで魔法・罫カードを発動できない。

トロイホース
囿の木馬を生贄にささげて現れるのは、機械仕掛けの巨人。なるほど、こっつ見るとなかなか壮観だな。

「どうなノーネ？これが古代の機械巨人。エリートだけが持てる、伝説のレアカード。あなたのようなドロ、いいから早くしてくれませんか？」ぐっ、ワタシはカードを一枚伏せてターン終了なノーネ。」

クロノス

ライフ：4000

手札：2ま

場：古代の機械巨人

魔法、罠：伏せカード

（伏せカードは聖なるバリアミラーフォース。もし彼が攻撃してきても、帰りうちなノーネ！！）」

「声にでてますよ、先生。」

「なんですかーと!?!?」

間抜けだな結構。周りのやつらもクスクス笑ってるし。

「ふ、ふん！それでもこの状況なら、あなたにはなににもできないー。さっさとサレンダーしたほうが身のためですーノー!!!」

周りのやつらも、それに同感なのか。「終わったな。」「これは無理でしょう。」「大口叩いたわりにはたいしたことないな。」「などと、好き勝手いつている。そんなに大変な状況かね、これは。

「はあ。それじゃあ俺のターン。ドロー!!」

……ふう。決まったな。

「俺はまずサイクロンを発動。先生の伏せカードを破壊します!」

「なんですーと!?!」

サイクロンが、クロノスの伏せカードを破壊する。……ていうか、本当にミラフォだったんだ。あまりにもあからさまだから、クロノスが嘘ついてる可能性も考えてたのに。

「さらに俺は、E・HEROエアーマンを召喚する!!」

「E・HEROですーノ!?!」

《E・HEROエアーマン》

十

効果モンスター

星4 / 風属性 / 戦士族 / 攻1800 / 守 300

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、

次の効果から1つを選択して発動することができる。

自分フィールド上に存在するこのカード以外の

「HERO」と名のついたモンスターの数まで、

フィールド上に存在する魔法または罫カードを破壊することができる。

自分のデッキから「HERO」と名のついた

モンスター1体を手札に加える。

「エアーマンは効果を二つもっている。一つは自分フィールド上のこのカード以外のHEROの数まで、フィールド上の魔法・罫を破壊する効果。二つ目はデッキからHEROをサーチする効果。俺は二つ目の効果を発動。デッキからE・HEROオーシャンを手札に加える!!」

「そんな雑魚モンスターで何ができるといふノーネ!!」

おおっ、アニメでよく聞いたセリフだなあ。でもまあ、

「先生、それ、・・・フラグだぜ?」

「!?!」

「俺は魔法カード融合を発動!!手札のオーシャンとフォレストマ

ンを融合！E・HEROジ・アースを融合召喚する！！」

「なんですーと！？」

《E・HEROオーシャン》 十

効果モンスター

星4 / 水属性 / 戦士族 / 攻1500 / 守1200
1ターンに1度、自分のスタンバイフェイズ時に発動する事ができる。

自分フィールド上または自分の墓地に存在する

「HERO」と名のついたモンスター1体を選択し、持ち主の手札に戻す。

《E・HEROフォレストマン》 十

効果モンスター

星4 / 地属性 / 戦士族 / 攻1000 / 守2000
1ターンに1度、自分のスタンバイフェイズ時に発動する事ができる。

自分のデッキまたは墓地に存在する「融合」魔法カード1枚を手札に加える。

《融合》 十

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた

融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

《E・HEROジ・アース》 十

融合・効果モンスター

星8/地属性/戦士族/攻2500/守2000

「E・HERO オーシャン」+「E・HERO フォレストマン」

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

自分フィールド上に表側表示で存在する「E・HERO」と名のついた

モンスター1体をリリースする事で、このカードの攻撃力は

このターンのエンドフェイズ時まで、リリースしたモンスターの
攻撃力分アップする。

大地と海を司る二体のHEROが融合し、地球を象徴するHERO
舞い降りる！！

「これが、俺のフェイバリットカードだ！」

すると会場がざわめきだす。そう、これが、俺がこのデッキを使わ
なかった理由。このジ・アースのカードは目立ってしまうのだ。な
ぜなら、

「な、なんであなたが、『プラネットシリーズ』を持っているーノ
!?!」

そう、漫画版でエド・フェニックスの父親である、カードデザイナーナ

「フエニックスがデザインしたカード群。その設定がどうやらこの世界にもあるみたいで、俺が元々持っていたアースも、その内の一枚ということになってしまったようだからである。（前にタバネに「大会で優勝したときに、手に入れたっていう設定にしといたから〜!〜!」といわれた）

ちなみにD・HEROはどこを探しても存在してなかった。どうやらこちらは完全に公表してなかったみたいだ。

「し、しかし、いくらプラネットシリーズの一枚でも、古代の機械巨人には勝てない〜!〜!」

確かに今のアースの攻撃力は2500。機械巨人の攻撃力には届かない。しかし、

「それはどうかな?」

「なんですと!?!」

「俺はジ・アースのモンスター効果を発動。フィールド上のE・HEROを生贄に捧げることにより、そのこのカードの攻撃力を、生贄に捧げたモンスターの攻撃力分アップする!〜!」ジ・アースマグマ「!〜!」

「な、なんですと〜!〜!〜!?!」

ジ・アース

攻撃力2500 攻撃力4300

アースの体が、真つ赤に変色する。

「し、しかし、そのモンスターだけでは、このターンで終わらせることはで「俺は魔法カードを発動!!」聞くのーネ!!」

白塗りがなんかいつてるが、無視する。

「装備魔法、アサルトアーマーを発動!!このカードは戦士族のみ装備可能!アースに装備!攻撃力300ポイントアップ!!」

《アサルト・アーマー》 十

装備魔法

自分フィールド上に存在するモンスターが

戦士族モンスター1体の場合、そのモンスターに装備する事ができる。

装備モンスターの攻撃力は300ポイントアップする。

装備されているこのカードを墓地へ送る事で、このターン装備モンスターは

1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる。

「しかし、その程度の攻撃力アップでは。」

「誰が攻撃力アップが目的といった？」

「!?!」

「俺はアサルトアーマーを墓地に送る。そうすることで装備モンスターはこのターン2回攻撃が可能となる!!」

「な、なんですと!!?!?わ、このワタシが二度も生徒なんかに・・」

おお、おお、顔が白から青に変わってってるなあ。ま、手加減はしねえが。

「いくぞ、アース!!」

(御意!!)

「まずはアースで攻撃。地球溶岩斬・双!!」

アース・マグマ・スラッシュ・ダブル

(我が魂の攻撃、その体に刻んでやる!ハあああああああ!!)

アースの攻撃の一撃目が、機械巨人を破壊し、二撃目がクロノスを襲う。

「マンマミーヤ――――ヤ――――」

クロノス

ライフ：4000 2700 - 1300 (オーバーキル)

「ミッションコンプリート任務完了・・・てか？」

やっぱり決めゼリフはやめといたほうがいいかなあ。ちとはずい。でもまあ、とりあえず、

「宣言1k111だと!？」「すごい!!」「なんだあいつ!」「すっげー!!すっげーよ!!」「本当に勝っちゃったツス!？」「なんとまあ・・・」

やっちまった・・・

サイド：????

見つけた。

見つけた、見つけた、見つけた

見つけた、見つけた、見つけた、見つけた！！

転生してから、十六年。あの人にアカデミアに入ったら会えると聞いて、必死に受験勉強してよかった。

やっと、やっと、会えた！！しかもその人が、

「どうした、体調悪いのか？」

幼馴染の親友なのは、天啓を感じる。まあ、この場合はあの人がなにかしたと考えるべきだろう。じゃなきゃ、こんなに都合よくはいかないだろう。……今度あったらお礼をいっておこう。

「い、いや、すごいなあの人。」

すると一夏が満面の笑みで胸を張る。

「あつたりまえだろう！俺の親友だからな？」

「いや、お前が自慢することじゃないだろ？」

ワタシも弾に同意見だ。（名前で呼んでくれというわれたのでそう

している)

「それより、勝者を迎えに行こうぜ。一夏もいくだろ?」

「おう!ほう!行く!」お、おおつ……。」

い、いかん、つい大声を。すると

「へえ。」

弾がニヤニヤしていた。

「な、なんだ?」

「いやあ、あいつも罪づくりな男だなあと。」

「なツノノノ!?!?」

な、なにをいつている!?!?

「わ、わたしはだなあ。」

「一夏いこうぜ?」

「お、おう。いくぞ、幕……。」

そういつて二人は彼の、私を助けてくれたお兄さん、(この場合は

元がつくのか?)のところへ向かっていった。しかし、

「かつこよかったなあ……………」

転生者にして、ファースト幼馴染。篠ノ之箒が登場した。彼女はこの物語でどう動くのか。それは……………作者も知らない
(おい!)

GX世界のどこかの無人島。無人のはずの島に、彼女たちはいた。

「ボス！プラネットシリーズの反応を見つけました！！」

「そう。場所は？」

ボスと呼ばれた女が問いかける。暗くて顔が見えない。

「場所は海馬ドーム、デュエルアカデミア試験会場。カードは、ジ・ジ・アース、ジ・アースのカードです！！？」

「!？」

周りの人間がざわめく。それもそうだ。他のカードは最悪、所持者の特定までできているのに、それすらわからず、存在しないといわれたほどのカードが見つかったのだから！！

「ふ、ふふ、フはハハははハハ、アーハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！！」

ボスと呼ばれた女が突然笑い出す。彼女の闇の中でもわかる、艶のある髪が、笑いとともに揺れる。

「ボ、ボス!？」

「まさかいままで所持者すらわかってなかったカードがそんなところにあったなんてねえ。ついてるのかしら？」

「ボス。」

暗闇から新しい女の声が聞こえた。こちらも暗闇なので顔は見えないが、氷のように冷たい声から、すくなくとも、友好的な人物ではないだろう。

「奪いますか。」

その声にボスと呼ばれた女は考え込む。確かに、彼女たちの目的はあのカードたちが必要だ。しかし、

「やめておきましょう。場所がわかったんだもの。奪うのはいつでもできるわ。」

「しかし・・・」

「それに、アカデミアには、あなたの大好きな戦乙女がいる。」

その声に、女は固まる。どうやら彼女は戦乙女織斑千冬フリユンヒルテに因縁があ

るようだ。

「いま彼女に私たちを感じられるのはまずい。奪うにしても下準備をしつかりしないと。そう思わない、M」

Mと呼ばれた女はそれで引き下がった。それを満足そうに見ていた。

(そう。わざわざ危険な橋を渡る必要はない。私たちの目的のためには、確実にプラネットシリーズを手に入れないといけないのだから。そう私たち、)

ファントム・タスク
亡国企業の目的のためには……………

G Xの世界《この世界》にはいるはずのない存在イレギュラー。亡国
企業現る！！

原作にない彼女たちに、主人公はどう対するのか。運命の賽は投げ
られた……………

第一話 とうとう原作開始！！主人公は結局テンプレ的展開になるのが二次小説

アンケートです。お気に入り1000人越えを記念して、特別編を書こうと思うのですが、どれがいいでしょうか？

1・遊戯王無印

2・遊戯王五頭竜

3・マジ恋

4・中学文化祭

5・千冬デレww

この中から選んでください。期限は土曜深夜までとします。

ちなみにひとつも来ない場合は、作者が適当に決めるのであしからず。

閉話　オリ主のことを知っていた皇帝さん（前書き）

サブタイトルの感じを変えてみました。

閉話 オリ主のことを知っていた皇帝さん

デュエルアカデミア試験会場

デュエルアカデミアの実技担当最高責任者、クロノス・デ・メデイチの二度目の敗北（しかも二回目は１k i e e l）。そしてプラネットシリーズの出現により会場は騒然としていた。

サイド：カイザー亮

ざわ ざわ ざわわ ざゝわわゝ ざゝわわゝ ざゝわわゝ

受験番号1番、更識遊里。彼のデュエルで会場がざわめいている。

（ざわめき方が変だった気がするが）

まあ無理もないだろう。

彼の相手をした、アカデミアの実技最高責任者のクロノス教諭は、オベリスクブルーノ最頂のため、オベリスクブルー（一部除く）以外のアカデミア生徒には、あまり人望がないが、それでも実技担当の名に恥じない実力を持っている。

俺の師匠である鮫島校長、いや、『マスター鮫島』と、実技特別顧問の伝説の決闘者の一人でもある、『戦乙女』ブリュンヒルデと呼ばれる、織斑教諭の二人を除いたら、アカデミア最強の教師といったもいいだろう。

つまり、生半可の実力ではないということだ。

そのクロノス教諭を前に、彼は、何を思ったのか、1ターンで倒すと宣言した。（その前に、彼はクロノス教諭と何か話していたようなので、それが関係しているのかもしれない）

1ターンキルというのは、狙ってできるものではなく、まして、相手が相手だ。

会場の誰もが、無謀な挑戦だと感じたのだろう。会場に困惑が広がった。

嘲笑も交じっていたが、彼はそれをやり遂げた。まさに圧倒的だったといってもいいだろう。（それをやり遂げた彼は、なぜか浮かない顔をしていたが）

そして、彼が使用したカード。あれは、

「まさかプラネットシリーズをこんなところで見れるとはね。」

「来ていたのか、明日香。」

こちらに歩いてきた女性は『てんじょういん あすか天上院明日香』。

俺の親友である『キング』と呼ばれる決闘者、『てんじょういん ふぶき天上院吹雪』の妹で、（吹雪は現在行方不明になっているが）彼女自身、『アカデミ

『アの女王』と呼ばれるほどの決闘者でもある。

「暇つぶしに来てみたんだけどね。来てよかったわ。まさか、プラネットシリーズなんてものが見られるなんてね。」

「確かにな。しかも唯一所在者不明だった、『アース』のカードがでてくるとはな。」

『プラネットシリーズ』

デュエルモンスターの創造主である『ペガサス・J・クロフォード』。

彼の一番弟子である、カードデザイナー、『フェニックス氏』がこの世から去る前に残したカード群であり、そのカードの所持者たちは、誰もが、超一流の決闘者ばかり。

プラネットシリーズは、星をモチーフにしたカードであり、所持者はほとんどが判明しているが、地球を象徴する『アース』のカードだけが見つからず、「元々存在していないのではないか」「紛失して、もうこの世には存在していないのではないか」ともいわれたいが、まさかこの目で見る事ができるとわな。

「しかし、何者なのかしら彼は。アースのカードを持っているのもそうだけど、クロノス先生を1ターンで倒す腕前なんて。」

ああ、そういえば明日香は知らないんだな。

「彼は更識家の人間だ。」

「!?なるほど。ならあの腕前も納得できるはね。」

どうやら、納得したようだ。彼の実家の更識家は数多くの決闘者を輩出した名門で、俺と鮫島校長はその更識家の当主である彼女に敗れている。

「ちなみに彼がアースを持っているのは、とある非公式の大会にて、優勝したときに手に入れたと聞いている。」

「非公式の大会?」

「詳しくは知らないが、企業間での間で企画されたものらしく、彼は更識家の代表としてでたらしいな。アースはその大会の商品としてだされていたらしいな。」

明日香はまだ納得しきれていないようだった。まあそれもそうだろう。

アースは企業どころか、国が探しても見つからなかった、それほどレアカードなのだ。ただの企業が用意できるカードではない。そう、ただの企業では。

少し考え込んでいた明日香だが、「そういえば」と俺のほうに顔を向けた。なんだろう。

「そういえば亮、彼と知り合い？随分詳しいけど。」

ん？まあ不思議に思うのも無理はないか。まあ、俺が一方的に彼のことを知っているだけなんだがな。

「彼というより、彼の姉と知り合いでな？」

「姉？」

「更識楯無。『女神』ゴッデスといったほうがいいか。」

「！？女神って、あのプロデュエリストの！？」

「ああ。ちなみに楯無さんは彼の姉だ。」

「え、ええ！！？」

おお、驚いてるな。まあただの受験生が、今絶好調のプロデュエリストの弟だなんて驚くよな。

俺は彼女のことを思い出す。

あのときの俺は今思えば天狗になっていたのかもしれない。

鮫島校長にサイバー流免許皆伝の証、『サイバー・エンドドラゴン』を譲り受け、俺に勝てる決闘者は鮫島校長以外にはアカデミアには存在せず、その鮫島校長にも勝ち越せるようになっていた。

アカデミアで俺と戦う決闘者は最初から俺に勝とうと決闘者はほとんどいなく、いたとしても、実力が伴わないものばかり。

リスペクトデュエルといえば聞こえはいいが、手加減するデュエルを覚えてしまった。

そんなときに現れたのが、彼女。更識楯無だった。

彼女は鮫島校長が連れてきた決闘者で、あの『更識家』の若き当主でもあるという。校長を打ち破るほどの決闘者とも。

俺はせいぜい楽しめればいいと思っていたのだが、完膚なきまでに叩きのめされた。

衝撃だった。ほとんど負けたことがなかったから。しかし、彼女との決闘はどこか楽しかった。いままで溜まっていたものが、発散されていくのを感じた。

俺は彼女に聞いてみた。なぜそこまでの強いのかと。

『私が強いというのなら、それは私がデュエルを心の底から楽しんでいるからよ。』

『デュエルを・・・心の底から？』

『そ！あなた、最近、全力全開でデュエルをしたことないでしょう？』

『！？なぜ・・・。』

『ふふ、顔を見ればわかるわ。それは今の自分の状況に満足できてない目。そうでしょ？』

『・・・・・・・・はい。』

俺は気づいたら、全て話していた。この人なら、全てを話してもいいと、なぜかそう思っていた。

俺の話しを聞いた彼女はしばらく考え込んでいたが、なにか閃いた顔をして、こつちを見てきた。

『ライバルを作りなさい！！』

『ラ、ライバルですか？』

『そうよ、ライバルは宿敵ともいうわ。お互い切磋琢磨できるほ

どの相手を見つければ、自然と自分の実力も上がっていくもの。』
なるほど。ん？ということとは、

『楯無さんにもライバルがいるということですか？』

それに楯無さんは優しい笑みを浮かべた。……すこしドキッとしたのは秘密だ。

『私の場合は何人かいるけど、一番のライバルは弟かしら？』

『弟……ですか？』

正直信じられなかったが、嘘ではないだろう。まだ会ったばかりだが、デュエルのことについて嘘をつくような人でないのはわかる。

『そ！おねえさんの弟は強いわよ！あの戦乙女にも勝ったことがあるんだから！』

『本当ですか！？』

『戦乙女』織斑千冬。伝説の決闘者にして、最強のプロ決闘者の一人に数えられている女傑だ。まさかその戦乙女に勝ったことがあるなんて……

『ふふ……。さすがに信じられないみたいね？』

『まあ……。それは。』

いくら楯無さんのいったことでも、この目で見ないことには……。そんな俺に、楯無さんは『弟魂』と書かれた扇子で口元を隠しながらいった。……。どうでもいいが、あの扇子はどこからだしたんだ？

『ならば試してみたらいいじゃない？』

『は？』

『近いうちに私の弟がアカデミアに入学するの。そのときに決闘してみなさい。きっとあなたは満足できると思うわ。でもね？』

急に楯無さんは笑みを消して、真剣な顔になる。

『油断だけはしないほうが、いいわ。でないとあなた。』

負けるわよ？

あのときは、正直、少なからず、楯無さんの身内贖身が入っているのではないかと思ったが、今回の決闘で確信した。楯無遊里。彼は間違いなく、

自分が求める宿敵ライバルになりつると・・・

このとき、皇帝の称号を持つ青年は、己に匹敵しうる存在を見つけ
て歓喜にいつまわっていた・・・

閉話　オリ主のことを知っていた皇帝さん（後書き）

なんか、わけわかんない感じになってしまった。とりあえず、皇帝とオリ主の決闘フラグを立ててみた。

ちなみにこのアースを手に入れた大会とは、実際にあつたわけではなく、タバネの力であつたとされている大会で、アースを用意したのはペガサスさんという設定になっています。（タバネの力で、ペガサスも実際にあつた出来事として記憶している。

次もまだアカデミアにはいけません。すみません。

お気に入り100件突破記念番外編 「戦乙女は語る」(前書き)

100件突破記念とかいって、すでにお気に入りか120件超えてるのは気にしないでください。

今回は千冬回……うまく書けるだろうか……

お気に入り100件突破記念番外編 「戦乙女は語る」

サイド：織斑千冬

………始めまして、諸君。私の名前は織斑千冬。一応はプロ決闘者だが、現在は恩人である鮫島校長の頼みで、アカデミアで教職に就いている。

………誰だ、今私のことを戦乙女と呼んだやつは。………
やめてくれ、ただでさえ、ファン《バカども》にそう呼ばれて辟易としているのだ。君たちは呼ばないでくれると助かる。………わかったな？約束だぞ？

さて、最近私はある人物について悩んでいる。

『更識 遊里』

私が彼とであったのは六年前になる。

それは私のスポンサーである更識南さんからの依頼が会いのきっかけだった。その依頼は『自らの息子に稽古をつけてほしい』というものだった

なんでも一夏と同一年の子供なのだが、すでに高い戦闘力を持っており、更識家の人間では、数名を除けば相手にならないほどだとい

恩人である、南さんの頼みだったし、一夏と同一年で、南さんにそこまでいわせる少年に興味をもったので、二つ返事で請け負った。

実際にあつたやつは結構礼儀ただし少年だった。……目つきは悪かったが。

試しに試合をしてみたが、予想外の強さだった。私は自分の剣の腕前は世界一だと自負しているが、まさかその私から一本とるとは……面白いじゃないか……。

思えばこのときからなのかもしれない。その……私が……遊里を好きになったのわ／＼／＼／＼。

思えば私に勝てる男などほとんどいなかった。剣道でも……決闘でも……

だが、あいつは、更識遊里は剣道でも、決闘でも私と互角に戦った。そして……

(あの顔は反則だろう／＼／＼)

普段はクールなやつは、決闘のときだけ、本当に、本当に楽しそうな顔をするのだ。それで私はやられてしまったんだな。

私と対等になれる初めての男。 更識遊里。

そんなやつがデュエルアカデミアにやってくる。

やつからアカデミアを受験すると聞いたときは、本当に嬉しくて、思わず「本当か!？」と聞き返してしまったものだ。・・・今思うと、恥ずかしい／＼／＼／＼。

しかし、冷静になってみると、困ってしまった。

あいつをどうすれば手に入れることができるのか。

あいつは正直いえば、もてる。弟の一夏には及ばないが、それに追随するほどだ。．．．．．まあ本人が鈍感すぎて気づかないが．．．（本人は一夏のことを鈍感だといっているが、あいつも人のことといえないと思う）

目つきが悪いが整った顔立ち。鍛え抜かれた体。頭も良いし、料理もできる（実際うまかった）。そして決闘の腕もある。．．．．．さりげなく完璧超人だな。

アカデミアでも、あいつに目をつけるものは多いだろう。な、なにせ、私が惚れたくらいだからな／／／／／。

．．．．．とりあえず、一夏に、遊里に余計な女を近づけないよ
ういっておくか．．．

戦乙女は知らない。すでに良くも悪くも、彼に目をつけ始めた人間
がいることを．．．．．

戦乙女は転生者を手に入れることができるのか。その答えは、まだ、誰も知らない……

お気に入り100件突破記念番外編 「戦乙女は語る」 (後書き)

なんかまた変な感じになってしまった。

次回、すいません。本編ですが、まだ試験会場です。

サムライ娘が、転生者に接触します。決闘もあるよ？たぶん。

第二話 この子は？え！この子ってあのときの！？（前書き）

あらすじ

試験で白塗りを1k i e e したら、目立つちまったぜ

孝さん、ご指摘ありがとうございます。これからもご指摘、感想などがあつたら、お願いします。

第二話 この子は？え！この子ってあのときの！？

サイド：遊里

やあ、よい子も普通な子もこんにちわ。悪い子はどっかいけ。久方ぶりの遊里様だぜ！い、いた、痛いから石投げんな。す、すんません調子こいてました……！！！！？！

「どうしたんです？変な顔して？」

おっと、どうやら顔にでてたらしいな、気をつけなくては。

あゝ、しかしあれだな。…しくじった…

ヒーローつかうにしてもアースださなければ目立たないです、いや無理か…

あのくらげ《十代》と同じシリーズのデッキだもんな。

実技最高責任者（笑）に勝ったやつと同じなんていやでも目立つし…

「そう、思わないか？」

「いや、なにがですか！？」ふむ、なかなかの突っ込み。こいつあ、大物になるぜえ。（戦慄

閑話休題

「久しぶり…でいいのか？」

「はあ、お久しぶりです…（なんだろ、なんか疲れた気がする。」
なんか疲労してるなあ。だめだぞ休めるときに休まなきゃ。「でも、まさか、君があの子の子どもだったとわね。」

「どういうことですか？」

「あゝこつちの話。」

「？」

あゝ、誰と話してるのかいい加減教えろって？

いや、俺が死ぬときかばった女の子覚えてるか？

知らない？知らないならこの小説を最初から読め、俺は知らん。…
小説ってなんだ、というか、俺はだれに喋ってた？…まあいいか。
で、そのときの子どもと喋ってたよ。

は？その子は死んだはず？

だから最初から読めっての。タバネのやつが俺と同じ世界に本人の希望で転生させたっていつてただろ。その子だよ。

…しかしまさかあの子の女の子が、

「それじゃあ、これがよろしくな、じょう、いや、…篠ノ

之箒さん？」

「はい！！」

あの、篠ノ之箒とはなあ。

篠ノ之箒^{しのののひら}

IS原作では、主人公、織斑一夏のファースト幼馴染。そしてヒロインその一の武士娘。一夏がフラグを立てるたびに刀を振り回す、ヤンデレ入っているツンデレ娘。

今はこの子と試験会場の廊下にいる。

なぜかというと、

俺、試験終わり、一夏、弾を見つける。

二人の元へ歩いていく。

おや？知らない顔がいるな？

紹介される。「ふうん、（これがファーストか）ん？どっかで見たな？」

俺「どつかで会ったことあるか？」 篝「!？」

篝耳打ち「前世であなたにかばってもらった子供です。」

篝「とりあえず、二人だけで話しましょう。」 俺拉致られる。

みたいな感じで、篝さんに、連れてこられたからだ。・・・ていうか、去り際の弾のニヤニヤ笑いがやけに気になったんだが。・・・
・ ・ 変な誤解されてんじゃねえか？

・ ・ ・ ・ ・ っかし、なんであの女の子がファーストな武士娘に
?もしかして転生じゃなくて、憑依ってやつか？

(その疑問には私が答えるよお〜!!)

「!?!」

こゝこの声は!!!

篝のほうを見ると、どうやら彼女も聞こえたようだ!すると・・・
・ ・

————ピカア————

「!?!」

俺たちがいる廊下の隅が光り出した!というか、この登場の仕方は、
前と同じ・・・

「うひゃあ／＼／＼!?」

「どづ!・・・し・・・た?」

箒の叫び声?に急いで箒のほうを見ると、そこには・・・

「へへへ、箒ちゃん。」

うさみみをつけた　へん・た・い　がいた。

具体的にいうと、

「しばらく見ないうちに、また大きくなったみたいだね。」

「ちょ、や、やめてください!?!」

箒がタバネに胸を揉まれていた・・・

「はあ。」

とりあえず、箒を救出するか。タバネにも制裁を加えないとな。・・・
・・・と、ちょっと、得したと思ったのは内緒だ。



はあ、酷い目にあつたな。まったく、あの人は会つたびに人にセクハラばかりして。し、しかも、今回はやっと会えたお兄さんの前で
／／／／／！

「（チラ）」

するどい目つきに、闇のように、黒い髪。服の上からでは分かりにくい
が、武道をやっている者にはわかる、引き締まった肉体……
・ああ、やっぱりかっこいいなあ（箒ちゃんの主人公を見る目は、
恋愛補正がかかっています。）

ん？ああ、すまない、自己紹介がまだだつたな？私の名前は篠ノ之^{ノノ}
箒^{ほし}。俗にいう転生者という。

前世で子供のころにアパートの家事に巻き込まれてしまって、死んで
しまったのだ。

そのとき、彼が、現れた。不動遊里、いや、今は更識遊里って
いうんだっけ。

焔に包まれ、熱くて、心細かった私には、彼が、その、白馬の王子
様のように見えただ／／／／。

そんなお兄さんの傍に行きたくて、姉さん（タバネという神様にそ
ういえといわれた）に頼んで、お兄さんと同じ世界に転生させても
らったんだった。

そんな彼は今、

「いた、いた、痛い、痛いよ、ゆっくん！？タバネさんの頭潰れちゃうよお——————————————！！？」

「ハツハツハツ！！大丈夫、俺はお前を信じてるから……。いつそ、潰れちまえばいんだ（ぼそ）」

「い、今本音でたよね？っていうか、前から思ってただけど、タバネさんの扱いひどく「だ・ま・れ」「みぎや——————————————！！！！！！？」

タバネさんにアイアンクローをかましていた。一応姉さんは神様だったはずだけど、そんな姉さんにアイアンクローをかましているお兄さんっていったい……。

「ええねー……ん……!?」

「あ、や。へ。」

「ひ……」

きく

第二話 この子は？え！この子ってあのときの！？（後書き）

久方ぶりのラドウです。

サボった割にはすこし短いかもしれなかったですね。すみませんでした。

これから、また頑張るので、よろしくおねがいします！！

第三話 久々ですな皆様。しばらくほっておくとやり方を忘れてしまつことッ

前回のあらすじ

や せい の タ バ ネ が あ ら わ れ た

すいません。ゼミ関係でいろいろあつて、遅れました。感想くれた
方々はありがとございます。大変励みになりました。

第三話 久々ですな皆様。しばらくほっておくとやり方を忘れてしまつことッ

サイド：遊里

「まったくも〜。ゆつくんたら酷いよ！タバネさんの天才的な頭脳がつぶれるところだったじゃないか〜。」

そんな戯れ言をのたまつうさみみ。

涙目でこちらをみてくるがシカトする。

「いや、なんで五体満足何だよお前。」

自分でやつといてなんだが、あの手応えと音なら、無事じゃあすまないはずなんだが。

箒も同じ思いなのか、俺の疑問に同感とばかりに、首を縦にコクコクとふっている。

「タバネさんのうさみみパワーにかかれば、あれくらいちよちよちよいのちよいなさあ!」

ふ〜ん。……………

「じゃあしょうがねえな。」

「いやいやいや!？なんで納得しちゃうんですか!？」

どうやら箒は納得がいかないらしい。まあ気持ちはわからなくもない。俺もこいつとのつきあいはそれなりに長くなってるが、いまだ

に「うさみみパワー」とやらのことはまったく理解できないのだから。

でもな…よく考えてみる？

「あんま、こいつにつっこむのは疲れる。」

「やだゆっくん。突っ込むなんてえっちなあ。でもゆっくんなら
「あん？」ナンテモナイカラコノテヲハナシテクダサイ。」

「な？」

「…そうですね。」

納得してくれてなによりだ。

「まあ、ちょちょいのちょいとか、こいつのセンスが何気に低いのは置いとくとして。」

「ひどくない!？」

うるさい。事実だろうに。

「で、なんで来たんだお前。」

こんなやつでも神様だ。ただ遊びにきたというわけじゃあないだろ…こいつならありえそうだな…「それはもう、愛しのゆっくんとむすばれに「ネエサン?」や、やだなあ箒ちゃん、ちょっとしたタバネさんジョークじゃないかあ。」

………なんか箒さんが怖いんですが。なにを怒ってんだあい

つは。………ん？

「ちょっといいか譲ちゃん？」

「あ、はい。それと私のことは尊と呼んでください。」

それは……

「いいのか？俺はお前さんとは前世も合わせて会うのは2回目なんだが。」

すると尊は呆れたような目つきで、

「譲ちゃんと呼ばれるよりはいいです。私ももう16歳ですし。」
といつてきた。

そういや、今は同い年なんだっけ。そりゃあ嫌だよな。

「それに、個人的にあなたには呼んでもらいたいですし。（ぼそっ

「ん？なんかいったか？」

「な、なんでもないです／＼／＼／＼！！」

「？」

おかしいなあ。なんか聞こえた気がしたんだが。気のせいかな。

「じゃあ、俺のことも遊里でいいぜ。」

「わかりました、遊里さん！」

.....

「ちょいまで、篝。」

「はい？」

篝は首を傾げてこちらを見る。それに少し萌えてしまったが、それよりもいわなきゃならないことがある。

「さつきから思ってたんだが、なんで敬語なんだ？」

「あ、いやこれはその.....。い、いえない。緊張してうまく話せないなんて。」

なんか、顔が赤くなっているようだが.....風邪か？

「説明しよう！！主人公の固有スキル『風邪か？』。これは、他人が赤面している理由を全て「風邪か？」ですませてしまっ、恐るべきスキルである。.....リア充死ね（by作者）」

ん？なにか不快な電波を感じたんだが。まあいいか。

「まあ、もう同じ年なんだから、敬語はやめようぜ。」

「え、でも」

「な？」

「しかし」

「な？」

「それ「な？」わかりまし、いやわかった。」

勝ったっ!!!.....なににだよ。.....ま、いいか。
それより、

「じゃああらためて、よろしくな箒。」

「あ、ああ!!!」

俺と箒は握手を交わす。なにか、箒の顔が赤くなってるが気にしない。小声で、「お、おっきい・・・」とか、「思ったより遅いな」とか、「もう、手は洗わないどころかな。」とか聞こえてきたが気にしない。∴手は洗えよ？

まあ、話しが大分それだが、

「で、聞きたいことがあるんだが。」

「なんだ？」

「なんでタバネのことをねーさんと呼んでるんだ？」

そう、確かに『IS』原作では篤とタバネは姉妹だったが、この篤は、平行世界の篤。つまりタバネとはまったくの別人のはず。

「それは・・・」

「それはタバネさんが説明するよ!!」

や せい の う さ み み が あ ら わ れ た ! . . .
いや冗談はともかく、

「いたんだ、タバネ。」

「最初からいたじゃん!？」

すまん、あまりに空気だから忘れてた。

「で、どういうことなんだ。」

「えとね？篤ちゃんには、私がいた世界。つまり『IS』原作のことを話したのか。だから、タバネさんのことはおねいちゃんと呼んでたのんだよ。」

・・・ふん。って、

「いいのかそれ、仮にも別の世界の人間に神様がそんな情報流すなんて。」

「いんじゃない？なにせ君たちの前世と原作世界、そしてこの世界はタバネさんの管轄だから、だれも文句いわないしね。」

「わたしも最初は驚いたぞ。まさか自分が創作物の中の登場人物だとはな。」

「・・・まあ、箒もなんとも思っていないみたいだから別にいいけど、適當すぎないか？それでいいのか神様よ。」

「それで、お前さんが来た用事はそれだけなのか？」

「・・・実はもう一つあるんだ。」

急にタバネが真剣な顔で話した。こいつがこんな顔をするなんて、いったい？

箒もいぶかしげにタバネを見ている。

そんな俺たちにかまわず、タバネは話します。

「ゆっくんにはいったと思うけど、この世界にバグが発生したということは話したよね。」

ああ、そういえばそんな話もしたなあ。

「前にいってなかったかもしれないけど、バグっていうのは、『意思のない力』の塊。だから、この『GX』の世界の未来も変わる可能性があるっていったよね。」

「ああ、いったな。」

「実はそのバグが意思をもっちゃったようなんだ。」

「意思？」

「うん。意思をもったバグは確実にこの世界の未来を変えようと、『原作』に干渉してこの世界の物語を破滅へと導こうとしてしまっ

」

「!？」

おいおい、急に話しが大きくなってきたな。

篝のほうをみると、彼女も大分困惑しているようだ。

当然だろう。急に世界の破滅なんてことを話されたのだから。タバネは話しをつづける。

「そして、この世界に本来あるはずのないバグ《イレギュラー》は同じイレギュラーである転生者イレギュラーに惹かれあう。」

「それって・・・。」

「そう君らのことだよ、ゆっくん、篝ちゃん。」

なん・・・だと？

「ごめんね。本来なら私がなんとかしなきゃいけないんだけど。バグが発生した原因もわからないし、神様は直接的には干渉できないんだ。だから、君らに何とかしてもらわなければならぬ。」

タバネがつらそうに、血を吐くように話す。……まったく、本当ならこんな面倒事を持ってきたことに文句の一つもいいたいのに、そんな顔されちゃあ、なにもいえねえじゃねえか。

まったくこんな俺じゃなくて一夏あたりの役目なんだがなあ。

俺はタバネの頭の上に手をのせる。

「ふえ？」

おいおい、酷い顔だなおい。俺はタバネの頭をなでる。

「気にすんな。」

「え？」

「気にすんなっていつてんだ。お前がやりたくてやったわけじゃねんだろ。だったらお前が謝ることじゃねえ。むしろ、そういう存在があるってことを知らせてくれただけでも例をいわなきゃな。」

「そうですよ姉さん。」

篝のほうを見るとやさしい顔で同意してくる。

「だからまあ、そんな細かいこと気にすんなってことだよ。」

するとタバネはいつものふざけたような笑顔ではなく、心の底から満面の笑みを浮かべた。

「二人とも・・・ありがとう。」

その笑顔に少し見惚れていたら、箒に足を踏まれた。・・・なんでさ。

第三話 久々ですな皆様。しばらくほっておくとやり方を忘れてしまっことっ

今回はいつになく駄文な気が。・・・明日からがんばる!! (ダメ人間)

次回はついにGX原作主人公が登場! 主人公は平穏な生活を送れるのか! (笑)

ではまた次回! ラドウでした!!

特別話 はっぴ〜にゅ〜いや〜!?(前書き)

なんとなく書いてみた。ああ、あと、千冬、筭の他にヒロインになる予定の人が、一人くるので、ネタばれが嫌な人はコーナーよろしくです。

次村陣八さんは感想ありがとうございます。すみません、本編前に特別話で。次こそは十代との絡みを……!

ちなみに、時期はアカデミアに入ってからハロウィンということ
で。(本編ではまだです)

特別話 はっぴーにゅーいやー!?

突然だが、秋といえば皆さんはなにを思い浮かぶだろうか。

読書の秋？ 食欲の秋？

いろいろあるだろう。

しかし、秋にはそれより、大切なイベントがある。

飢えた子供^{こども}たちが、お菓子^{お菓子の}を狙^{ねら}って、さまよう。そう、

『ハロウィン』である!!

サイド：遊里

「とうとうここで、お菓子をくれなきゃいたずらするぞー!!」

「帰れあほこやぎ。」

「冷たい!？」

当たり前だ。こちとらしい気持ちで惰眠をむさぼってたのに、突然

現れたお前にボディプレスをくらったんだからな。中身がでるかと思っただぞ。

・・・・・・・・柔らかくて少し気持ちよかったなんて思ってないぞ。
・・・・・・・・そんな目で見んなっ!!

「どつたのゆっくん？」

「なんでもねえよ。」

ああ、なんでもないんだ。本当に。

「ところでなんでここにいんだよ、お前。」

「うん？・・・・・・・・なんだっけ？」

「おい！」

なんで忘れて「思い出した!!」「地の文を遮るな!!」

がし!!

ぎりぎりぎり!!

「のおおおお！！？ゆ、ゆっくん！？タバネさん、いくらなんでもそれは理不尽だとおも、いった、いたいいいいい！！？！」

うるさい！

閑話休題

「で、何で来たんだ？」

「なにして、今日はハロウィンなんだよ？」

……ふうん。

「で？」

「で、お菓子くれなきゃいたずらするぞっ？」

「……寝るわ。」

俺はベッドに再びもぐりこむ。まったくなにかあったのかと思ったらそんなことかよ。

「ねえねえ、お菓子は？」

タバネが俺の体を揺する。ええい、鬱陶しい。

「用意してねえよ、そんなもん。俺は寝るからな。お休み。」

まったく、こちらら昨日は徹夜だったんだ。休みくらいゆっくり寝させろってんだ。

後ろでタバネがなにかいつてる気がしたが、気にしない。おやすみなさい。zzzzzzzzzz

サイド：タバネ

寝ちゃった。

ふん、そうなんだ。ゆっくりそういう態度とっちゃうんだあ。

「これはおしおきかな」

なうんで、本当はそのためにきたんだけどね？

ゆっくんの性格からいってお菓子を用意してないのはわかってたからね。

しょうがないよね。悪戯さらちやうのはお菓子をくれないゆっくんが悪いんだよ。

それじゃあ、さっそく、

ひっさつ！

「うさみみパウワ - ! !」

そうして、遊里の部屋は光につつまれた。

サイド：遊里

……ん？もう朝か？

「ふああ〜。」

俺は体を思いつきり、伸ばす。

ぼき〜き。

体が鳴る音がするが、それが心地いい。

ん？

そこで俺は辺りを見回した。

「どことだ？」

俺はたしか自分の部屋で寝ていたはず。

だが、辺りを見回すと、そこは……

「闘技場？」

そう、そこはまるで、ローマ帝国を題材にした物語にでるような闘技場、いい方を変えればコロッセウム、またはコロシウムだった。・
……いや、いい方は別にいいか……

「俺はなんでこんなところに……？」

「れでいゝす、えゝんど、じえんとるめゝん!!」

この間延びした声は!!

俺は闘技場の観客席、その中で、おそらく貴賓席と呼ばれるであろう席をみた。

そこにうさみみがいた。

「これはどういうことだタバネ！」

「やあやあ、ゆっくん、ゆっくんがいけないんだよ？タバネさんはいったよ？お菓子をくれなきゃいたずらするぞ………」
「てね？」

「……いや、確かにいったが。しょうがねえだろう。前世ではハロウィンなんてやらなかったし、今では、あねきたちがいれば

やるけど、今日は俺一人だったから、菓子の用意なんてしなかったんだから。

……まあ、終わったことはもういい。

「いったい、なにをする気だ、お前は。」

「ふふふ、それはね。おっと、そろそろ来たみたいだね?」

「なんだ、ここは?」

「いったい、どうなっているのかしら?」

「なんなんだ、これは?」

ん?この声は?

声のしたほうを見ると、

「遊里！なんでここに？」

「遊里じゃない、なんでこんなところに？」

「遊里、ここはどこなんだ？」

えいと、なんで、千冬さんに、明日香に、篝がいるんだ？

「いや、なんでここにいるんだ、三人とも。」

話を聞いてみると、千冬さんは、

「私はちょうど、同僚の先生たち（女子限定）と飲み会をしていたところだ。」

噂の女子会というやつかな？まあ、一夏が心配していたから、お酒はほどほどにね。

明日香は、

「私は今日の分の勉強を終えたから、もう寝よう。」

努力家だね。花丸をあげよう。

篤は、

「ねえさんに頼んでとってもらった遊里の映像の編集を。」

………うん、とりあえず、タバネは今度殺すとして。

「どづいつことだ、タバネ？」

どづいつ用件で、このメンバーを集めたんだ？

「あ！ねえさん！！」

箒もタバネの存在に気づいたようだ。

「……………（箒に姉なんて、いや、それよりも、なんだこの懐かしい感じは。どちらにしる、あれはただものではないな…………）」

千冬さんは黙って、タバネを睨みつけている。なにやら、考え込んでいるような、観察しているような感じ。

「へ、箒にねえさんなんていたのね？」

明日香は素直に箒にねえさんがいたことに驚いているようだ。

「まあまあ、君たちには始めましてかな？箒ちゃんのおねえさんの、タバネさんだよ。よく来てくれたね？」

「お喋りはいい。状況からして、貴様がここに私たちを呼んだのはわかった……………なにが目的だ。」

おお。すげえ迫力。さすがブリュンヒルデってところか？

「そんな睨まないでよ、ちーちゃん。今説明するからさあ。」

どうでもいいけど、あの迫力にペースを崩さないなんて、微妙なところですねあいつ。

「あいにくだが、貴様に気易く」それで呼んだ理由なんだけどね？」
話しを遮るな！！」

………すげえ度胸だなあいつ。さすが神。

「君たちって、ゆっくん。ああ、遊里君のことだけど、……好きだよな？」ぼそ

「「「ぼっ／＼／＼！！」「」

な、なんだなんだ？タバネがなにかささやいたと思ったら、三人の顔が赤くなつたぞ？かせ（ry

「な、ななにをばかなことをををを！?!」

「そ、そうよ、なにを根拠に!？」

「ね、ねえさん!!急になにを!？」

本当になんなんだ?ていうか千冬さん、同様しすぎじゃね?

「まあ、まあ、それで、そんな恋する乙女「乙女いうな!!」にこれを見てもらいたいんだけど?」

タバネは真つ赤な彼女たちに、数枚の写真を渡す。なんだ、なにを渡したんだ?

真つ赤だった彼女たちは、写真を見ると、どんどん、表情を変えていく。

「……嫌な予感しかしねえ。ここはに「どこへ行くんだ、遊里?」エット、ナゼワタクシノカタヲツカムンデスカ、チフユサン?

「ど、どうしたんですか、皆さん?」

ふ、振りかえれない、なんとというか、振り返ったらぜったいにだめ

「ちげえよ、なんで、お前が俺を抱いて寝ていて、そのしゃ「ゆっくんたら、以外に激しかったね?」(ぼっ)「なにがだ、なに」ほう、いったい、なにをしていたんだ?」イヤ、チフユサン、コレニハワケガ。」

言い訳をしようと、振り向いたら、そこには

3 人の 修 羅 が いた!!

「エツト、ミナサマドウシタンデスカ?」

なぜか、3人とも日本刀を装備していた。どっから持ってきたん「俺が渡した(b y 作者)「作者あああ!!?」

「いや、さっきの話にとても、興味があつてな?」

「ええ、私もよ?」

「いったい、なにが激しかったんだ?」

ちげえよ、なんで、お前が俺を抱いて寝ていて、そのしゃ「ゆっくんたら、以外に激しかったね?」(ぼっ)「なにがだ、なに」ほう、いったい、なにをしていたんだ?」イヤ、チフユサン、コレニハワケガ。」

(タバネえええ!!)

(タバネさんはいったよ?お菓子をくれなきゃ、いたずらするぞ)・・・)って。

(いたずらってレベルじゃねえだろおお!!?)

(そんなことより、そろそろ後ろむいたほうがいんじゃないかな?)

タバネのいうとおり、後ろをむくと、

「「「O・H・A・N・A・S・Iしようか?」「「「

「いやあああああああ!!?」

「はっ！」

目を開けると、そこは見慣れた俺の部屋だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「はあ、夢かよかった。」

そうだよな、いくらなんでも、あんな状況にはならないよな。今考
えると、なんであんな状況になったかも、よくわかんないし。

ああ〜！安心したら、腹減ってきた。

俺はベッドから降りて、キッチンにむかおうとしたら、

ふにょん

「ちゃん」

ギギギギギギギギ

声のしたほうに、首をむけると、

「おはよ ゆっくん?」
俺と同じベッド)・・・(で横になっている、タバネがいた。
すると、

「ん?なんで、おまえらがいるんだ?」

「ビクッ!」

千冬さんの声が、

「いや、私たちは、この近くに用事があったんですけど。」

「ついでに遊里の家が近くにあるから寄って行くつもりです。」

「ビクビク!」

明日香と篝の声が聞こえた。そう、俺の部屋のドアの向こうから
・・・(

「まったく、南さんに聞いたが、まだ寝ているらしい。」

「たるんできますね。」

「まあまあ、どうやら昨日は徹夜していたみたいですから、しょうがないんじゃないですか?」

そうして、俺の部屋のドアは開かれた。

うん。詰んだ。

この後の記憶は俺にはない。ただ、この日から、ハロウィンの日には、お菓子を常備しておこうと思ったのはいうまでもない。

特別話 はっぴ〜にゅ〜いや〜!?(後書き)

はい、ハロウィン話でした。だいぶ、ぎりぎりだけど、終わらないうちに書いてよかった。ここに書いてある通り、3人目のヒロインは明日香にしようと思っています。……4人目作るのかな？

以上！ラドウでした！！

第4話 なんだかんだで巻き込まれるのがオリ主なんだ・・・ざまあ（by作者

孝さん、陣八さん感想ありがとうございます。大変励みになります。
これからもよろしくねがいます。

前回のあらすじ

うさみみからいろいろ説明された。詳しくは前話を見てね。（おい

第4話 なんだかんだで巻き込まれるのがオリ主なんだ・・・ざまあ(bv作者

サイド：遊里

.....

う〜み〜は〜ひろい〜な〜 お〜き〜いいな〜 いて〜みたい〜
っ!.....あれっ!もう始まつてる!?

こんにちはのひとはこんにちは。こんばんわのひとはこんばんわ。
グンナイの人は寝させねえっ!今回デュエルアカデミアに入学する
更識遊里だ。

無事デュエルアカデミアに受かったんだぜなんかす
まん。

所属はライエローになった。まあ、学科一位で、クロノスに1k
i111までしたのにオシリスレッドになったら.....ふふふ
それで今は俺はアカデミア行きの船に乗っている。それで今俺はな
にをしているかというと、

「お〜い!どこいったんだ遊里〜!~!」

はい、決闘バカことGXの主人公、『結城十代』から隠れています。
何故、彼のこと知っているかというところ……回想をどうぞ。

〈試験会場〉

タバネの話が終わった後、俺たちは試験会場の一夏たちの元へ戻った。大分話しこんでいたからもう見んな帰ったんじゃないかと思っただが、タバネが俺たちのいた空間以外の時間を止めていたため大丈夫だそうだ。なんとというご都合主義（笑）

さて、一夏はつと、「おーい！ ゆうりー！！」っ！あの野郎……。
人の名前を大声で叫ぶなつての。

周りの連中がこっち向いてんじゃないか。俺と篤は小走りで一夏に近づく。

「おい、こら阿呆。」

「急に罵り!？」

「当たり前だ。人の名前大声で呼びやがって。恥ずかしい。」

「一夏は少し納得がいかなさそうだったが、「悪い。」と謝ってくれた。素直に謝れるのは一夏のいいところだよな。うん。」

「そつえば話しはもういいのか？随分早く終わったみたいだけど。」

早く・・・ああ、タバネのおかげで時間止まってたんだっけ。

「ああ、ちょっとした確認をしてただけだから。な、箒。」

「そ、そつだな遊里。」

俺の突然のフリにどもりながらも答えてくれる箒。すると、

「確認って、お前ら面識あったのか？」

「あつ！俺も気になる。」

「「っ!？」」

し、しまった。なにも考えてなかったあああ!!?!

ど、どうしよう。横にいる篝を見ると、

「・・・・・・・・。。。」

絶るような目で俺を見ていた。

って、俺ツすか!？くっ！えっと・・・・・・・・そうだ!

「あゝ、昔、ガキの頃に偶然公園で遊んだことがあってな？そんなきに友達になったんだが、諸事情で俺がそこから離れることになってなあ。別れの挨拶もできないまま、別れることになっちまってなあ。」

そういつて俺は篝の顔をみる。

「そ、そうなんだ。突然別れることになってしまったから、そのときの詳しい話を聞いていたんだ。」

よし。うまくあわせてくれたな。一夏も弾も納得してくれたようだ。

「へ。よかったじゃないか。昔の友達に会えて。」

「つまらねえなあ。」

「なにがだ弾？」

「だってよく。俺はてつきり簿が遊里に一目ぼれたんだと思ったんだが。」

弾の発言を聞いた簿の顔がものすごい勢いで真っ赤になった。

「な、ななななにをいつてるんだ／＼／＼／＼！そ、そんなことあるわけなかるう／＼／＼！？」

「……いや、そんなはつきりいわんでも。おにいさんきずついちゃうぜ？」（涙）

まあ、かわいそうだから、ここはフォローしといてやるか。

「そんなばかな。」

「ば、ばかとはなんだ！ばかとは！！」

「ええ！？」

なんでフォローしたのに怒られてんの、俺！？

そのときの一夏は、

（篝の今の反応。ひよつとして遊里に気がある？……まずい！？これは千冬姉に報告すべきか？）

千冬に報告するか考え込んだ。一夏君は自分以外の恋愛ことには鋭いようです）

篝の突然の怒りに困惑していると、

「おーい……！」

誰かが呼ぶ声が聞こえる。た、助かった。なんで怒ってたのか知らないが、篝の注意が声のしたほうにいつてくれたし。俺も声のしたほうに首をむけると、

「……………」

むこうから三人組が歩いてきた。

その内の二人は別にいい。

一人は短く切った黒い髪に、理知的な瞳が印象的な青年。どことなく、インテリという言葉が似合いそうな感じがするが、どことなく空気が薄っ、これ以上はかわいそうだからいわないどころ。

もう一人は水色の髪に、メガネをかけた人物。どこかオドオドしていて小柄な体は、青年というより、少年という言葉が似合いそう。

問題は三人目

前世では「クラゲ」(…………)と揶揄された、茶髪に、活発な感じの瞳。全体的に、「腕白小僧」という感じがする、この世界の主人公。

なんで、

なんで、

「おい、お前さっき、決闘していたやつだよな？」

なんで、結城十代が来るんだよおお!!?!あれか!?!クロノスに勝ったからか?アースを使ったから?それとも電車が遅れたからなのか?

まあ、とりあえず、

「なあ、決闘しようぜ!!」

「いや、だれだよ?」

自己紹介くらいしようぜ?

「いやあ、悪い悪い、つい興奮しちゃって。」

まったく、さすがに、自己紹介もなしに、決闘を申し込むなんて礼儀知らずだろう。まあこいつは悪気がなかったんだろうが。

「じゃあ自己紹介な。俺の名前は結城十代。特技は決闘、好きなものは海老フライと決闘、三度の飯より決闘が好きな決闘者だ!!」

知ってるわ、決闘バカ。というか、自己紹介に決闘って言葉入りすぎじゃね？

「次はボクっすね？僕の名前は丸藤翔まるふじしやうっす！さっきは兄貴がごめんなさいっす。」

「兄貴？名字が違うようだが？」

箒が翔の言葉に箒が首を傾げる。ああ、こいつは原作知らないんだ

っけか。

「兄貴の決闘の腕に一目ぼれしたんス！それで兄貴と呼ばせてもら
うようになったんスよ。」

「そ、そうか。よかつたな？」

「はいっス！！」

一夏は戸惑いながらも、翔に言葉を賭ける。若干引いてんなあれ。

「最後は俺か。」

最後の一人が自己紹介を始める。

「俺は三沢大地。趣味は決闘理論の研究かな？よろしくな、1番君
に、8番君に、12番君に、24番君？」

いや、番号で呼ぶなよ。いくら自己紹介が終わってないからって。

ちなみに後でだれが何番だったのか聞いたら、

24番？一夏

12番？弾

8番？筭

だったらしい。さりげなく筭成績いいな……。

その後、俺たちの自己紹介が終わると、

「じゃあ、決闘しようぜ！！」

………。どんだけ決闘バカなんだこいつ。

「とりあえず、落ち着け。だいたいなんで俺なんだ？」

それをいうと「なにいつてんだこいつ」「みたいな目で見られた。いや、一応理由は大体わかってんだけどな？」

「俺と同じヒーロー使いだし、強いやつと戦いのは決闘者として当然だろ？それにあのヒーローもまた見たいしな！！」

それって……

「こいつのことか？」

俺はアースのカードを見せる。

「そう、こいつだよ、こいつ！！かつこいいよなあ！！」

ふむ。なんかこそばゆいな。

「本当にアースのカードだ。一体どうやった……………」

三沢はアースの入手ルートが気になっているようだ。とりあえず、タバネが用意してくれた、入手ルートを話す。三沢は、「ペガサス会長も関わった大会か。なら納得だな。」と納得してくれた。それはそうと、

—————

さっきからこちらを見ている翔の視線が気になる。とりあえず、

「俺にそっちの趣味はないぞ、翔。」

俺はノンケだと伝えなくては。

すると翔はあわてて俺の言葉を否定する。

「ち、ちがうっス!? 更識君って「遊里でいい。」遊里君って、ひよってして、プロ決闘者の『更識楯無』さんの弟さんっスか?」

……へえ。

「よくわかったな? 確かに名字は同じだが、俺とあねきは似てないから、誰も気づかないと思ったんだが?」

三沢と十代がなにか、驚いてるが、今はいいか。

「ああ、ボクのおにいさんが、楯無さんと知り合いで、ボクも話す機会があったんす。それで遊里君の話を聞いたことがあって。お

にいさんは楯無さんの話を聞いて、アカデミアに来たらずえび決闘したいってたっスよ？」

「……………なるほど。」

あねきエ……………

どうすんだよ！？なんか皇帝と決闘フラグたってんじゃん。俺の平穏な生活がorz……………。

俺が心の中で落ち込んでいると、

「すげ〜な、プロ決闘者の弟なのか〜。ますます決闘したくなってきたぜ。」

なんか主人公殿がさらにやる気になっていらっしやるうっ！？

俺としては決闘はしてもいいんだが、こいつと一緒にいたら、事件に巻き込まれそうだしなあ。

しかたない……………

「そんなに俺と決闘したいのか？」

「おう！！」

なるほど。そうかそうか。

「だが断る！！」

「ええっ！？」

十代が驚いてる。まあ、今は明らかに受ける流れだったからしょうがないだろう。

「なんでだよ！？」

どうやら十代は納得いかないらしい。

「いや、しろぬ、クロノスとの決闘で全力出しすぎて疲れた。これから用事もあるし。」

これは本当。かあさんたちが、合格の前祝いとかいって、門下生を巻き込んで、宴会の用意をしているらしい。

それを聞いたときは、「確かに落ちる気はねえが、気早すぎね？」
と思ったのはいうまでもない。

それはともかく
閑話休題

ということ、十代の決闘を断る理由は一応あるのだ。

「……まあ、こいつと関わり合いになりたくないのも断る理由の一つなんだが。」

「と、いうわけだ。悪いな。」

「え、少しくらいいいじゃねえか。」

まだ諦めきれないようだ。しつこいな。

「兄貴無理いつちやだめっスよ？」

「翔……。」

翔が十代をいさめてくれた。ナイスだ翔。これでこゝそれに決闘はアカデミアにいつてからでもいいじゃないっスか。「しょおおおお！！！」

「う、ん、それもそうだな。じゃあ、アカデミアで決闘しようぜ？」

う、ん、こいつと関わり合いになりたくたいが、ここでハッキリ断るのもなんか空気読めないやつみたいだし。

「ここは日本人お得意の「お茶を濁す」を発動するか。

「あゝ。機会があればな？」

「おっしや、約束だぜ!!」

「.....」

「お茶を濁す」は無効化されたようだ.....。

というわけだ。

で、なんで十代から隠れているのかというと、このままでは、十代に巻き込まれるかもしれないので、十代との接触を避け、約束を有耶無耶にしてしまおうというわけ。これで俺にも平穩が訪れる。

おい、誰だ今「もう諦めるよ。」っていったやつは。諦めねえぞ俺は。

『まもなく、デュエルアカデミアに到着です。』

船内アナウンスが流れる。おっと、アカデミアに到着したようだ。自分の部屋に戻って、荷物をまとめなくては。

まってるよアカデミア！まってるよ、俺の平穩！！ふふ、ふふふ、
ハハハハハハアアー！！

「おい、誰だ貴様!!」

「遊里!!」

「遊里君!?!」

もう、くじけそうだぜ………。

第4話 なんだかんだで巻き込まれるのがオリ主なんだ・・・ざまあ（b y 作者

どうでしたでしょうか。十代君との絡みは。ちなみに主人公は十代に絡まれている認識です。（笑）もっとおもしろくしたかったんだが・・・

どうあらがっても、結局は巻き込まれる主人公。はたしてどうなってしまうのか？

今回はサンダーに進化前の鳥頭と邂逅です。決闘は未定。

以上、ラドウでした！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3263w/>

とある転生者は決闘者で・・・

2011年11月6日03時07分発行